
TRUE ANGEL

三九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUE ANGEL

【Nコード】

N2311I

【作者名】

三九

【あらすじ】

この世界の真実を、いったいどこまで知っているというのだろうか。

この世界の真実は、いったいどこまで自由の可能性なのだろうか。
この世界の真実に、いったいどこまで行けば辿り着けるのだろうか。

この世界の真実が、いったい誰の手によって生み出されたものなのか、それを知り得るのは如何なる者か。

まだ誰も、この世界の真実が歪められたものだとは気付いていない。

人も、神の御遣いであるはずの天使すらも。

プロローグ

頭上よりも遙か高き天井に取り付けられた明かり取りの天窓から、朝の光が差し込んでいる。

そのすぐ下の壁には、花のような模様の丸いステンドグラス。色とりどりの光は、床に柔らかな模様を描いていた。

それはとても爽やかな春の日差しだが、その部屋の中に落ちた光は途端に春の爽やかさを打ち消して、神秘的な輝きへと変貌する。そんな錯覚を起こす程に重く厳かな空気に満ちた部屋で、二つの影が向き合っていた。

片方は小柄な老人。片方は背の高い若者。

シンと静まり返ったその部屋には、二人以外の人影は見当たらない。

たった二人で向き合うにはあまりにも広すぎるその部屋は、そこだけ外界から切り取られたかのようなだ。

呼吸をすることすら憚られるような、重く長い沈黙をものともせず、老人は長く伸ばした白い髭を撫でながら、若者に虎を彷彿とさせる鋭い瞳を向けた。

一段高い場所に設置された、飾り気のない大きな椅子に身を沈めた姿は、小柄な老人の姿をより一層小さく映す。

しかし、その全身から醸し出す雰囲気は、彼が決してただの人物ではないと物語っている。

椅子に座っているため分かり辛いのが、老人の背筋はしゃんと伸び、立ち上がれば年齢など感じさせない立ち振舞いを見せてくれるだろう。

髭を撫でる手はそのままに、老人は唇を開いた。

「お主のしたことは、決して許されることではない。」

が、慈悲の手は誰にも等しく差し伸べられよう。お主に懺悔する気持ちが残っているのならば……」

老人は一度言葉を切り、白く長い眉を片方だけ跳ね上げて目の前の相手を見遣る。

若者はわずかに俯き顔に髪陰がかかっており、老人からはその表情を窺い知ることができない。

しかしそのとき、若者の頬を伝い一筋の雫が滴り落ちた。

それは青年の足元を丸く濡らし、しかしすぐに乾いて消える。

小刻みに震える肩と、その背に生えた白い大きな翼。

それを目にして、老人は再び言葉を紡ぎ出す。

「今一度、大空を舞うがよい……墮天使よ」

老人のその言葉に、翼の生えた若者は初めて口端を持ち上げて笑った。

彼は何を思っただけ笑みを浮かべたのか。釈放された喜びか、己の罪を呪う自嘲か。

この世の全てを見透かすような目を持った老人にも、彼の心を理解することはできなかった。

この日。長い時を経て、一人の墮天使が闇の牢獄より解き放たれた。

胡乱

白い……白い霧が辺りを覆っていて、ここが一体どこなのかまったく判らない。

ただ、自分が仰向けに寝ていること、身体がひどく軽くなったように、どこか浮遊感を感じることなら判る。

「……………」

そして何処か遠くで、誰かが自分を呼んでいるような声と……

「いつまで寝てんですかさっさと起きてください」

どぶっ！

「……………っっ！！」

自分がその声の主に、思いっきり腹を踏ん付けられたことだけは解った。

「って……てめえっ！ いきなり何しやがんだ！」

彼は踏み付けられてズキズキと痛む腹を両腕で庇うように押さえ、なんとか起き上がって相手を睨み付ける。

彼が着ている学生服には、くっきりと二九センチの靴跡が残っていた。

きつく睨まれているにも拘らず、靴跡の主は怯むことなく、逆に思わず鳥肌が立つほどにこやかな笑みを浮かべて、

「いやあ、貴方が中々起きなかったもんで、つい実力公使を」

などとのたまった。

それを聞いて、腹を踏ん付けられた方の青年……まだ少年と言ってもいい年頃の男は、怒りを露にして怒鳴る。

「なあにが実力公使だこの変態！

いきなり人の腹をしかも初対面のくせに踏ん付けやがって！

ごめんなさいすみませんでした二度としません平にご容赦くださいぐらい言ったらどうだ！」

霧のためたう静かな空間に、少年の声が朗々と響く。

その文句はほぼワンブレス。中々の早口である。

とりあえず言うだけ言って落ち着いたのか、少年は改めてまじまじと相手を観察してみた。

肩まで伸ばしたストレートの黒い髪が左側だけ外に跳ねていて、顔の半分を覆う程にでかい重そうな黒縁の眼鏡まではよしとしよう。着ている服は、昔話で魔法使いなどが着ていそうな、純白のローブ……いい歳こいてこんなの着て歩いたら、筋金入りのコスチュームプレイヤーだと思われるだろう。

しかしそれよりも更に目を引くのが、背中に見える大きな白い翼だった。

変態決定。

どこで売ってるおもちゃか気にならないではないが、大の大人が

そんなもん身に付けて喜んでるなんて、きっと変態に違いない。
どうやら先程勢いで言った単語は、かなりの的を射ていたらしい。
しかし変態の割には、すらりと背が高く、顔も悪くないのが少し
気に入らない。

何を食べたらそんなにでかくなれるんだと、中肉中背の少年はこ
っそり羨望を覚えた。

「変態って……僕は天使です。変態じゃありませんよ」

少年の視線に疑わしさを感じたのだろう。自称天使は微笑みを崩
さず語りかける。

内容が内容だけに、余計に不信感を募らせていることには、まっ
たく気付いていないようだ。

案の定、少年はより一層眉間の皺を深くして言った。

「ほー、そーか、天使か。

もう春だし、変態の一人や二人、突然変異の自然発生しててもお
かしくねえわな」

少年の言葉が終わると同時に、自称天使は肩の高さではたはたと
手を振った。

「だから変態じゃないですってば」

変態と決め付けてかかってくる少年の言葉を、天使とやらは否定
する。

が、少年はまるで聞いていない。

少年はその天使とやらを無視して、ふと思い出したように辺りを
見回した。

瞳に映るのは相変わらず白い霧だけで、自分と天使とやら以外、他には何も見えなかった。

独り言と言うには大きすぎる声で、少年は呟く。

「ここ何処だよ。ってゆーか、何で俺こんなところにいんだよ。マジ訳わかんね」

「ここは……」

「変態の住みか？」

「違います！」

計らずも少年の問いに答える形で口を開いた自称天使の声を遮り、少年は天使とやらには見向きもしないで、すつとぼけた質問をした。みた。

その言葉に間髪入れずにツツコミを入れ、自称天使は大きく咳払いを一つ。

「ここは神の国カエルス。あなた方の言葉で言う天国ですよ、木高時雨さん」

「なっ……」

その言葉に少年……木高時雨は絶句する。

「な……何で変態が俺の名前を……!?!?」

「驚くべきところはそっちですか」

確かに初対面の相手に、名乗ってもいないはずの名を呼ばれるのは、充分驚くに値することである。

しかしまさか、まずそちらに驚愕を示すとは。

まるで予想もしていなかった時雨の言葉に、天使とやらはがっくりと肩を落とした。

天国と聞いて驚き、慌てふためく少年の図を予想していたのだが。

初対面に怒鳴り付けたり、いきなり変態呼ばわりなど、実はそれなりに図太い人間だとは思っていたが、ここまで言っても気付かないとは……いや、敢えて気付かないふりをしているのか？

自称天使はそんなことを脳内で悩み、しかし自分もつい先程、その初対面を踏ん付けたという図太い行動は、既に忘れている。

それはもう、綺麗さっぱりと。

「はぁ……僕は天使ですから、人々の魂の管理も僕の仕事なんです」

この少年が人並み外れて図太いだけだ、と結論付けた自称天使はにこやかにそう言って、どこからともなく黒いメモ帳を取り出し、ぱらぱらとページを捲りだした。

「えー、木高時雨、十七歳、高校二年。本日午前八時三二分、通学途中に死亡しました」

「ちょっと待て」

メモ帳の内容を音読する自称天使の目の前に、時雨の手の平が突き付けられる。

こめかみを指で押さえ、沈痛な面持ちで待ったをかける時雨に、自称天使は極めて明るい表情で答えた。

「何か？」

人と話すときは笑顔が基本。

しかし、それも時と場合と会話の内容により変化する。

特に今回のような、非常にデリケートな話題では。

自分が死んだなどという話を笑顔で聞かされて、納得する人間はいないだろう。特別に温厚かつ器の大きな人物でもない限り。

もちろん、時雨はそんな希少な人種ではない。

自称天使に向かって、勢い良く顔を上げ血相を変えて叫んだ。

「何か？　じゃないわい！」

何なんだよその通学途中に死亡つつーのは！

俺はここにこうして生きてるじゃんかよ！」

そう言いながら鼻息も荒く、時雨は自分の胸部を平手で叩き、片足で霧に覆われた地面を踏み付ける。

そんな時雨の剣幕に圧されることもなく、自称天使はあくまでにこやかに言った。

「言葉の通りですよ。貴方は、死んで幽霊になったんです」

その言葉を聞いた瞬間、時雨は天使とやらの胸ぐらを引っ掴み、血走った目ですずいっと詰め寄った。

「俺が幽霊だあ！？　ふざけたことぬかすんじゃねえ！

大体、俺が死んだなんて証拠はあんのかよ！」

唾が飛びそうな勢いである。

しかし急に胸ぐら引っ掴まれても、その天使とやらは怒ることも

焦ることもなく、静かに胸ぐら掴む時雨の手を外す。

「では現場を見てみましょうか。これは監視カメラが捕らえた映像です」

まるでニュースキャスターが言いそうな台詞を言いながら、彼はポケットから取り出した小さな四角いものを時雨に見せた。これは……

「……iPod?」

正しくiPodだが、天使とやらは「なんですかそれは?」と首を傾げている。

「これは監視カメラから録画した映像を映す道具ですよ。」

貴方みたいに、実際に見ないと理解していただけない方が多くて」

言いながらスイッチを押すと、上から見下ろす角度で撮影されたと思しき映像が、小さな画面に再生される。

映像の中で、一軒の家から時雨が出てきて走っていく。今朝の通学の様子が映っているのだ。

そして走ることに六秒。

いきなり角から曲がってきたトラックに跳ねとばされて地に臥した。

「家出た直後っ!？」

時雨の驚愕の声が辺りに響き渡った。

残酷だとは思いますが、現状を理解してもらうには、これが一番手っ取り早い方法なのだ。

天使とやらはiPodもどきをポケットに仕舞い時雨を見遣る。
時雨はまじまじと自分の手を見て、ゆっくりと自分の身体に触れてみた。

自分の身体はここにある。触れた手は確かに己の身体に触った感触があった。

しかしその手は、心霊写真の幽霊よろしく、重ねた部分が一瞬だけ透けて見えたのだった。

「……マジかよ」

一度確認すると、あちこち触ってみて確かめる。

だが、やはり結果は同じだった。

こうなると、いよいよ自分が幽霊だという事実を認めざるをえなくなってきた。

しかし当たり前かもしれないが、そう簡単に死を受け入れることができるはずもなく。

時雨はその場にしゃがみ込み、頭を抱えて虚ろな目をしてぶつぶつと呟き始めた。

「夢……これは夢だ。そうに違いない。とゆーか、現実であってたまるか」

既に自分を無視して独り呟く時雨を、自称天使は不思議なものを
見るような目で見ていた。

ここまで頑なな人間も珍しい。

大抵の者は、映像を見せられると取り乱して泣き喚くものなのだが。

そのまま幾何かの時が過ぎた頃。
突然辺りを包む霧が濃度を増した。

自称天使は慌しく周囲に目を配ると、何かの気配を感じ取ったのか、今までにない程真剣な表情で時雨を呼んだ。

「時雨、少し場所を変えましょうか。いつまでもここにいると危険です」

その真剣な口調に何かを感じ取ったのか、時雨はおとなしく顔を上げ、

「いきなり呼び捨てか」

とりあえずツツコミを入れておく。

しかし天使はそれに構わず時雨の手を取ると、早口で説明した。

「小鬼どもが集まってきています。

どうやら、新鮮な魂の存在に気付いたようですね」

天使は時雨を見遣り、手を引いて立ち上がらせる。

渋々立ち上がった時雨の腕を掴んだまま、背中に生えた大きな羽をはばたかせた。

一度、二度、力強く羽が翻り、ゆっくりと身体が宙に浮く。もちろん、時雨の手を引いたままで。

足が地面から離れたことを確認して時雨が喚きだした。

「とっ……飛んでる！」

「当たり前ですよ。天使なんですから」

「だって、うわっ飛んでる！ 飛んでるよおい！
落ちる！ 落ちるってばこら！」

驚いてじたばたと暴れる時雨に、天使は嫌そうな顔をして、

「あんまり暴れると叩き落としますよ？」

と脅しをかけてみる。

この自称天使ならばやりかねない……

本気でそう思ったのだろう。

叩き落とされるのも嫌なので、時雨はおとなしく従った。

落ち着いて深呼吸してみれば、絶叫マシンに乗っているわけでもなし、あれ程騒いでいた自分が馬鹿らしく思える。

だが飛行中ただ黙っているのも退屈なので、時雨は頭に浮かんだ疑問を口にしてみた。

「……これからどこ行くんだよ」

無視されるかとも思ったが、返事はすぐ返ってきた。

「もちろん天国ですよ」

「ふーん……地獄に落とされなかったただけマシか」

時雨の声は落ち着いていたものの、未だ天使の言葉を認めた訳ではなかった。

天使の言葉を現実として認めたくないというのが本音だが、今の状況を夢で済ますには、あまりにも現実的すぎたのだ。

肌で感じる風、翼のはばたく音、手を握っている感触や自分のこの脱力感など、現実で感じるあらゆる感覚が再現される夢など、今まで見たことがない。

ああ、たった十七年か俺の人生。

いくらなんでも短すぎやしないか？

十七つつつたら、青春真っ盛り。将来の希望を胸に抱いて、恋に勉強に色々やってる年ごろじゃないのか？

そんなときに死ぬなんて、人生最大の不幸だ……

など取り留めのないことを考えていると、しばらくして目の前に巨大な影が見えてきた。

よく見ると、それは真ん中で区切れていて、左右対称に神話をモチーフとした、厳かな彫刻が彫ってある。

いったい何だろうか。巨大な石板のようだが……

時雨がじつと謎の石板を見ていると、頭上から天使の声が聞こえた。

「あれが天国への入り口、カエルス的大门ですよ」

門ということは、あれが扉なのだろうか。

随分と巨大な扉を造ったものである。いったいどんな巨人が出入りすると言うのだ。

時雨はその五〇メートルくらいはある扉を、呆れたような目で見つめた。

これ程のものを造れるとなると、相当な権力者か金の有り余った富豪か。

荘厳かつ巨大な建造物というものは、どこにおいても富と権力の象徴らしい。

入り口が見えたと言っても、そこに着くまでにはもう少し時間がかかる。

その間は互いに何も喋らず、しばらく飛行した後やっと巨大な扉の近くまで来た。

ゆっくりと下降していつて、少し離れたところに降り立つ。

軽くジャンプしたりして、時雨は地に足を付ける感触を確かめた。辺りは霧に覆われ、地面はまるで雲のように見える。

床が抜けて、そのまま地上まで落ちてしまいそうだが、靴を通して足に伝わる感触は、硬い土の地面そのものだった。

時雨が足踏みしている間に、天使はさっさと扉に向かって歩いて行ってしまった。

それに気付いた時雨は足早に後を追う。

二人は特に言葉を交わさずに扉へと向かった。

壁のように巨大な扉に背を預けて立っている、一人の少年がいた。目を閉じ、腕を組んで静かに佇んでいる。

その顔は中性的で、少々幼さの残る、あどけない顔立ちだった。色素の薄い、金に近い茶色の髪を風に遊ばせていたその人物は、何かを感じ取りずっと目を開いた。

丁度、時雨たちが扉の前まで歩いて来たところだ。

その男と時雨たちは、向かい合う形で対峙した。

「彼が門番さんですよ」

と、小さな声で天使が言った。

その言葉に、時雨は扉の前に立っている男を見る。

見た限りでは、相手の方が自分より身長がやや低いこともあり、自分と同じかもう少し年下に見える。

その男の背中には、隣に立つ天使のような、白い翼はなかった。あの門番は天使ではないのだろうかと疑問に思ったが、それはなんとなく口にしなかった。

何故と問われれば理由は解らないが、直感的に訊いてはいけないことのような気がしたのだ。

時雨の隣に立っていた天使が、ゆっくりと門番の方へと歩み寄る。門番は動かない。

そして、天使と門番が正面から対峙する。

門番はまるで怒っているかのような表情で天使を見ているのに対し、天使は悲しむような、哀れむような複雑な表情をしている。

離れたところに立っている時雨からは、それは見えていないだろう。

ほんの数瞬の睨み合いの後、門番は無言で道を譲り、扉に手を付いた。

さして力を込めた様子もないのだが、門番が押すと巨大な扉は音もなく開いた。

「……さ、時雨、行きますよ」

天使が振り返って時雨を呼ぶ。

扉が開くのをぼーっと見ていた時雨は、その声を聞いて慌てて天使の許へと歩いてきた。

時雨が来るまで待ってから、天使は扉をくぐる。

その後に時雨が続く。

時雨が扉をくぐるとき、門番が天使をじっと見つめていたような気がした。

眉をひそめ小さく首を捻りながらも、時雨は何も言わずにその場を後にした。

扉をくぐると、時雨は差し込んだ光の眩しさに目を細めた。

明るい光と穏やかな風が満ちていて、今までいた霧の中とは全く違った雰囲気を感じ出している。

道行く人々は穏やかに笑い、美しく着飾った天使が空を舞う。

目の前の変態天使や先程の門番は、どちらかと言えば地味であることが判った。

レンガ造りの堀に囲まれ、緑の芝生の中央には大きな花壇が鮮やかな花を抱いている。

ここはちよつとした広場のようだ。

カフェでも飲みながら散歩するのに丁度良い。

実際、散歩している風の人や天使がいる。

普通の人々に交じって羽の生えた人が歩いている光景は、何とも言い難い不思議な気分させる。

珍しそうに時雨が辺りを見回すのも気にせず、天使はどんどん先へ進んで行く。

時雨は、大分離れた場所に天使の背中を見付けて、慌ててその後を追った。

整然と敷き詰められた石畳を歩いていくと、市街地のような場所に出た。

頭上にそびえる高層ビルに、華やかに飾り付けたショーウィンドウ。

よくよく見れば、ジュースの自動販売機や銀行のATMのようなものであるではないか。

そこがあまりにも普通の街並みすぎて、余計にこれは夢なのではないかという思いが頭を過る。

だが、人々から突き刺さる好奇の視線は夢などではなく、現実のものだった。

そんなに学ラン姿の自分が珍しいのかと思ったが、どうやら違うようだ。

どちらかと言えば、人々は時雨よりもその前を歩く天使に注目している。

見ず知らずの通行人から聞こえるヒソヒソ話と、そこから感じるいくつかの視線。

その奇妙な雰囲気になれなくなったのか、時雨は天使に話しかけた。

「……なあ、さっきから見られてるけど、お前って実はすっぱー有名人？」

すると天使は顔だけ時雨の方に向けて苦笑してみせた。

「ええまあ、有名と言えば有名でしょうね。
色んな意味で」

「……………」

その、色んな意味とは一体何なのか気になるところではあるが、あまりしつこく聞いて良い雰囲気でもなさそうだ。
他に何か話題はないかと思案していた時雨だが、ようやく目の前の天使の名前を聞いていないことに気が付いた。

「そういえば俺、まだあんたの名前聞いてなかったよな。なんて名前？」

しかし天使は問いには答えず、はぐらかすように笑う。

「別にそう長い付き合いになる訳じゃないんですから、名前なんてどうでもいいじゃないですか」

そう言ってすぐに前を向いてしまった。

「何て呼べばいいんだよ」

一人で取り残された形の時雨の呟きに、天使は前を向いたままでただ一言、「好きに呼んでください」と言った。

それが気に入らなかったのか、時雨は眉間に皺を寄せて天使を睨み付ける。

直後に何事か思い付き、ニヤリと口の端を持ち上げ右手の人指し指をピンと立てて、きっぱりはっきり言い放った。

「んじゃあ、ポチ」

ずがしやあつ

時雨の言葉を聞いた瞬間、天使は前につんのめり盛大に砂埃を上げて転んだ。

中々派手なりアクションをしてくれる。

しかし命名ポチはすぐさまがばあつと起き上がり、ずいっと時雨に詰め寄って怒りを露に叫んだ。

「何ですかそのポチっていうのは！」

その言葉に、しかし時雨は怯む様子もなくあっけらかんと答える。

「何って、呼び名。好きに呼んでいいんだろ？ 俺、犬好きだし」

犬と言えばポチ。いやハチ公も捨てがたい。

時雨の反省も何もない態度に、天使はこめかみを押さえつつ怒りとも呆れともつかない溜め息を吐いた。

「……もつと違うのはいんですか」

すると時雨はこれ以上ないくらい真面目な顔で、目の前に右手の

人差し指をびしっと立てて、再びきっぱりはっきり言った。

「タマとか」

「ルシエルですっ！」

「最初からそう言えよ」

「……………」

ルシエルはがっくりと肩を落とし、疲れたような溜め息を吐くと時雨に背を向けて歩きだした。

そんな天使を見て、時雨は勝ち誇った笑みを浮かべ、得意げに鼻歌など歌いながらその後を追う。

しばらく歩くと、人通りが少なくなってきた。

建築物が減った代わりに緑が増え、なんとも田舎のような雰囲気である。

のどかと言えはのどかだが、時雨は寂しい景色だとしか感じなかった。

そんな中に、ぽつんと建っている一軒の家があった。

新しくもなく古くもない、ただそこにあるだけの小さな家。

ルシエルは躊躇いもせずその入り口を開けた。

「ま、狭いところですがゆっくりしてってくださいね」

そう言うときさっさと中に入っていったしまった。

時雨もその後を追う。

確かに狭い家だった。

独り暮らしにしても狭すぎる。

その原因は、入った瞬間に解った。

元から狭い家の中に、モノが溢れ返っているのだ。

置き場がないのか、廊下に無造作に重ねられた本を見て、時雨はそれに気付いた。

よく見れば、本だけでなく、何に使うのかも定かではない様々ながらくたも転がっている。

どこからか拾ってきたのか、それとも自ら購入したのか。

窓枠にずらりと並んだ親指サイズのこけしの群れを見て、時雨は疲れたような溜め息を吐いた。

なんとも息が詰まりそうで、時雨はシャツの襟元を緩める。

因みに学ランのボタンは最初から全開だ。

短い廊下を進み、ドアをくぐるとこれまた狭い部屋だった。

床は既に本で埋もれている。

「……お前、こんな狭い部屋で苦しくない？」

思わず口をついて出た疑問に、ルシエルは、まだがらくたに埋もれていない椅子を差し出しながら答えた。

「仕方ないでしょう、広い家は家賃高いんですから」

その、なんとも庶民じみた答えに、時雨は思わず言葉に詰まる。

天使っていうのは、もっとうこう、神殿っぽいところに住んでるものじゃないのか？

などと思いつつも、差し出された椅子に座る。

小さなテーブルを挟んで、向かい側にルシエルが座るのを待ってから、時雨は口を開いた。

「……なあ、俺が死んだって話だけど……」

「ええ、本当ですよ。通学途中に殺されました」

時雨が言い終わらないうちに、ルシエルは笑みを崩さず言った。
その言葉を聞き、時雨がわずかに眉をひそめる。

「殺された？　でもあれ、さっきの事故ってたように見えたんだけど」

あのiPodもどきに映った映像では、確かに自分はトラックに跳ねられていた。

まさかあれは故意に起こした事故だとも言うのか。

ルシエルはそんな時雨の様子を見ながら、なるべくゆっくりと話しはじめた。

「いいですか？　ここはカエルス……貴方たちの言うところの天国です。カエルスには対を成す世界があり、それがアビス。言うなれば地獄です。

アビスには、無数の生き物が住んでいます、その中の一種に魔虫という虫がいます」

「……ふーん」

頬杖をついて時折相槌を打ち、あまり気のない返事をしながら、時雨はルシエルの話を聞いていた。

「この魔虫は生きた人間に卵を生みつけ、孵化させます。
この卵が孵化するための条件は一つ。
生みつけた人間に悪事をさせること」

「悪事？」

人が何か悪いことをしたからといって、それが何故卵の孵化に繋がるのかは知らないが、初めて聞く犯罪の説に少しばかり興味があった。

ルシエルの話は続く。

なんでも、人間の負のエネルギーと、その人間の悪事で奪った他者の寿命の残りを得ることによって、初めて魔虫は孵化できるんだとか。

「悪事といっても色々ありますね。

まあ、世の殺人事件は大抵魔虫の影響を受けていると思って間違いないですよ」

「つてことは、俺が死んだのは偶然起きた事故じゃなくて、その虫のせいだってことなのか？」

ようやくこの非現実的な状況に慣れてきたのか、時雨は真面目な顔で聞き返した。

「ええ、この場合、貴方は定命で生を全うしてないので、こちら側としても死んでもらっては困るんですよ」

こういうアビス絡みの突発的な事件で定命——いわゆる寿命——に関係なく死んでしまった場合、その人間を生き返らせることができるんだとか。

その方法はただ一つ。

孵化した魔虫を殺すこと。

何やら殺伐としてはいるが、自分の命が懸かっているのだ。文句など言えるはずもない。

魔虫は暫らく人間界に留まり、新たな卵を産むそうだ。

なんとかその前に虫を退治したい。

ルシエルは神殿に行って、人間界に降りる許可を取ってくると言った。

「少し待っててくださいね？」

などと言いつつ家の外に出ると、背中の羽を大きく広げて飛び去っていった。

後に残された時雨は、やっぱり天国には神殿があるんだなあ……などと呑気に考えながら、ルシエルが戻ってくるまで暇を持て余すこととなった。

ルシエルはしばらく一人で空を飛ぶ感覚を楽しんだ。

なにしろ久しぶりの飛行だ。

やはり空を飛ぶのは、一人でのもろもり飛ぶのがいい。

頭上を過ぎる空の青と、眼下に広がる草葉の緑。

鳥が空を飛ぶようになったのは、ひょっとしたらこんな景色が見たかったからなのかもしれない。

そんなことを考えている間に、遠くに神殿が見えてきた。

神殿の周りには他に建物はなく、日の光を受けて碧色に輝く木々の葉が並んでいる。

小高い丘の上で、神の住まう社は眩しいほどに真白く佇んでいた。その様相は西洋の神話を彷彿とさせる。

恐らく、多くの人々が描くイメージと同じではないだろうか。

荘厳な彫刻が掘られた白石の壁、整然と並んだ純白の柱。

それらを囲む高い塀は外敵を排除するためのものか、それとも外界から聖域を隔離するためのものなのだろうか。人を寄せ付けないその姿は、威圧感さえ感じる。

ルシエルは神殿の正面、周囲を取り囲む高い壁の中央にある門の前に降り立った。

その門の前には、カエルスと似たような服を着た二人の兵士が、細い槍を構えて立っていた。

その背には一対の白い翼。一人は男、一人は女だった。

ルシエルが近付くと持っていた槍の穂先をルシエルに向け、声を張り上げた。

「何をしに来た！」

「まず用件を言え」

二人の天使のあまりにも強い警戒心は、門を守る任務のためだけではないように見える。

明らかにルシエルに対し敵意を剥き出しにして、さらに嫌悪の視線を送っているのだ。

だがルシエルはそれをまったく気にした様子もなく、笑みを崩さずにこやかに答える。

「いえ、ちょっと下に降りる許可を取りに来たんですよ」

その言葉に二人の天使が気色ばむ。

「何故そんなものが必要なのだ」

「貴様、今度は何を企んでいる！」

じわりと殺気にも似た気を放ち、槍を構えてにじり寄る。

もう何を言っても聞き入れてはくれないようで、ルシエルが強行突破も仕方ないかなどと物騒なことを考えだしたときだった。

「何をしている」

凜とした声が門の中から聞こえた。

その声を聞き、二人の門番は慌てて門を開いた。

門の中から現れたのは、一人の天使。

普通の天使とは一線を画しているような、どこか威厳ある天使だった。

神父が着るような白い礼服を、動きやすいように要所要所でまとめている。

黄金の髪は肩の下まで伸ばしており、風が吹く度に光を反射して柔らかに揺れた。

夕焼け色の鮮やかな瞳が、門番とルシエルを交互に見つめる。

ルシエルはその間笑みを絶やさずに、門の内側から自分を観察しているその天使を見つめていた。

しばらくの間沈黙が続き、それを打ち破るように威厳ある天使が口を開いた。

「……中に入れてやれ」

その天使の一言に、二人の門番は慌てたように抗議する。

「し、しかし……」

「奴はあの……」

「構わん。責任は私が取る」

有無を言わずに天使が言うと、門番たちは渋々ながらにルシエルを中に通した。

門番たちが不満顔で見送る視線を背に受けて、ルシエルは悠々の中に入った。

その天使はルシエルを連れて神殿の方へと歩いて行く。

二人は暫し黙って歩いていたが、門から充分に離れたところでルシエルが口を開いた。

「お久しぶりですね、お元気そうでなによりですよ、大天使ミカエル」

嫌味を込めて言ったその言葉に、しかしミカエルは振り向きもせず言う。

「……お前がいなかったからな」

「どーゆー意味ですか」

逆に嫌味を返されて反論するルシエルだが、ミカエルはそれを無視して別のことを話しはじめた。

「……で、何をしにここへ来た」

「貴方までそう言う……」

ちよっと下に降りる許可を取りに來ただけですよ。仕事です、仕事」

「……………」

ルシエルの言葉に何事か考えを巡らせていたミカエルだったが、不意に振り向いて口を開いた。

「お前が行ったところで無駄だろう。私が一緒に行って掛け合ってみよう」

まさかそんなことを言われるとは思っていなかったのか、その意外な申し出にルシエルはぽかんと口を開けた。

だが、好意で言ってくれたのなら従おうとも思ったか、

「それはどうも」

などと気のない返事をしながらミカエルの後ろをついていった。神殿に行くまでには、広い中庭を通って行かなければならない。ここまで話しながら大分歩いたが、神殿まではまだまだある。聖樹と呼ばれる、庭の中央にある巨大な木が、二人を静かに見下ろしていた。

ようやく神殿内に入ると、そこにはひんやりとした空気と、重い雰囲気が充満していた。

誰もいない回廊を歩いていくと、一番奥に一際厳かな扉がある。そこがこのカエルの、ひいてはこの世界の万物の父である神の部屋だ。

扉の前までくると、こちらが何か言う前に扉の中から声がした。

『開いておる。二人とも入るがよい』

ミカエルはその声に従い扉を開ける。

扉は音もなく内側に開いた。

重く厳かな空気が中から流れだす。

天窓から日の光が入っているので、部屋の中は明るい。

この広い部屋の一番禺に、一人の老人が飾り気のない椅子に座っていた。

真っ白な長い髪と髭。

この小柄な老人こそが、このカエルの最高神、ゼウスなのだ。
二人はゼウスの前に立ち深々と頭を下げた。

「して、何用かの？」

ゼウスの問い掛けに答えたのはミカエルだった。

「ガイアに降りる許可を頂きに参りました」

「そなたがか？」

「いえ……」

ゼウスの問いにミカエルは首を振り、ちらりとルシエルを盗み見る。
ルシエルは俯いたまま黙して語らない。

「……彼が、です」

仕方なくミカエルが言った。

ゼウスは黙ったままのルシエルを気にした様子もなく、ミカエルの言葉に頷いた。

「そうか……しかし、こやつに許可を出して良いものか……お主も知っておろう」

ゼウスの言わんとしていることに気付き、ミカエルは口を開いた。

「それは重々承知しております。」

しかし今回はこの者の意思を試す良い機会。許可を出して頂けないでしょうか。

「……何かありましたら、責任は私が取ります」

ミカエルのその言葉に、ようやくゼウスは首を縦に振った。

そのやり取りを、ルシエルはどこかで遠くで聞いていた。

声も出せず、ただ黙って立っている。

ゼウスを見たときから、心の奥底に生まれた感情……それに抗いたくても、抵抗することすら難しい。

この世の全てが、逃れようのない闇に堕ちて行くような感覚。幸福などどこにもありはしないと思わせる程に強く、容易く人の心を絶望に陥れる暗闇……それは恐怖だ。

突如心に沸き上がったそれを必死に押し殺し、ともすれば逃げ出したくなる衝動を抑える。

額には冷や汗が浮かび、どうにも気分が悪い。

ルシエルは、ゼウスに部屋を出ることを許されるまで、ただじっと耐えていた。

その間のゼウスとミカエルの会話はほとんど覚えていない。

だが、気が付けば自分は部屋の外にいた。

ふらふらと手近な壁に寄り掛かり、深く息を吸う。

未だ震えが残っていたが、ゆっくりと心に浸み出した恐怖の色が薄れていくのが解った。

ミカエルはそんなルシエルの様子をただ黙って見ていたが、小さく息を吐くとルシエルの側に近寄ってきて言った。

「……あまり大丈夫ではなさそうだな」

ミカエルの声に、なんとか言い返すだけの気力は戻っていた。

「これは……仕方ないですよ。
自業自得、というやつですかね……」

力なく笑い大きく息を吐く。

不意にミカエルがルシエルの手を取り、手のひらに何かを押しつけた。

それは小さな紙きれだった。

中央に何やら複雑な紋様が描かれている。

ルシエルがそれを確認した瞬間、紙きれは小さな炎を発して燃え上がり、一瞬にして消え去った。

しかしルシエルが手を翻すと、その手の甲には紙に描かれていた紋様と同じものが刻まれていた。

その紋様こそが通行証なのだ。

この紋様がないと、内側からあの巨大な門を開けることができない。

「くれぐれも不祥事を起こすなよ。私の責任になってしまう」

ミカエルはそう言うと、腕を組み僅かに眉を寄せて不機嫌そうな顔になった。

それを見て、ルシエルはくすりと小さく笑う。

「誰もそこまでしてくれと頼んでませんよ。相変わらずお節介な御方だ。

心配しなくても、今回はもう貴方に迷惑をかけるような真似はしませんから」

ようやく元の調子を取り戻した口調で軽口を飛ばす。

その様子にミカエルは少し安心したように息を吐き、ルシエルを前にして初めて小さく笑った。

「そのような軽口が言えるのなら、もう大丈夫だな」

その言葉に、ルシエルは不思議そうにミカエルを見つめる。

堅物と評判だったミカエルが、自分を心配してくれていたことに少しだけ驚いたのだ。

神の言こそ全ての基とする天使にとって、自分の存在は許せないものだろう。

ましてや、大天使という他の天使たちよりも神に近い立場にいるはずのミカエルなら、会った途端に刺されてもおかしくはないのだ。

それとも、しばらく逢わずにいるうちに、ミカエルの考えが変わったのだろうか。

……いや、そうではなかった。

彼は昔から、そういう性格だったのだ。

例えば自分が不利になろうとも、まず相手のことを優先する……そんな人なのだ。

ルシエルはようやく思い出した。

思わず口元が弛む。

「ありがとうございます」

久しぶりに、ルシエルは素直に礼を言った。

こんな自分を氣遣ってくれるミカエルを、その昔尊敬していたことを思い出した。

それが可笑しくて、思わずくすくすと笑った。

ミカエルはそんなルシエルの様子に、何事かと眉を寄せる。

「……何のことだ」

ミカエルはルシエルのお礼の言葉に、白々しいとさえ思える言葉を返した。

素直に礼を受け取らないのも、昔から変わらなかった。

「では、僕が勝手にそう思っていることにしますよ」

仕方なくルシエルがそう言うのと、ミカエルは背を向け歩いていった。

「本当に、お節介な御方です……」

ミカエルには見えていないと知りながら、その後ろ姿に深々と頭を下げた。

「……暇だ」

時雨はルシエルの家で暇を持て余していた。

てつきりすぐに帰ってくると思っていたのだが、既に一時間近くが経過している。

狭い部屋の中では、風景など簡単に見飽きてしまう。

それに、がらくたに囲まれた狭い部屋に一人でいるのも、あまり良い気はしない。

せっかく天国とやらに来れたのだから、天国見学でもしてみようかなどと思い始め、時雨はルシエルの家を出た。

街までは一本道だったはずだ。

迷うこともないだろう。

呑気に考え、一人で何もない道を行く。

来るときにも気付いたが、もう少し街に近いところには露天商な

どがいる。

そこで買い物でもしてみようか。

時雨は、昔から大きな店などよりも、こうした小さな屋台や露天で買い物をすることが多かった。

店員と他愛ない話をするのが好きだったので、堅苦しい大手販売店よりも、道端の小さな店の方が解放感があって良い。

それに、こういった店にこそ掘り出し物があるというものだ。

そこまで考えて、ふとあることに気付いた。

……金、使えるのか？

なんと言っても、ここは天国である。

時雨が今持つてるお金と言えば、制服のポケットに突っ込んである財布の中身……出してみると小銭ばかりだった。

銀行で両替とかってできるのか？

そもそも、この通貨って何なんだ。

ルシエルに詳しく聞いておけば良かったと後悔しながら、時雨は街を目指した。

買い物はできなくても、見物くらいはできるだろう。

コンビニがあれば雑誌くらい立ち読みできるだろうし。

天国にコンビニなどというものがあるかどうかさえ甚だ疑問だったが、先程の近代的な街並みならばコンビニの一軒や二軒あってもおかしくはない。

人々の服装は現代的なものから中世ヨーロッパ風のものまで様々だったが、建造物はどれも新しかった。

いや、まだ街の一面しか見ていないからそうと断言はできないが、少なくとも時雨が住んでいた街と何ら変わらない。

ひょっとしたら、もっと向こうの方には中世や古代の建造物が並んでいるのかもしれない。

ちよつとした観光気分で、時雨は街を目指した。

街まではそう遠くなかった。

ばらばらと家が増えてきたと思うと、すぐに大きな建物が並び、沢山の人々がごった返す市街地に出た。

街の雰囲気は明るくて良いのだが、何となく作り物のように感じてしまう。

整然と敷き詰められた石畳は傷一つなく、等間隔で建っている建造物はどれも同じような形をしていた。ビル郡なのだから当たり前と言えば当たり前なのだが。

建物に掲げられた看板だけがそれぞれ違った。

何だか、誰かが創った箱庭のようだ。

そう考えると、人々の笑顔さえ、どこか作り物じみて見えてくる。そう思うと何故か店の中に入るのも躊躇いがちになり、結局まだ一軒も覗かないまま通りをぶらぶらと歩いていた。

ようやくコンビニのようなものを発見したとき、時雨は視界の隅に何か変なものを見たような気がして瞬いた。

ほんの一瞬だが確かに見えた。

作り物のような街より更に作り物っぽい……

「人形……？」

そちらに目を向けると、それはどう見ても人形だった。

まるでマネキンのように動かない表情で、街の中を歩いている。

背丈は子供くらいか、身長に合わない大きめな茶色の燕尾服を着て、紙袋を抱えて人間のように歩いていく。

時雨は何故そんなに興味をひかれたのか自分でもよく分からないが、咄嗟にその人形を追い掛けた。

思ったより足が速く、見失わないようにするのが一苦労だ。

しばらく追いかけてっことを続けて、もういくつ目の角を曲がっただろう。どこをどう通ったかなど、まったく覚えていない。

しかし気が付くと人形の姿はなく、あれほど賑わっていた人々のざわめきも街の風景も消え失せ、辺りには濃い霧が立ちこめていた。

「なんだ、ここ……」

立ち止まり辺りを見回すが、濃い霧のせいで何も見えない。

迷子になるなど何年ぶりだろう。

来た道に戻ろうと振り返るが、霧に阻まれ道はまったく見えなかった。

誰かが来るまでじっとしてようか、感覚を頼りに元来た道へ引き返そうか、それとも前に進もうか。その場で佇み考え込んで……

唐突に、ぞくりとした悪寒が背筋を走り抜けた。

何故かは分からない。

しかし、とても嫌な感じがして、その場に留まりたくなかった。

一人でここに居てはいけない。早くここから離れなくては。

そんな思いだけが頭を支配して、時雨は走りだした。

どこに向かっているかなど分からないが、とにかくひたすらに走って走って走って……

「おい、そこで何をしている!」

誰かの声が聞こえて、時雨はようやく立ち止まった。

荒く息を吐き、額の汗を乱暴に手で拭う。

辺りを見回すと霧が薄くなっていて、ぼんやりとどこかで見たようなシルエットが浮かんだ。あれは……

「門だ……」

カエルスに通じる巨大な門だった。
ということは、先程の声の主は、

「あ、門番」

「サダルメリクだ」

門番は時雨の声に、咄嗟に訂正した。

「サダルメリク……？ ああ、名前ね。俺は時雨。宜しくな」

「ああ……」

一息ついてようやくいつもの調子に戻ったらしい時雨の明るい声に、門番はごく短く返事をした。

どこをどう通ってきたのかは解らないが、時雨はどうやらカエルスの外に出てしまったらしい。

しかし門の近くまで来ることができたのはラッキーだった。

見渡すかぎり一面の霧の中、目印になるようなものなどなく、下手をすれば一生迷っていたかもしれない。

……いやまあ、既に死んでいるのだから、改めて餓死することもないだろうけど。

時雨は心の中だけで呟き、とりあえずは中に入れてもらおうと、門番に交渉するべく笑いかけた。

「えっと、サダルメリク？」

俺のこと覚えてっかな。ほら、さっきルシエルと一緒にここ通っ

ただろ」

まるで交渉とは言えなかったが、時雨はこれでも上手く交渉しているつもりだ。

「……ああ」

サダルメリクは突然馴々しく話し掛けてきた時雨を不快に思ったのか、少し不機嫌そうに短く答えた。

しかし時雨はそれに気付かず——寧ろ敢えて無視しているようにも見えるが——話し続ける。

「ちよつと中に入れてくれないかな。ルシエルんとこ戻らないときあ」

「……れ」

「あ？ 何か言った？」

サダルメリクの短い呟きが聞き取れなかったのか、時雨は何となく聞き返した。

「黙れ！」

突然叫んだサダルメリクに驚き、時雨は慌てて口を閉じた。

完全にサダルメリクに圧されてしまっている。

見た目は自分とそう変わらない歳なのに、この威圧感は何なのか。時雨は冷や汗が頬を伝うのを感じた。

そんな時雨を見て、サダルメリクは我に返ったようにはっとなり、時雨から顔を背けた。

サダルメリクを支配した感情は、決して怒りなどではなかった。しかし、言葉で表すにはあまりにも複雑なその思いは、彼の心をパンクさせ、怒りという最も簡単な感情となり噴き出したのだ。

「……すまなかった。通れ」

それだけ言うとも門を開け、時雨が来るのを待つ。

気まずさからか、時雨の方を見ようとはしなかった。

一瞬躊躇った後、時雨は言われるままに門をくぐった。

通るときにサダルメリクの方をちらりと振り返ると、どこか悲しそうな、寂しそうな目で門の中を見ていた。

彼の髪と同じ褐色の瞳が、このときはひどく暗く見えた。

重い音をたてて門が閉まる。

辺りには静寂と、ただ一人サダルメリクが残された。

否、残されたのはサダルメリクだけではない。

辺りに霧が漂い始め、周囲に複数の気配が現れる。

サダルメリクは門に手をつき俯いた。

その口から聞こえるのは、自己嫌悪の深い溜め息だけだった。

時雨が逃げてきたときに、彼についてきたのだろう小鬼の気配も、サダルメリクを苛立たせた原因の一つだったに違いない。

寄ってきた小鬼を排除すべく、彼はゆっくりと振り向いた。

時雨はというと、閉じた門を見つめ、サダルメリクの様子を心配しながらも街へと歩いていった。

何やらただ事ではない様子だったが、自分が何か気に障ることも言ったのだろうか。

いきなり馴々しくしたのがいけなかったのか。それとも騒がしく

したのがいけなかったのか。

腕を組みぐるぐると考えながら歩いていたので、自分に近付いてくる人影に気付かず、思いつきりぶつかった。

「にゅわっ！」

「いてっ！ 何だ！？」

どうやらお互いよそ見をしていたらしく、正面から突っ込んだ。時雨はたたらを踏んでよろけるが、何とかその場に踏みとどまった。

しかし相手の方は後ろに引っ繰り返り、尻餅をついた格好になっている。

「つたたた……もおどこ見て歩いてんのー？」

「ああ、ワリイ、ちょっと考え事してたもんだから」

時雨は慌てて転んだ相手に手を差し伸べる。

よく見ると相手はまだ小学生くらいの女の子だった。

染めているのか、淡い桃色の髪を結い上げ、青を基調とした服に赤いスカートをはいている。背中には、小さな羽がついた可愛らしいバッグを背負っていた。

その子は時雨の手に掴まり立ち上がるとぱたぱたと服についた汚れを払い、

「ぶつかってきたのは減点だけどー、すぐにレディに手を差し出したのは偉いわねー。誉めてあげるー」

かなり偉そうにそう言った。

「ああ……そう。そりゃどうも……」

時雨はこの生意気な少女に何と返せば良いのかわからず、曖昧に返事をした。

少女はそれには構わず小さな腕時計に目を落とし、口元を押さえ、慌てたように叫んだ。

「やっだー、あと七分しかないー！」

じゃあねお兄さん、あたし急いでるのー！」

早口にそう言うといいてしまった。

残された時雨は呆然とそれを見送っていたが、足元に一枚の紙切れが落ちてゐるのに気が付いた。

拾ってみると、それは何かのチケットのようだ。全て英語表記されているので、お世辞にも成績が良いとは言えない時雨には、何のチケットかまでは分からなかったが。

どうやら先程の少女は、これを観に行くために急いでいたらしいことは容易に想像できた。

時雨は少し迷ったあと、先程の少女が走って行った方に駆け出した。

相手は小さな女の子だし、すぐに追い付くだろう。

何で見ず知らずの他人のために……とは思うが、一度拾ったものを再び捨てるのも気が引けた。

ああ、俺ってばお人好し？

などと思ひながら苦笑いしつつしばらく行くと、桃色の髪の少女が大きな建物の前で立ち止まっているのが見えた。

何やら慌ただしくバッグの中を探ったり、ポケットの中を探したりしている。

時雨はその少女に近付き手に持ったチケットを、ポケットの裏地

を引っ張り出して飛び跳ねる少女の目の前に差し出した。

「これ、お前のだろ？」

少女はきょとんとして時雨を見上げたが、手に持っているチケットを見ると、途端に嬉しそうな笑顔を見せた。

「おうこれよー！ わざわざ届けてくれてありがとねー。アナタいい人ねー。お名前はー？」

少女は時雨の手からチケットを受け取ると、その場でくるくる回ったりぴよこぴよこ跳ねたりしながら言った。

時雨はそんな微笑ましい光景に思わず笑みを零しながら、そういえばまだ名乗っていなかったことに気付く。

「どーいたしました。俺は木高時雨っつーんだけど、」

そこまで言ったところで少女はぴたりと動きを止め微かに眉を顰める。

「……きみは？」

時雨は少女のかすかな変化に気付かず言葉を続ける。

「アナタってー……」

少女が何か言いかけたときだった。

通りの向かいにあった絡繰り時計が、十二時を告げるべくオルゴールの音色と共に動きだした。

それを見て、少女は慌ててわたわたとその場で足踏みする。

「あー、やっぱーい！ もうはじまっちゃうー！
ごめんねー、また今度ねー！」

少女はそう言うと言物の中へと走り去ってしまった。
それがあまりにも突然だったので、時雨は何もできずにただ呆然
と見送った。

「……えーと……」

困ったように頭を掻き、途方に暮れてその場に佇む。
さて、これからどうしたものかと、再び辺りを散策しようとした
ときだった。

「時雨！ こんなところにいたんですか」

聞き覚えのある声が空から降ってくる。

見上げるとルシエルが空から降りてくるところだった。

時雨の目の前にふわりと降り立ち、背中の大きな翼を畳む。

背中に羽があると日常生活に邪魔じゃないのかとも思うが、それ
は意外にも、折り畳むと思ったより小さくなった。

平たいカバンを背中に背負っているようなものだ。

これならば、椅子に座るのにはさほど邪魔ではないだろう。

時雨はルシエルに向かって片手を上げて笑い掛ける。

「よう！」

「よう！ じゃありませんよ。」

どこほつつき歩いてたんですか。捜したんですよ」

ルシエルは怒ったような顔をして時雨を睨み付ける。

どうやら本当にあちこち飛び回って捜していたようだ。

時雨は顔の前で手を合わせると、さして反省した風でもなく早口に言った。

「わあるかったって。でもお前帰ってくるの遅えんだもんさあ。俺、暇で暇でどーしよーもなかったんだよ」

その、まるで反省していない時雨の様子を見て、ルシエルは溜め息を吐いた。

——こっちは色々大変だったのに、呑気なものだ……

しかし時雨はルシエルの苦勞など、まったくもって知るはずもなく。

時雨は、お小言はもう御免だとも言うように、愛想笑いを浮かべながら先程の奇妙な体験を話して聞かせた。

「あ、そーいやさ、天国って変なのがいんのな。
俺さつき人形が歩いてんの見たぜ？」

その言葉にルシエルは思わず眉をひそめる。

それを見た時雨は、ルシエルに自分の話が信じられていないと思ったのか、ムキになって話を続けた。

「マジマジ！俺そいつ追っ掛けて天国の外に出ちまったんだよ。

……ま、結局人形は見失ったけどさ。

あ、でもほら、サダルメリクって門番いただろ。あいつなら何か知ってるかもよ？」

時雨の言葉に、ルシエルは驚いたように目を見開いた。

何事か考え込むように視線を落とし、口元に手を当てて小さな声で問い掛ける。

「……彼、何か言っていました？」

時雨は怪訝そうに目を細めたが、腕を組んで考え、あのときの様子を思い出す。

「んー、何も？　ただ、何か知んないけど機嫌悪かったみたいだった」

時雨の話を黙って聞いていたルシエルだが、それ以上は何も話そうとしなかった。

ただ一言、「行きましょう」と言って先に立って歩きだす。

時雨は納得いかないうような顔をしていたが、渋々ルシエルの後を追った。

街の騒めきの中をしばらく歩くと、再度あの巨大な門が見えてきた。

ルシエルと一緒にいると、人々の視線は相変わらずだったが、もう一々気にしないことにする。

それよりも、この沈黙に今、耐えられるかどうか……

歩いている間、二人は一言も喋らなかった。

ルシエルが難しい顔をして考え込んでいたため、中々話し掛け辛かったのだ。

時雨はわりと話好きなタイプだ。

クラスでもムードメーカーの役を任されている。

いわゆるお調子者なのだが、学校の友人たちからの評価は決して悪くなかった。

時雨は、場の空気を読むからだ。

自分が喋って良いときを知っている。

同様に喋ってはいけないときも熟知していた。

今は下手に話し掛けて良いときではない。

しかし元来話好きな性格、そろそろ沈黙を打ち破りたい。

何か今話しても良い話題はないかと、ネタになりそうなものを探してあちこちに目を走らせた。

ルシエルはそんな時雨の気遣いも知らぬまま、ただ黙って歩いていく。

ルシエルはずっと、時雨の言ったことについて考えていたのだ。

サダルメリクのことにも気になるが、時雨が言っていた、天国の外に出たという言葉が引っ掛かっていた。

一人で勝手に外に出ることはできないはずだ。

しかもあの口振りでは、門から外に出たのではない様子だ。

出入口はあの門一つだけ。

一体どうやって外に出ることができたのか。

「おい、ルシエル。門に着いたぞ」

やっと話し掛けられるチャンスをつんだのか、時雨がルシエルに声を掛ける。

時雨の声を聞いて顔を上げると、いつの間にか門の目の前まで来ていた。

ルシエルはのろのろと門に手をかざすと、門は音もなく開いた。

かざした手の甲にはあの紋様。

これは内側から門を開けるための鍵なのだ。

これがない限り、大天使でも門を開けることはできない。

自由に門の開閉を許されているのは、門番であるサダルメリクだけだ。

開いた門から外に出る。

サダルメリクが待ち構えているのではないかと思ったが、そこには誰もいなかった。

「何だよ。サダルメリクのやつ、門番の仕事さぼってんのか？」

せっかくさっきのこと謝ろうと思っていたのに……とぶつぶつ呟く時雨に、ルシエルはやっと聞き取れるような小さな声で言った。

「……きつと、僕に会いたくなかったんですよ」

「あ？ 何か言った？」

「いえ……」

ルシエルの呟きが聞き取れなかったのか、時雨は聞き返したがルシエルは答えてくれなかった。

そのまま歩きだすルシエルに、時雨は不機嫌そうな顔をしつつもついていく。

背後で、重い音をたてて門が閉まった。歩いていく途中で時雨は一度だけ振り向いたが、本来そこにいるべき門番は、まだ戻ってこなかった。

そのまましばらく歩くと、霧の中に大きな木が生えているのが見えた。

こんなところに一本だけ不自然に生えている木だが、それは驚くほどどっしりと根を下ろし、四方に枝を張り巡らせている。

その太い幹の中央には大きな穴が開いていた。

「さ、行きましようか」

ルシエルはそう言って時雨を手招きする。まるで穴の中に入れと言っているように。

「行かつて……」

時雨が近付き中を覗いてみると、暗く渦を巻く薄い闇が満ちていた。

「……なんだよこれ」

何だかよく解らないが、あまり良い感じはしない。
一歩引いてルシエルを睨み付ける。

ルシエルはそんなことなどお構いなしにいつもの微笑みを浮かべ、

「何って、ゲートですよ。」

カエルスとガイアとを結ぶ」

さも当然のようにあっけらかんと言ったのけた。

ガイアというのは、時雨たちが暮らしている地上のことだ。

天使たちは単に「下」と言うことも多いが。

時雨は露骨に嫌そうな顔をして、もう一度穴の中を覗き込む。

薄い闇が渦巻く穴をじっと見つめると、自然と顔が引きつってき
た。

ゲートということは、ここに飛び込んで地上に行くということか。
まともな道とは思えないが……

「……なあ、」

時雨が何かを言い掛けたときだった。

ルシエルが時雨の背後に移動し、大樹と直線上に並ぶ。

嫌な予感がして時雨が振り返ろうとしたときだ。

「つべこべ言わずにとつと行きなさい」

どげし

あろうことかルシエルが、時雨の背中を思いっきり蹴り飛ばしたのだ。

時雨は狙い変わらず穴の中に倒れこむ。

「ひいいいよえあああああああ！」

おかしな叫び声と共に穴の中へ落ちていく。

ルシエルは満足そうにそれを見届け、自分も穴の中へ身を踊らせた。

同志

白い……白い霧が辺りを覆っていて、ここが一体どこなのかまったく判らない。

ただ、自分が仰向けに寝ていること、自分がひどく軽くなったように、どこか浮遊感を感じることなら判る。

「……………」

そして何処か遠くで、誰かが自分を呼んでいるような……………
ちょっと待て。

前にもこんなことがあったような気が……
などと時雨が考えているときだった。

「いつまで寝てんですかさっさと起きてください」

どぶっ！

「……………っっ！！」

またしても声の主に思いっきり腹を踏ん付けられたことが解った。
咳き込みながらも、時雨はなんとか身を起こす。

「てっ……てめえっ！ 一度ならず二度までも！
本気でぶっ飛ばすぞゴルァ！」

時雨は、腹に二度目の足跡をつけた相手を睨み付けるが、そいっ
はお構いなしに辺りを見渡し、

「霧が晴れますよ」

などとほざいている。

時雨は渋々立ち上がり、同じように辺りを見回した。

そこは先程までいたカエルスではなかった。

アスファルトの道路に、等間隔に並んだ電柱。

コンクリートブロックの塀が並び、その向こうに鮮やかな色をし
た屋根が見える。

見覚えのあるその風景は……

「俺の街だ……」

時雨は呆然と呟いた。

ほんの数時間離れていたただけだというのに、ひどく懐かしく感じ
る。

しかし不思議と人の姿は見かけず、街の騒めきもまったく聞こえ
なかった。

まるで本物そっくりに作られた、はりぼての街のようだ。

そのことをルシエルに言うと、簡単に説明してくれた。

「貴方だって、生きてるときに幽霊の姿は見えなかったでしょう？
それと同じことですよ」

解ったような解らないような理屈ではあるが、時雨は納得して頷
いた。

世の中、自分の考えが及ばないことなど、掃いて捨てる程あるの
だ。

それに、あんまり悩むとハゲると言うし。

「それはそうと、早く虫を探しましょう。
でないと仕事が終わりませんよ」

ルシエルはそう言うのと、辺りを見回しながらすたすたと歩きだす。
時雨も後に続いた。

誰もいない街並みは、不気味に静まり返っている。

その街が、自分が住んでいた街だとしたら、感じるのは不気味さ
ではなく不安である。

ルシエルの理屈で納得してはいるものの、見慣れた街に人氣がな
いと寂しい。

聞こえてくるのは風の音と、何かの虫の羽音ぐらいで……

……虫の羽音？

何とはなしに嫌な感じがして空を見上げれば、小さな黒い点がい
くつか飛び回っているのが見えた。

「なあ、あれ……」

何となく声をひそめてルシエルに話し掛けると、ルシエルも上空
の気配に気付いていたようで静かに頷いた。

「早速見つかりましたね。あれですよ」

ルシエルはそう言って振り返ると、ゆったりしたローブの袖から
何かを取り出し、時雨に手渡した。

時雨が手の中のものを見てみると……

「殺虫剤？」

それは紛れもなく殺虫剤だった。
こんなものでどうしろと……など、今更聞かなくともこの天使の
言いそうなことは解る。

「自分の身は自分で守ってくださいね」

ほら、やっぱり……

まあ、相手は虫だし有効手段かもしれないが。
もうちょっとマシな言い草はないのだろうか。
と、そのとき。

上空を旋回していた虫がこちらに気付いたのか、明らかにこちら
に向かって飛んできた。

近付くにつれ、小さな黒い点は大きくなり、次第にシルエットが
はつきりしてきた。

赤と黒の縞模様が何ともグロテスクな蜂。

それが最も近い表現だろうか。

そんなことを考えている間に、虫たちはどんどんこちらに近付き
その影が大きく、大きく……大きく……

「……ってデカっ！」

時雨が思わず叫びたくなるほど、その虫は非常識な大きさをして
いた。

体長は1メートルを超し、まるまると太った腹は一抱えはあるだ
ろう。

有効手段だと思っていた殺虫剤が、今はとてつもなく心細い代物
に見える。

「五匹、ですか。」

ちよつと多いですね」

ルシエルはそう呟くと、背中の羽を大きくはばたかせ、虫を迎え撃つべく宙を舞う。

「時雨はその辺に隠れててくださいね」

一度振り向いてそう言うと、再び迫り来る虫と対峙した。
時雨は言われた通りさっさと電柱の陰に隠れる。
情けないとは言うなかれ。

こちらとただの一般市民なのだ。

時雨は頭の中でそうまとめると、うんうん頷いてルシエルの応援を決め込むことにした。

ルシエルはというと、これまた袖から取り出した大きめのバタフライナイフを構え、自分の周りを囲んで飛び回る虫を睨み付けていた。

天使がそんな物騒なものを持っていて良いのか、という意見もあるが、こればかりは仕方ない。

天使にはそれぞれ特殊な力が授けられているのだが、最初からこの能力を使いまくって体力が保たなくなっては意味がない。

それに、ルシエルの能力には小さな欠点がある。

相手が複数の場合、この欠点は命取りだ。

たかが虫ごときに負けたとあっては天使の名がすたる。

まずはお互い様子見のようだ。

ルシエルは右手のナイフを構え直し、目標を一匹の虫定め先手を打つ。

油断しまくっていた虫目がけてナイフを一閃。

虫は頭から真っ二つに切断され、地に落ちていく。

しかし地に落ちる寸前で砂のように崩れ、風に吹かれて跡形もな

く消え去った。

まずは、一匹。

ここからが本番だ。

仲間が殺されたことで興奮したのか、残った虫が気を張り詰めたのが分かった。

こいつらは一筋縄ではいかないだろう。

ルシエルは再びナイフを構え、不規則に飛び回る虫を見据えた。さて、どんな反撃があるのやら……

「お手並み拝見といきますか！」

ルシエルの言葉をきっかけに、虫が一斉にルシエル目がけて飛んでくる。

奴らの武器は大きく頑丈な身体と強い顎。

そして何と言っても巨大な針である。

こんなもので刺されたらひとたまりもない。

ルシエルは迫り来る針の攻撃を避けつつ、手にしたナイフを振るう。

切っ先が何度か虫の身体を掠めるものの、大したダメージにもなっていない。

大きな顎にナイフを突き刺せば、それはあっさり噛み砕かれた。

ルシエルは旋回して、一度距離をとった。

虫相手に能力を使うなど、勿体ないような気はするが、そうも言うてられない。

この距離ならばこちらの有利だ。

ルシエルは両手を胸の前で合わせ、深く息を吸った。

掌がほんのりと熱を帯びる。

少しずつ手を離すと、両手の間に小さな光の球が生まれた。

虫がルシエル目がけて飛び掛かってくる。

だが、ルシエルの方が早い。

ルシエルは先頭の虫に向かって、その光球を打ち出した。

光球は虫の腹に潜り込み、ボールを破裂させたような音をたてて虫の身体を霧散させた。

ばらばらになった虫は息絶えて、その死体もやがて風に消える。

これで残りは三匹。

迫り来る針と顎の攻撃を避けながら、ルシエルは内心焦っていた。まだ三匹も残っているのだ。

奴らは虫にしては頭が良く、学習能力も高い。

もうこちらの攻撃も、不意打ちぐらいしか当たらないだろう。

こうなると、能力の欠点が致命的となってくる。

天使が神より授けられた力の種類は様々だが、ルシエルの能力は主に攻撃である。

体内のエネルギーを練り上げ、さながら気孔のような力を操るのだ。

それなりに威力はあるのだが、欠点もある。

それは二つ。

攻撃の際、力をため込む時間が必要であること。

もう一つは、一撃射つのに結構体力を消耗すること。

それ故相手が複数の場合、この二つの欠点はかなり不利となる。

ルシエルの能力は仲間の援護があつてこそ、その真価を発揮できるのだ。

不便な能力を持ったものだ。

ここにもし、彼が居てくれたら……

一瞬だけルシエルが、かつての仲間のことを思ったときだった。

突如天空から一筋の光が飛来した。

それは物凄い速さでルシエル目がけて落ちてくる。

神々しくも全てを焼き尽くす光。それはさながら、神のイカヅチ

……

光に気付いて顔を上げたときには、もう手遅れだった。
雷光はもう、目の前に迫っている。

ルシエルの目が、驚きで見開かれた。

轟音とも爆音ともとれる音が辺りに響く。

ルシエルは逃れることもできず、ただ閃光の中に飲まれていった。

時雨は電柱の陰からルシエルが戦う様子を見ていた。

まるで映画か何かを見ているような気分だ。

ああ、これが映画だったらどんなに良かっただろう。

己に手渡された、とても武器とは言い難い武器は、掌サイズの殺^{スラ}
虫^{レイタイプ}剤が一本。

もし虫がこちらに飛んできたら、これで戦わなくてはならないのだ。

はつきり言って、そんな恐い真似したくない。

ここは何とかルシエルに頑張ってもらわねば。

時雨は少しでもルシエルを応援するべく、電柱の陰からちらりと顔を覗かせた。

そのときだった。

遙か上空から、一閃の光が飛来した。

それは刹那の如き速さで、ルシエルごと周囲の虫を捕らえた。

時雨は自分でも解らないが、何故か咄嗟に地面に伏せ、耳を塞いで目を閉じた。

直感的に、そうしなければならぬような気がしたのだ。

目を閉じていても、物凄い光量は視神経を強く刺激する。

そして轟音は辺りの空気を振動させ、耳を塞いでいてもなお鼓膜を激しく揺さ振った。

音が鳴り止み、光が消えると時雨は素早く身を起こし、空を見上

げた。

耳はまだ聞こえないし、目もちかちかしてはつきり見えない。しかし、ルシエルが真っ逆さまに地面に落下してくるのだけは見えた。

「……っルシエル！」

時雨は慌ててルシエルの下へ走りだす。

ルシエルを受けとめようと手を伸ばすが、間に合わない。

やけに耳にこびり付く、重いものを床に叩きつけるような音。

そして、やけにゆっくりと映し出される、目の前の光景。

ルシエルは頭から地面に叩きつけられた。

一度バウンドして俯せに倒れる。

時雨は慌ててルシエルを助け起こそうとするが、その手にはルシエル血が大量に付着していた。

地面に、時雨の制服に、赤い染みが広がる。

ルシエルの眼鏡は、壊れてどこかに吹き飛んでいた。

「おい……ルシエル？」

おいてば……！ 返事しろよっ！」

時雨はルシエルを揺さぶりながら声を掛けるが、返事はない。

人間だったらず間違いなく死んでいるだろうが、天使はどのようなだろうか。

ひょっとしたら生きているのではないか。

そんな思いが頭から離れず、時雨は何度もルシエルを呼んだ。

しかしどんなに声を掛けようとも、ルシエルからの返事はなかった。

べつにルシエルとは長い付き合いがあった訳ではない。

仲が良い訳でもない。

どちらかと言うと嫌いな方だし、まだルシエルを完全に信用した訳ではない。

それでも。

それでも目の前で誰かの死を見つめるというのは、胸が苦しかった。

こんなにも悲哀に満ちて、こんなにも辛苦に押し潰されてしまうものだったのかと、初めて知った。

これが映画だったら、もしくは夢だったらどんなに良いだろう。

これが全部夢だったなら、血の匂いも、腕の中のルシエルの重みも、だんだん冷たくなっていくルシエルの身体も、ともすれば溢れそうになる自身の涙も、全部偽物なのだ。

しかし、これは現実だ。

自分の目の前で、この奇妙な天使は死んでしまう。

「嘘だろ……？」

虚偽ではなく、

「嘘だよな……？」

目の前の真実。

「ルシエル……」

緩慢に訪れる、

「死ぬなよっ……！」

死。

「……あ……う……あああああああっ！」

時雨の悲痛な叫びが、街の中に木霊する。

その声を聞くことができた人間は、誰一人としていなかった。

「ミカエル」

大天使ミカエルは自分を呼ぶ声に振り返った。

そこに立っていたのは、背の高い一人の女性。

短い髪をヘアピンでまとめ上げ、動きやすい軽装の鎧に身を包んだ、美しくも冷たい印象のある女性だった。

「何でしょう」

ミカエルは恭しく頭を下げる。

大天使とはいえ、彼女に逆らうことなどできないのだ。

「ゼウス様から直々に話があるそうだ」

その女性はそれだけ言うと、「確かに伝えた」と言い、ミカエルに背を向け神殿の奥に消えた。

訝しげな表情でそれを見送ったミカエルだったが、この世界の最高神の召集ならば行かねばなるまい。

ミカエルは足早にゼウスの部屋へと急いだ。

ゼウスの部屋はいつ行っても、堅苦しいほどの重い空気に満ちていた。

そんな中で二人きりで対峙すること程、居心地の悪いものはない。しかしミカエルは涼しい顔でゼウスの前に立った。

「ようやく来たか、大天使ミカエル。

お主にちと、やってもらいたいことがあってのう……」

ゼウスは長い髭を撫でながら、ゆるゆると話を始めた。

「随分と前に失ってしまった、大天使の魂が現われたのじゃ……」

その言葉に、滅多に人前で感情の起伏を見せないミカエルが目を見開く。

「まさか……リリスが？」

ミカエルの漏らした呟きに、ゼウスは深く頷いた。

「しかし今、そやつはあの堕天使と共にいる。非常に危険じゃ……」

ゼウスはそう言うのと片手を軽く振った。

するとゼウスとミカエルの間に大きな鏡が現れ、ガイアの地に降り立ったルシエルと時雨、二人の姿が映し出された。

ミカエルはそれにちらりと目を遣ると、ゼウスを正面から見据えた。

その瞳には、凜とした意思が宿っている。

「……特に危険はないと思われます。」

彼はもう問題を起こすようなことはしないと申し立てました」

そう。確かに彼は言った。

自分は確かに聞いたのだ。

大事な部下であり同僚だ。信じてやりたいと思う。

しかしゼウスは小さく首を振った。

「いや、そうではないのじゃ……ワシはすぐにでもリリスの魂が欲しい。

今、リリスが必要なのだよ」

ミカエルは怪訝そうに眉をひそめた。

今すぐ欲しいとはどういうことだ。

第一、彼は魔虫の干渉による死のため、魂を身体に戻すはずではなかったのか。

そしてあのゼウスの目。

普段とはまるで別人のようだ。

いつもの温和な雰囲気があったく感じられない。

そんなミカエルの戸惑いを見て取ったゼウスは、笑いながら鏡に片手をかざした。

「リリスの魂は本物じゃ。

証拠を見せてやろうか」

言うが早いのか、かざした掌から一筋の光が鏡に降り注いだ。

ミカエルが驚愕の表情を浮かべて鏡を見つめると、その光は雷となり、魔虫と戦っていた天使を直撃した。

「な……何を……！」

驚きと困惑で事態を理解できていないミカエルは、咄嗟に非難の声をゼウスに向けるが、ゼウスは涼しい顔でミカエルの言葉を遮った。

「まあ……黙って見ておれ……」

ゼウスのその言葉に、ミカエルは再び鏡に目を向けた。かつての仲間が、無残にも地に落ちる。

一緒にいた少年が心配そうに駆け寄るが、もう助からないだろう。ミカエルは込み上げてくる、怒りとも憤りともつかない感情を押し込めた。

こんな気分になるのは久しぶりだ。

百年前の、ある天使の処刑のとき以来だろうか。

ミカエルは険しい顔つきで、自分の手を固く握り締めた。

と、そのときだ。

鏡に映っていた少年の身体が輝き始めた。

純粹で暖かな、白い光。

この光には見覚えがあった。

懐かしい同僚と同じ光。

驚きの余りその光景に見入っていると、ゼウスが歓喜の声を上げた。

「おお……やはりじゃ。この力はリリース！」

その声からは普通の温厚そうな印象は、微塵も感じられない。

鏡に映る光を見つめ、狂ったように歓喜の声を上げ続けている。

一体、どうしたと言うのだ。

見たこともないゼウスの姿を目にしたミカエルには、混乱と困惑しか浮かんでこなかった。

ミカエルの混乱を余所に、ゼウスは血走った目をミカエルに向ける。

「さあミカエルよ。

あの者をここに連れてまいれ」

しかしミカエルは途惑いの表情を浮かべ、中々その場を動こうとしない。

ゼウスはその様子に怒りを覚えたか、身体ごとミカエルに向き直り、普段からは考えられぬ程低く冷たい声で言った。

「早く行け」

「……っ！」

その言葉に、ミカエルは本能的に何か恐ろしいものを感じ取った。今逆らってはいけない。

それだけははっきり解った。

ミカエルは焦ったように部屋を出た。

何だったんだ、あれは。

あれが神なのか。

今まで自分が見てきた神とはまったく違う人物のようだ。

しかしだからと言って、逆らうことはできない。

今のミカエルにできることは、命令を実行することだけなのだ。

ミカエルは神殿を後にすると、地上へと向けて飛び立った。

ルシエルと時雨、二人の許へと。

時雨は突然、我に返ったように瞬きをした。

今まではっきり映らなかった世界に、光が戻ってくる。

少し混乱しているようで、今自分が何をしていたのかすぐに思い出せなかった。

順を追って思い返す。

確か、地上に降りて、虫を探して、でもってルシエルが虫を……

「……っ、ルシエル！」

やっと思い出したようで、慌てて腕の中の天使に目を遣る。

ぼろぼろになった白い服は血で赤く染まり、堅く閉ざされた目は開きそうもない。

時雨は微かに震える声でルシエルに呼び掛けた。

「なあ、ルシエル……嘘だよな？」

シャレになんない冗談やめろよ……聞いてんのか……返事くらいしろよ……っ」

徐々に声が大きくなっていく。

目に溜まっていた涙が、溢れた。

その頭の片隅で、何故こんな奴のために泣いてるんだろうと考える、冷静な自分がいた。

友達でもないし、家族でもない。

自分と関係ない他人だ。なのに何故、こんなに悲しいのだろう。人の死なんて、テレビの向こうでは毎日のように映し出されている。

それだって、自分と関係ない他人の死だ。

なのに今と違って、涙など流したことはない。

それなのに、何故……

そこまで考えて気付いた。

これはきつと、目の前で見ていながら、何もできなかった自分自身
が悔しくて泣いてるんだ。

テレビの向こうとは違う、自分の目の前で起こったことだから。

もしかしたら何かできたかもしれない。

それなのに、何もできなかった。

だから悔しくて、悲しくて……

「死ぬなよっ！ ルシエル！」

叫んで目を閉じると、次から次へと涙が溢れてきて。

それと同時に理不尽な怒りが沸き上がる。

天使のくせに、こんな簡単に死ぬな。

いつもみたいに、勝手に殺すとか何とかほざいてみせろ。

「……誰が、いつ死んだんですって……？」

そう、そんな風に……

「……………へ！？」

突然聞こえた小さな声に、素っ頓狂な声を上げてがばつと顔を上げると、嫌な性格の天使がうっすらと目を開けて時雨を見ていた。

「な……なん……っ？」

なんで——と訊こうとしたが、うまく言葉が出てこなかった。
不自然な音の羅列になってしまう。

それでもルシエルは、時雨の言いたいことを理解した。

「……そう簡単に……死ねませんよ……」

力なく呟くと、その天使は小さく笑って見せた。

時雨はぼろぼろ零れる涙を拭いながら答える。

「て……てめっ……！ 生きてやがっ……のかよ！

お、俺はてつきり……し……死んだ……かと思っ……」

上手く言葉が出てこない。

途切れ途切れになりながらも言う、ルシエルは意地悪く微笑んだ。

「何、泣いてんですか……みつともない。

僕としては、こういうときは……笑ってほしいですね……」

「う……うるせえ！ テメーが悪りいんだぞっ！」

誰かの前でこんなに泣いたのは、初めてだったかもしれない。

しかし、いつもと変わらないルシエルの口調に安心したのか、時

雨は泣きながらも笑みを浮かべてみせた。

嬉しいときにも泣けるんだということを、実感しながら。

「……そう言えば、ルシエル大丈夫かお前」

時雨はなんとか涙を拭って訊いた。

見た限りでは、そんなこと聞くまでもなく大丈夫ではなさそうだ。ルシエルはぎこちない笑みを浮かべる。

「……あまり……大丈夫ではなさそうです……
もうあちこちぼろぼろですよ……」

予想通りの言葉が返ってくる。

話すことさえ辛そうで、言葉は途切れ途切れだった。

時雨は重傷のルシエルを抱えて途方に暮れた。

これからどうすれば良い。

先程の光だか雷だかで虫はどこかに行ってしまったようだ……
怪我した天使を病院に連れていくことなどできない。

その前に、幽霊の自分が天使を病院に連れていったところで、心
霊現象が起こるだけの様な気がする。

そんな時雨の心配を余所に、ルシエルが再び口を開いた。

「生きてるのが……不思議ですよ……」

僕も……あのときは、死んだかと思いました……」

「その人間のお陰だな」

ルシエルが言葉を切った直後、別の声が現れた。

いつの間にそこにいたのか。

時雨の目の前に、一人の天使が立っていた。

神官が着るような白い服を、動きやすいように要所でまとめ、肩
下まである金髪が風になびく。

大きな白い翼はその者の威厳を表しているようだ。

大天使ミカエル。

もちろん時雨は知らないが、ルシエルは驚いたように目を見開い
た。

「ミカエル……なぜここに？」

時雨の耳に、ルシエルの呟きが聞こえる。

「ミカエル……」

時雨は聞こえた名前を口の中で呟き、目の前の天使を見上げた。
ミカエルはしばらく黙ったまま二人を見下ろしていたが、小さく首を振ると二人の前に膝をついた。

「お前たちに話がある。……立てるか？」

そう言ってルシエルを見つめる。

この状態で動けるはずもないと思うが、一応訊いてみた。

「無理です」

即答するルシエルに、ミカエルは渋い顔をするが、そう言うのなら仕方ない。

ミカエルは徐にルシエルを抱き上げ、肩に担いだ。

細い身体のわりには、力はあるようだ。

ルシエルが苦痛に顔を歪める。

「……痛いんですけど……もっと優しく扱ってくださいよ……」

「それだけ軽口が叩けるなら問題ない」

「……………」

そうきっぱり言われてしまっただけは何も言い返せない。

ルシエルはぶちぶちと文句を言っていたが、とりあえずミカエル

に従うことにした。

ミカエルは続いて時雨に手を差し出した。時雨は多少迷ったものの、手を借りて立ち上がった。

「これから上に戻る。

こいつを休ませてやらなくては」

ミカエルは時雨の手を掴んだまま、ちらりとルシエルに目を遣り淡々と喋る。

そしてそのまま羽を広げた。

「……っておい、飛んでく気かよ?」

二人も連れていては簡単に飛べることはないだろう。

途中で落ちるのはごめんだ。

時雨の言葉には、そういったニュアンスがありありと込められていた。

しかしミカエルは気にした様子もなく、数度羽をはばたかせる。

「掴まっている」

それだけ言うと足が地面から離れ……

次の瞬間には結構なスピードで飛んでいた。

このスピードはミカエルの能力によるものだが、決して飛行速度が上がるだけの代物ではない。

「はっ……速ええーっ!?!」

驚き叫ぶ時雨にわずかに眉を寄せつつも、ミカエルは黙って上を目指し飛んでいく。

ぎゃあぎゃああとわめく時雨と、ぐったりとしたルシエルを連れて飛ぶことしばし。

やがて不思議な雲が見えてきた。

中心部分が台風のように渦巻いている。

どうやら、これが天国に続く道のようなのだ。

先程の大樹と言いこの渦巻き雲と言い、まともな道はないのだろうか。

時雨は不安そうにミカエルを見上げる。

だが、ミカエルは時雨の視線も気にせず、迷わずその中に突っ込んだ。

その後は何がどうなったのか、時雨ははっきりと覚えていない。しかし、長いような短いような時間を飛び続けると、いつの間にか目の前には雲も何もなく、うつすらとした霧が漂っていた。

一番最初に見た、天国の外の風景だ。

気付くと時雨は地に降ろされ、数歩前をルシエルを担いだミカエルが歩いていった。

時雨は慌ててミカエルを追う。

近くまで行くと、二人の会話が聞こえてきた。

「……………酔ったかもしれません」

「私に向かって吐くなよ」

「……………努力します……………」

この妙に笑いを誘う会話に、時雨は心の底から、こいつら実は新し手のお笑い芸人か何かじゃないのか……………などと考えてしまった。

そのまましばらく歩き続けた。

その間特に話すこともなかったので、三人ともただ黙って歩いて

いた。ルシエルだけは黙って担がれていた。

時雨はミカエルから数歩下がった位置を保っていたが、その目線は時折心配そうにルシエルへと向けられている。

どれほど歩いただろうか。

やがて三人の前に巨大な門が見えてきた。

カエルスへの門だ。

時雨は目を凝らして門を見た。

先程は誰もいなかった門の前に、人影が立っていたような気がしたからだ。

確かに門の前に誰かがいる。

近づくにつれ、それはだんだんはつきりと見えてきた。

時雨の知っている顔だ。

門番のサダルメリク。

それを確認すると、時雨は大きく手を振り叫んだ。

「おーいサダルメリク！　また会ったな〜！」

時雨の声を聞いたサダルメリクは、驚いたような顔で時雨たちを見ていた。

何故ここに再び時雨が現れたのか。

何故ミカエルがルシエルを連れてここに来たのか。

解らないことばかりだ。

そして何より、何故ルシエルが怪我をしているのか。

「すまん、サダルメリク。こいつを休ませたいのだが」

考えがまったくまとまらないうちに、ミカエルが話し掛けてきた。サダルメリクは途惑いながらも、門の脇に建っている小さな小屋を示した。

「では……あちらへ」

いつも自分が寝泊りしているところだ。

自分よりもずっと身分の高いミカエルを、狭い小屋に案内するのは多少心苦しいが、この際仕方ない。

サダルメリクは先頭に立ち、三人を小屋の中へと招き入れた。

小さな小屋の小さな部屋は、四人も入るとかなり狭い。

ミカエルはルシエルを奥のベッドに寝かせ、小屋の外に出た。

時雨は制服が血で汚れてしまったので、サダルメリクの服を借りることにした。

中世のコスプレのような格好は御免だが、サダルメリクは割と現代風の服を持っていたのでそれを選んだ。

ルシエルの服も汚れてはいたのだが、生憎サイズが合わないのでものままだ。

そこは我慢してもらうしかない。

外に出たミカエルは小屋の前にしゃがみ込み、雲のような白い地面に右手を付ける。

時雨とサダルメリクは小屋の中からその様子を窺っていた。

二人の視線を浴びながら、ミカエルは手の先に力を込める。

すると、ミカエルの手が触れている地面からうっすらと青白い光がさし、ドーム状に小屋を覆った。

それを確認すると、ミカエルは小屋の中へと戻ってくる。

中に入るなり時雨がミカエルに問い掛けてきた。

「いったい、何やったんだ？」

時雨の純粹な興味からの質問に、ミカエルは無表情で短く答える。

「結界を張った」

ミカエルはそう答えるとサダルメリクの方に向き直り、

「話がある。」

もしかしたら、お前にも無関係ではないかもしれない」

そう言いながら奥のテーブルの前に座った。

時雨とサダルメリクは一瞬顔を見合わせ、ミカエルに続いてテーブルを囲むように座る。

それを見てから、ミカエルはテーブルに肘をつき、口元で指を組むと小さく抑えた声で話し始めた。

「私は今、ゼウス様からある司令を受けている」

その口調は静かで、ミカエルの心を窺うことはできない。

だが彼の内心では、いつ誰に話を聞かれるか、ゼウスに見つかるとはいいか、自分は間違っているのではないか、様々な疑念、懸念が渦巻き焦りを抑えきれないでいた。

そんな状態のまま、ミカエルの話は続く。

「それは、木高時雨という人間の魂を神のもとへ連れ帰るというものだ」

「俺を？ 何で？」

いきなり自分の名前が出るとは思ってなかったのか、時雨は思わずミカエルに聞き返していた。

ミカエルはたっぷりと時間をかけて息を吐くと、言葉を続けた。

「それは、木高時雨……きみが、大天使リリスの生まれ変わりだか

らだ」

その言葉にサダルメリクは息を呑んだ。
事情が分かっている時雨は、ただ眉をひそめるだけだったが。

「これは百年前に起こったある事件が原因だ。
その事件の中核となったのが……奴だ」

ミカエルは目を奥の部屋に向けた。
ルシエルが寝ている部屋に。

サダルメリクは痛みを堪えるような表情で黙ったままだ。
時雨はわずかに首を傾げると訝しげな表情で尋ねた。

「リリス……？ 誰だそれ」

その声を合図に、ミカエルは長い事件の内容を語り始めた。

それは今から百年前のこと。

当時、三人の大天使がいた。

守護の大天使ミカエル。

治癒の大天使リリス。

そして破壊の大天使ルシファール。

大天使とは、数多い天使たちの上官のようなものである。

リリスは子供のような外見をしていたが、ミカエルが初めてカエ
ルスに来て天使になったときには、既に大天使の地位にいた。

天使というのは、そういった種族がいる訳ではない。
実は、職業のようなものである。

一度死した魂に、神が仮初めの肉体と新たな名を与え、人々の魂の管理を主な任務とする。

天使とは、元々は時雨と同じ人間だったのだ。

ミカエルが大天使となってから数百年後、ルシファーという名を与えられた一人の人間が天使になった。

「この名前、あまり好きじゃないんですよ」

事ある毎にそう言っていたため、彼と親しい者は彼のことをルシエルと呼んだ。

ルシエルは、他に類を見ない程の驚くべき早さで、大天使の地位に上り詰めた。

ルシエルが天使になってから、二年程の年月しか経っていなかった。

ルシエルは異例の早さで大天使になった訳だが、それ以前にペアで仕事をしていたのがサダルメリクだ。

新米天使だったルシエルに仕事を教える、先輩と後輩のような関係だった。

そして、ルシエルが大天使になってから数十年後のこと。

ある時期から、ルシエルは神殿に姿を見せなくなった。

その直前に最高神であるゼウスと会っていたという話があったが、本当かどうかは判らない。

そして彼はとうとうカエルスからも姿を消した。

だが数年の後、ルシエルは再び姿を現した。

反逆者として。

たった一人で、数百人の天使と神を相手に。

普通に考えれば、結果は明らかだ。

だが、ルシエルはどうやったのか、神とも互角に渡り合える程の

力を身に付けていた。

それこそ並の天使では太刀打ちできない程の。

予想外の強さと巧みな戦略で、約一年もの間戦いは続いた。

その戦いの犠牲者は一人。

大天使リリスだ。

他に死者がいなかったのは幸いだったが、仲間を殺されて黙って
いられる訳もなく……

最悪の方法で、戦いは終わった。

ルシエルと、以前最も親しかった者……サダルメリクを処刑した
のだ。

ルシエルは自ら神の前に赴き、敗北を認めた。

こうして戦いは終わり、ルシエルはその後百年間、闇の牢獄に監
禁。

そして現在釈放された。

ルシエルを責めないでほしい、許してやってほしいとの、リリス
の遺言を尊重した結果だ。

しかし、皆がリリスと同じようにルシエルを許した訳ではない。
だからルシエルは未だ堕天使と言われ、忌み嫌われている。

ミカエルはそこで話を切った。

時雨は驚きと怒りが混ざったような顔で黙り込み、サダルメリク
は俯いたまま語ろうとはしない。

「何か、質問は……？」

ミカエルが小さく呟くように言葉を発する。
少し時間を置いてから、時雨はぼつりと呟いた。

「何で、サダルメリクが処刑されなきゃなんねえんだよ……」

「疑いを持たれた」

ミカエルは沈痛な面持ちで答える。

「奴を手引きしている者がいるのではないかと。
悪い噂が広まるのは早い。」

サダルメリクは捕らえられ、皆のしている目の前で両の翼をもがれた。根拠のない噂のために……」

それを聞いた瞬間、時雨は感情に任せてテーブルを叩きつけ立ち上がり、目の前のミカエルに詰め寄った。

「何だよ！ 何でたかが噂程度でそんなことすんだよ！
あんた偉い天使なんだろ！？ 何で止めなかったんだよ！」

つい喧嘩腰で叫ぶ時雨に、ミカエルは静かに言う。

「できることなら、私も止めたかった。」

だが、戦いで負傷し、身動きがとれなかった。
気付いたときには、もう戦いは終わっていたんだ……」

その顔には深い苦悩の色が浮かんでいる。

あのとき、せめて処刑の時間を遅らせるよう、誰かが進言していれば、或いはサダルメリクが翼を失う前に、ルシエルを捕らえるこ

とができたのではないか。

ミカエル自身、サダルメリクの処刑の話を知ったときには、ひどくショックを受けた。

何故、何の罪もない者が処刑されなければならないのか、と。

戦いが終わった後でさえ、サダルメリクは堕天使の仲間と言われ、たった一人門の外に追いやられている。

こんな理不尽なことが許されるのか。

何度も神にサダルメリクの処遇を改善するよう進言したが、何かと理由をつけて無視されていた。

守護の大天使と言われながら、同僚一人、部下一人守ることができない。

ミカエルは、きつく手を握り締めた。

そんなミカエルを見て、時雨は気まずそうに椅子に座り直す。

「……………わりい」

目を逸らし、ぼそりと呟いた。

「いや…………」

それに答えてミカエルが短く言う。

サダルメリクはというと、俯いたままテーブルの一点を見つめ続けている。

ただ何となくそこに目線がいったまま、動けなくなっていた。

背中…………左右の肩甲骨辺りにある古い大きな傷痕が、ずきりと痛んだ気がした。

そのときだった。

奥の部屋から小さな物音がした。

その場にいた全員が、反射的にそちらを見る。

ルシエルが、ドアの前に立っていた。

「ルシファー……」

「……………」

「もう大丈夫なのか？」

三人の反応はそれぞれだったが、視線だけは同じ人物を見つめている。

ルシエルは皆の視線を受けて、困ったような顔で笑った。

「……やだなあ、そんなに見つめられたら照れるじゃないですか。傷はもう塞がっているようです。少し貧血気味でくらくらしますけどね」

はぐらかすように言いつつ、テーブルの一角の空いているスペースに座る。

それを見計らって、ミカエルが声を掛けた。

「ルシファー……百年前の事件、何があったんだ。

いったい、何が原因で戦は始まったのだ。

真実を……話してくれないか」

ルシエルは一度ミカエルに視線を送るとテーブルの上に視線を落とし、事件のあらましを途切れ途切れに語りだした。

事件の発端は、ごく些細なものだった。
一冊の本。

そこには、世界が誕生してからのことが、事細かに記してあった。
その本は、見ようによってはただの歴史書だが、見る人が見れば
気付くことができる。

それがこの世界の歴史書ではないことに。
その本には、この世界の創世からの歴史が、事細かに記されていた。
た。

しかし、その本にはある仕掛けがしてあったのだ。
ゼウスが施した封印術である。

ある一定の規則に従い読み進めると、本に書かれた文字が変わり、
まったく違った内容の書物に変化するものだ。

どんな偶然が重なったのか、あるいはそれが必然だったのか、ル
シエルは神殿の中でその歴史書を見付けた。

歴史書というよりは、聖書のような内容だったが。
そしてまた、本の仕掛けにも気付いてしまった。
それを読み、理解した。

世界は、一つだけではないことを。

いや、正確には世界は一つだ。

自分たちのいるこの世界は、もともとあった一つの世界を模倣し
て創られたものだったのだ。

その本によれば、世界を創ったのは一人の女神とされている。

そして今、その女神は覚めることのない眠りにについている、とも。
ではこの世界で神を名乗る者たちは何なのだ。

ルシエルは夢中で本を読み返した。

決められた順番で文字を読み上げ、定められた単語を指でなぞり、
時に本を逆さまにして光に当てるなど、ゼウスが仕掛けた様々な封

印を解きながら。

そして何度も読み返すうちに、少しずつ理解していったのだ。

最初、この世は無だった。

何もないその世界に、一人の女神が降り立った。

女神は何もない世界に、一つの世界を創った。

その世界の覇権を巡り、魔王が姿を現した。

戦の原因は今となっては解らないが、魔王と女神は世界を賭けて戦い続けた。

そしてついに、世界はぶつかり合う二つの力に耐えきれず、粉々に砕け散った。

その瞬間に女神と魔王も力尽き、永遠の眠りについた。

世界と共に砕け散った魂たちは互いに協力し合い、砕けた世界を元に戻そうと、世界の欠片を繋ぎ始めた。

しかし神でも何でもいない者が世界を元に戻せるはずもなく、小さな世界の欠片があちこちに塊を創り、それぞれの世界として独立を始めた。

真の統治者である女神のいない世界は、常に不安定だ。

各地で戦が起こり、天変地異が人々を脅かす。

不完全な世界に生まれるのは不完全な命。

世界が元通りにならない限り、安寧は訪れない……

分厚い歴史書に書かれていた秘密は、そんなお伽話のようなものだった。

ルシエルがその歴史書を解読して数日後、ゼウスはルシエルを呼び出した。

その歴史書を読んだのか。

そこに書かれている内容を理解したのか。

ルシエルは首を縦に振った。

ゼウスの話は続く。

この世界を元通りにしたくないか。

不完全な偽物の世界ではなく、完全なる世界が欲しくないか。
ルシエルは、今度は首を横に振った。

例え偽りの世界であろうとも、自分たちはここで生きている。

それで充分ではないか。

世界を元に戻したところで、今更何が変わると言うのか。　しかしゼウスは言う。

偽りの世界に生きる意味などあるものか。

何故真実を欲しない。

この偽りの世界では、お前の命、生きた証さえ偽物かもしれないのだ。

こんな世界に生きる意味などあるものか、と。

ルシエルは不思議でならなかった。

なぜそうまで元の世界を欲するのか。

その異様なまでの執着は一体何なのか。

神の真意は解らないままだった。

しかし心の底から沸き上がる不信任。

それに突き動かされるままに、ルシエルは独自に神の周辺を調べ始めた。

今にして思えば、嚴重な警備を掻い潜って最高神を調べるなど、容易にできることではない。

恐らくゼウスに泳がされていたのだろう。

目的だけならば解っている。世界を元の一つの形に戻すことだと。しかし結局のところ、目的は解ったが、手段も理由も調べることはできなかった。

これ以上の追求は無理だと判断したルシエルは、ある決意をする。このカエルスと酷似しながらも正反対の場所、アビスへと旅立つことを。

或いはアビスでならば、カエルスでは手に入らなかった情報があ

るかもしれない。

うまく上層部に入り込めば、力を貸してくれるかもしれない。
上に取り入るのは得意だ。

だからこそ短期間で大天使という地位を獲得したのだから。

果たしてルシエルの読みは的中した。

やはりアビスの王は、神の目的を知っていたのだ。

そしてそれに伴う犠牲も。

世界を元に戻すということは、ばらばらになった無数の世界を一つに集めるということ。

当然のことながら、数多の世界に住み、増え続けた人々がたった一つの世界に納まりきるはずもない。

ゼウスはまず無駄な人口を減らそうと考え、他世界の住人を葬るために、特異な能力を持つ天使という生きものを造り上げた。

そして自分の思想に異を唱える者が現れたときのため、共にこの世界を創り上げた魂たちから理解者を募った。

それが神だ。

ルシエルたち天使は、ゼウスにとっては目的のための駒にすぎなかったのだ。

ルシエルはついに真実を知り、最高神に反旗を翻した。

そして繰り広げられた一年間の戦は、先程ミカエルが話した通りの幕切れを迎えた。

ルシエルの語った話に、一同は言葉もなく、ただ黙って座っていた。

ミカエルやサダルメリクは明らかに動揺し、時雨も困惑したような顔つきになっている。

特にミカエルの心は他の誰よりも穏やかではなかった。

数百年もの間信じて仕えてきたものを、根底から覆されたのだ。

自分が今まで殺人の道具として神に生かされていたと思うと、悲しさと悔しさが溢れてくる。

その口からは、深く長い溜め息が聞こえた。

サダルメリクはというと、一人席を立ち小屋の外へと向かった。

その足取りは重い。

ドアを押し開けると静かに出ていく。

小屋の外で壁に寄り掛かると、その場にずるずると崩れ落ち頭を抱えて黙り込んだ。

時雨はそんな二人を心配そうに見ていたが、この重い沈黙に耐えきれなくなったか、ルシエルに向き直り口を開いた。

「……なあ、それで……あー……何で俺がそのリリスとかいう奴の生まれ変わりだからって、神様とやらに狙われなきゃなんねえの？」

中々言葉が見つからず視線が宙を彷徨い、それでも何とか出た言葉は本心からのものではない。

時雨にとってはどうでも良いことだったのだが、他に言葉が浮かんでこなかった。

しかしルシエルは困惑したような表情で時雨を見遣り、次いで懺悔するかの如く深く首を垂れた。

「すみません……貴方を巻き込むつもりはなかった。

しかし、ゼウスは見逃してはくれそうにもありません……

リリスの治癒能力は、ゼウスにとってはどうしても必要なものだったんです。女神を目覚めさせるために」

リリースが持っている能力は治癒だった。

それも瀕死の人間さえ一瞬で復活させる程、強い力だった。傷つき眠り続ける女神を癒すために、彼の能力は絶対に必要なものなのだ。

それを聞いてミカエルが顔色を変える。

思わず立ち上がり、椅子ががたと後ろに倒れた。

ルシエルと時雨が弾かれたようにそちらを見る。

ミカエルはそんなことには構わず、ルシエルを見据えたまま言う。

「まさか……お前、そのことを知っていたから……だから殺したのか……」

その口調は静かだった。

しかし心の動揺を隠しきれていない。

かたかたと手が震え、非難の目でルシエルを見つめる。

激昂しなかったのは、自制心が人一倍強かったからだ。

そうでなければ、親友であるリリースが、同僚に殺されたなど知って、黙っていられるはずがない。

ルシエルは黙ってその視線を受けとめると、静かに頷いた。

それを見たミカエルはルシエルに詰め寄り、その肩を掴んで叫んだ。

「何故だ……！ 何故リリースを殺した！

答えろ！ ルシファー！」

時雨はどうして良いか解らず、黙って二人を見つめていた。

ルシエルは自分の肩を掴み震える手にちらりと目を向け、真つすぐにミカエルを見つめ重い口を開いた。

「リリースは……全てを知っていました。

神の目的、自分たちが生み出された理由、そして自分に与えられた役割と、その後に待っているであろう結末……彼も、僕と同じようにこの世界が創られた理由を知っていたのです」

リリスはルシエルが神に反逆の狼煙を上げたときに、一人誰にも気付かれないようにルシエルを訪ねた。

そして自分も全てを知っていることを打ち明け、こう言ったのだ。

自分を殺してほしい、と。

「そ……んな、馬鹿な……リリスが何故……」

ミカエルは呆然と呟き、ルシエルの肩から手を放した。

ルシエルは言う。

リリスが望んだことだったと。

神に利用されるのはもう嫌だ。だから神の期待を裏切ってやろう。思い通りにさせてたまるか。

おとなしいリリスからは想像もできなかった言葉に、ルシエルは途惑った。

それに、仲間であるリリスを殺すなど、正直良い気はしない。

しかしリリスの心からの願いに、とうとう折れた。

リリスは満面の笑みで言った。

ありがとう。

そして、今は無理だけど、百年くらいしたら必ずきみの力になる、と言に残し去っていった。

それから暫らくの後、戦場となった神殿前の平地で、リリスは息を引き取った。

「言い訳に聞こえるかもしれませんが……それでも僕がリリスを撃つたのは事実です。」

許せないことだというのも解っています。

僕を侮蔑しても罵っても……殺されても構わない……それで貴方の気が済むのなら」

そう言ってルシエルは席を立った。

自分よりやや低い位置にあるミカエルの目を見つめる。

ミカエルは黙ってルシエルの目を見返す。

そこには動揺はあったが、非難の色はない。

大事な部下であり同僚の言葉だ。信じないでどうする。

誰が悪いとか、もう、そんな単純なことではないのだ。

今ここで、ルシエルを責めることはできない。

ミカエルの心には、そんな気持が溢れていた。

しばしの沈黙の中、ルシエルは深々とミカエルに頭を下げ、そしてドアへと向かい小屋の外に出ていった。

どさりと、今までルシエルが座っていた席にミカエルが腰を落とす。

時雨は小屋を出ていくルシエルの後ろ姿を黙って見送った。

一人外に出たサダルメリクは、肩の後ろの傷痕を押さえて座り込んでいた。

あのときに感じた痛み、恐怖、絶望を、今でも覚えている。

謂れもなく捕まり、処刑台に上げられたときの気持ちを。

これはきつと、ルシエルをおびき出すための罠だ。

本当に処刑されるはずがない。

そんなかすかな期待と。

ルシエルが来たら、彼は殺されてしまうかもしれない。

そんな不安と。

もし彼が来なかったら、このまま処刑が実行されるのだろうか。

そんなとてつもない恐怖と。

それらの感情に押し潰された心さえ切り裂く、剣の閃き。

それが振り下ろされた瞬間、サダルメリクの内を支配したのは、翼を切り落とされた痛みと……

サダルメリクが思考の海に沈みかけたとき、少し立て付けの悪い小屋のドアがきしんだ音をたてて開かれる。

小屋の中からルシエルが出てきた。

サダルメリクは思考を中断して立ち上がる。

小屋の横手、窓のない壁の前で、二人は向かい合った。

ミカエルの結界が張ってあるので、多少声を出しても外に漏れることはない。

「サデイン……」

ルシエルはかつて呼んでいた愛称で、友の名を呼ぶ。

サダルメリク——サデインは無表情のまま、真つすぐにルシエルを見つめていた。

その目があまりに真つすぐで、呼び掛けたルシエルの方が目を逸らしてしまう。

俯いたまま、それ以上何も話せなくなってしまった。

会って言いたいことが、謝りたいことが沢山あった。

そしてできることなら、あの頃のように……

「ルシエル」

澄んだ声が響いた。

ルシエルははっと息を呑む。

しかし目線は地を彷徨うままだ。

「人と向き合って話をするときは……」

サディンは構わず続ける。

「俯くな。前を向け。」

……俺は、以前にもそう言ったはずだ」

ルシエルはその声に顔を上げる。

サディンの目は、真つすぐ前を見ていた。

視線の先にあるのは、ルシエルの目。

ルシエルは居た堪れなくなり勢い良く頭を下げた。

一拍置いて黒髪が顔にかかる。

しかしそんなことは気にせず声を張り上げた。

「すみませんっ！」

いきなりのことに、サディンは呆気にとられてルシエルを見下ろした。

瞬きを一つして、ぽかんと口を開けている。

そんなサディンの様子には気付かず、ルシエルは言葉を続ける。

「すみません、いえ、許してもらえるなんて思ってます！ 僕は取り返しのつかないことをしてしまったんです！」

「おい……」

「僕の所為で……貴方を巻き込んでしまった……！」

「ルシエル」

「どんなに謝ったって許されることじゃないことは解っています。でも僕は……サディ」

「聞け」

ごずん

話の途中でサディンの鉄拳が、頭を下げた姿勢のままだったルシエルの後頭部に決まった。

勢いで前のめりに倒れるルシエル。

慌てて痛む頭を擦りつつ顔を上げる。

目の前にはサディンの足。

視線を這わせ順に見上げていくと、哀しげに眉を寄せたサディンの顔があった。

「俺が聞きたいのは、そんな言葉じゃない」

絞り出すかのような声。

「サディン……」

ルシエルは相手の名を呼んで静かに立ち上がる。

ルシエルの方が身長が高いため、今度は必然的にルシエルがサディンを見下ろすかたちになる。

今はもう俯いてしまっているサディンの表情は、上から見ているルシエルには判らない。

ああ、それでも、泣いているのだろうと解る。

サディンはきつと、泣いているのだろう。例えば涙を流していなくとも。

最初は解らなかったサディンの心を、だんだんと思い出してきた。

長い付き合いだったのだから、互いの心など手に取るように解る。ただ、少し忘れていただけだ。

ようやく思い出した。

サデインはずっと、ルシエルを待っていたのだ。

「サデイン………た………ただいま………」

ルシエルがゆっくりと言葉を発する。

それはサデインがずっと待っていた言葉だった。

「おかえり……ルシエル」

そう言っサデインは顔を上げてルシエルを見つめる。

そしてようやく、微かにではあるが微笑んでみせた。

そしてルシエルに近寄りそっと手を伸ばし……

するりと腕を回し背後に立つとルシエルの手足の関節を逆方向にねじ曲げた。

「いっ……!？」

あだだだだ痛いのだだっ!」

「お・ま・え・は、なんで何の相談もなしに一人で行動するんだ俺がどれだけ心配したと思ってる反省しろ反省っ!」

「ごっ……ごめんなさいすみませんでした二度としません平にご容赦くださいっ!」

ぎりぎりと鳴る関節に悲鳴を上げながら許しを請うルシエル。

それを聞いてようやくとサデインはルシエルを解放した。

へなへなと崩れ落ちるルシエルに背を向け、サデインは小屋へと

足を向けた。

「行くぞ、ルシエル」

「……はい、サディン」

苦笑いしながら立ち上がり、ルシエルはサディンの後に続いた。翼のないサディンの背を見つめる。

きつと今でもその背には深い傷痕が残っているだろう。

その原因となったのは自分だ。

例えサディンに許してもらおうと、その事実は変わらない。

それでも構わないと思っていた。

自分は、許しを請える立場ではないのだから。

しかしそれは予想以上にルシエルの心の負担となった。

話ができないというのは、本当に辛いものだ。

事件の後は暫らく幽閉されていたし、釈放された後もなんとなく

気まづいまま声をかけることさえできなかった。

謝ることもできず、日々大きくなる心の負担。

それがたった今、静かに溶けて消えていくのが解った。

それは事情を知らない者から見れば、ひどく些細なことなのだろう。

ただ、友人との諍いが解消されただけにすぎないのだから。

しかしルシエルにとっては、この上ない幸せだった。

ねじ曲げられた関節は痛かったけれど。

小屋の中では時雨とミカエルが向き合っていた。

「……で、結局のところ、俺がそのリリースとかいうのの生まれ変わ

りだと、どうだって言うんだよ」

時雨は眉をひそめミカエルの返答を待つ。

ミカエルは暫し考え、ゆっくりと口を開いた。

「神が欲しいのはリリスの力だ。

その治癒力をもって女神を目覚めさせるため。

そのために、時雨を捕らえて従わせるつもりなのだろう。無理矢理にでも、な」

現時点で考えられることといえば、それしかなかった。

丁度そのとき、小屋の扉をサディンが押し開けて中に戻ってきた。その後ろにルシエルが続く。

「いつまでもここでこうしていても事態は進展しません。寧ろ悪くなる一方です。

これからどうするか、少し対策を考えないといけませんね」

ルシエルは真剣な顔で部屋の中にいる三人を見渡した。

ルシエルの言うことは最もで、いくら結界が張ってあるとはいえ、ゼウスたちに見つかるのは時間の問題だろう。

このまま何もせずここに留まる意味はない。

一刻も早く、どこか安全な場所に逃げなければ。

しかし考えたところで、神の目から逃れられるような場所はない。浮かばなかった。

カエルス全土は常に見張られているし、ガイアに戻ったところで、ゼウスにはすぐに見つかるだろう。

焦る程良い考えは浮かばず……

皆が皆腕組みして考え込んでいる中、不意に時雨が声を上げた。

「なあ、地獄に逃げるってのは？」

時雨が挙げた場所の名に、その場にいた全員がはっとしたように顔を上げた。

地獄……アビスは、ここカエルスと対を成す場所。

神から逃げるには絶好の場所かもしれない。

しかし……

「危険ですよ？」

ルシエルが眉根を寄せて言った。

広く深いアビス。

そこは未だ未開の地で、獰猛な化物がうろうろしている。

アビスの住人たちは、皆一樣にカエルスに住む者を恨み、足を踏み入れた瞬間に攻撃される可能性も否めない。

能力を持つ天使ならともかく、ただの魂である時雨にはとても危険な場所だ。

しかしそれを聞いても、時雨の顔には恐怖の色など微塵も浮かんでいなかった。

神に狙われているのだから、どこに居ようと危険であることに変わりはないのだから。

もはやアビスに行く気まんまんである。

ひよっとしたら、アビス見物もしてみたいだけかもしれないが。

時雨がそう言うならばと、ルシエルとサディンは首を縦に振った。最後まで渋っていたミカエルも、他に考えが浮かばずに、仕方なくその案に賛成した。

しかしここに来て問題が生じた。

「……で、アビスに行くのはいいとして、どうやって行くんだ？」

このミカエルの言葉に、全員が言葉をなくした。
カエルスとアビスは相反する場所。

二つの場所を繋ぐ道などあるはずもない。

一人お気楽な時雨は笑いながらルシエルに尋ねる。

「ルシエル、お前知ってるんだろ？」

時雨の問い掛けにルシエルはゆっくり首を振る。

時雨は不思議そうに眉をひそめた。

「なんでだよ。地獄、行ったことあんだろ？」

あ、ひょっとして道忘れたとか？ 百年も前だし」

ルシエルは苦笑して、違いますと首を振る。

「僕が使った道は、もう閉じてますよ」

「どういうことだ？」

時雨が益々不思議そうに首を傾げると、ミカエルが説明してくれた。
た。

「ここには時折アビスの獣が迷い込むことがある。

どうやら、不定期に双方に繋がる道があるようなのだが……」

「道の出現に規則性はなく、場所も時間もばらばら。

道のできる場所を予測することは不可能だ」

ミカエルの言葉をサディンが引き継いだ。

どうにも難しい選択をしてしまったようで、皆が皆、地獄行きは

諦めかけていた。

そのときだ。

サデインが急に険しい顔をして窓の外に目を向けた。
つられて時雨も外を見るが、変わった様子は何もない。

「どうかしたのか？」

時雨の問いに答えたのはルシエルだった。

「どうやら、渡りに船らしいですね」

ルシエルの顔を見ると口元には笑みが浮かんでいた。
ミカエルとサデインも同様に。
訳が分からないのは時雨だけだ。

「どういうことだよ」

三人の天使は小屋の扉へと足を向けた。
そのまま外に出る。

訝しげな表情で三人についていく時雨に、ミカエルが振り向き言う。

「道が開いた。」

アビスへの道がな」

決意

小屋の外に出てみると、確かに先程までとは雰囲気が変わっていた。

辺りにうっすらと漂う霧は深くなり始め、嫌な気配が充満している。

物陰からこちらを覗き見ているような、針の視線。

その感覚に、時雨は覚えがあった。

最初にここに来たときと、一人で迷い込んでしまったときと。

そのときの雰囲気は酷似している。

思い出してみれば、最初に来たときにルシエルが言っていた。

小鬼が集まってきた、と。

時雨には何のことか解らなかったが、鬼と言うくらいだから地獄の住人なのだろう。

つまり、あのときもアビスへの道が開いていて、そこから小鬼が入り込んできたのだ。

そのときの雰囲気と同じということは、まさに今、この場所にアビスへの道が繋がったということなのだ。

ふと時雨は、疑問に思ったことを訊いてみた。

「サダルメリクは何で解ったんだ？　ここに道ができるって」

アビスへの道は、完全に予測不可能だと言っていたのは、サディンだった。

しかし、道が開くのを感知したのもサディンだ。

だが時雨の言葉に、サディンは首を振る。

「道を察知したんじゃない。小鬼の気配を捉えたただけだ」

つまり、道が開くのを予想した訳でも、道の出現を知り得た訳でもなく、アビスの獣の気配を感じ取ったのだ。

誰よりも敏感なセンサーは、サディンの能力だった。

彼はミカエルが結界を張ったそのときから、ずっと周囲の気配を探っていたのだ。

「僕が行きましようか？」

「時間が惜しい。俺が行く」

ルシエルの申し出に、しかしサディンは静かに断り一步前が出る。その手には数本の針が握られていた。

針と言っても一本が手と同じくらいの長さがあり、太さも編み棒程ある針だ。

それを指の間に挟み、胸の高さで構える。

霧はだんだん濃くなり、辺り一面が真っ白になっていった。

そんな中、サディンが動いた。

持っていた針を霧の中に投げる。

その直後、霧の中から奇妙な鳴き声が聞こえてきた。

その数三つ。

そしてそれ以降、何も聞こえなくなる。

時雨たちのいる場所からは見えないが、少し離れたところには、三匹の小鬼が頭に数本の針を刺して転がっていた。

まさしく瞬殺である。

大天使クラスの二人と比べても、サディンの戦闘技術は目を見張るものがある。

近、中距離戦ならば、ルシエル以上の実力を発揮するのだ。

「お見事」

ルシエルが手を叩きながら称賛する。

時雨は呆気にとられたようにサディンを見ていた。

「道はまだ消えていないようだな。場所は覚えているか？」

ミカエルは冷静な顔でサディンに尋ねる。

その言葉に頷き返し、サディンは皆の先頭に立って歩き出した。小鬼の気配が最初に現れた場所に、道がある。

結界の外に出たため、すぐに神に見つかるだろう。できることならば、その前にアビスへと逃げたい。

少し歩くと、それはあった。

雲のような地面の一部が、赤黒く変色して渦巻いている。

これが道に違いない。

が……

「小さいぞ？」

眉をひそめて時雨が言う。

道は、人が通るにはあまりにも小さかった。

膝くらいまでの大きさしかない小鬼なら楽に通れただろうが、時雨たちには無理だろう。

期待していただけに、皆がつくりと肩を落とした。

「お手上げですかね……」

「しかし他に方法は……」

ルシエルとミカエルが言い合っている中、時雨は興味深そうに道

の近くまで近寄って行く。

「危ないぞ、時雨」

「平気だって」

時雨はサデインの声に適当に答え、ひらひらと手を振り、道の前にしゃがんで覗き込んだ。

その瞬間に。

道から細い無数の手が飛び出した。

それはあつと言う間に時雨に絡み付き、物凄い力で道の中へと引きずり込んでいく。

「時雨！」

咄嗟にサデインが時雨の腕を掴むが、青白く細い手の群れはサデインにも絡み、時雨もろとも引きずり込もうとする。

先程まで小さかった道は、今や大きく口を開け二人を飲み込もうとしていた。

異変に気付いたルシエルとミカエルが振り返ると、既に時雨の身体は半分以上道の中に消えており、それに引っ張られるような形でサデインも引き込まれていくところだった。

「何だ!？」

「サデイン! 時雨!」

口々に叫びながら二人の許へと駆け寄る。
ルシエルとサデインが互いに手を伸ばす。

指先が触れ、しかしその手を取ることもなく、時雨とサデインは道

の中に引き込まれていった。

その直後から、道は少しずつ小さくなってゆく。

それに気付いたルシエルとミカエルは、躊躇いもせずに道の中に飛び込んでいった。

長いとも短いとも思える距離を、時雨たちは落ちていった。

細長い腕が全身に絡み付いていて、身動きがとれない。

辛うじて左手に感じるサディンの手を、時雨は離さないように握り締めた。

道の中を通っている最中なのだろう。

周囲に景色はなく、太い筒状の赤黒い壁に、同じような腕が何本も生えていた。

不気味な光景だが、時雨にはそれを見ている余裕はなかった。

落下速度はだんだんと上がり、絡み付いた腕が痛い程に全身を締め付ける。

時雨と共に落ちていくサディンにも、その細い腕が絡み付こうとしていた。

右腕から肩、胸と腕が伸びてくる。

サディンは袖の中に仕込んでいた針を取り出し、自分の腕に絡み付く触手のような腕に突き刺した。

途端にキィィィという甲高い叫びと共に、二人に絡み付いていた腕が解けてゆく。

「時雨……！」

締め付けられた腕が痛むが、構わず力任せに時雨を引き寄せた。

そのまま時雨を守るように抱きかかえ、落下していく。

先の方にかすかな光が見えた。

それを確認すると、光は物凄い速さでサディンたちに迫ってきた。眩しさに目を細める。

次の瞬間、唐突に視界が開けた。

「ここが……」

呆然と呟くサディン。

空はなく、赤茶けた土が天井となり、この場所を覆っている。限られた空間でありながら、端の方が見えない程広い。

煙を吐き出す高い山、枯れ木が群生している森、濁った水が溢れる湖。

地下にあるはずのこの国を照らすのは、地獄の王が作った偽りの太陽。

岩肌がむき出しになっている壁からは、威圧感さえ感じる。

天井はかなり高いらしく、それらを見渡してなお地は遠い。

風を切る音を聞きながら、腕の中の時雨を気遣うように確かめる。先程まできつく締め付けられていたため気を失っているようだが、

目立った外傷もなく命に別状はなさそうだ。

サディンは冷静にそれらの状況を観察していた。

焦る気持ちなど微塵もない。

彼は、信じているのだ。

彼が来ることを。

かすかに、鳥のはばたきにも似た音が聞こえた。

そして、一拍の間を置いて景色が止まる。

「サディン！　大丈夫ですか!？」

背中から聞こえた声に、肩越しに振り向き笑みを返す。

「ああ」

わずかに遅れてミカエルが並び、時雨を支える。

「時雨は？」

サデインは時雨をミカエルに任せて、ルシエルに掴まった。

「気を失っているだけです。大事ありません」

「そうか。」

とりあえずどこかに降りよう」

ミカエルは時雨を抱いてルシエルを見る。

ルシエルは頷き自分たちの真下の大地を指差した。

「この場所には見覚えがあります。」

比較的安全な場所ですから、まずは時雨を休ませましょう」

そう言って下へと降りていく。

ミカエルも後に続いた。

数分間の降下の後、四人は地面に降り立った。

赤茶けた大地は荒れ果てており、所々生えている木々はみな枯れている。

見通しは良いため、魔物に襲われる心配はないだろう。
少しでも近付けば、サデインが気配を察知する。

ミカエルは時雨を寝かせ、怪我がないか調べている。
目立つ外傷もなく、呼吸もしっかりしている。

これならすぐに目が覚めるだろう。

ルシエルとサディンはその近くに立っていた。
周囲に聞こえないように、小声で言葉を交わす。

「サディン、大丈夫ですか？」

ルシエルは言ってサディンの腕を見た。
先程巻き付かれていた腕だ。

袖から見える細い手首に、赤く痕が残っている。

「大丈夫だ。心配ない」

サディンは笑いながら、軽く手を振ってみせた。
間違っただけで痛いと言おうものなら、ルシエルのことだ、大騒ぎ
するに違いない。

それに実際大して痛みもないのだから、大袈裟に騒がれる方がも
つとイタイ。

「すみません……僕がもっと早く来ていれば……」

言っただけで肩を落とすルシエルを見て、サディンは眉を寄せる。

「……どうしてお前はいつもそう、マイナス思考なんだ。

今度は来てくれた。それだけで充分だ」

そう言っただけでルシエルの背を叩く。

あのときは、間に合わなかった。

だが今回は間に合った。

それだけで、充分なのだ。

「サディ……」

「いっ……てえ……」

ルシエルが何か言おうとしたときだ。

時雨の呻くような声が聞こえた。

ルシエルとサディンは、はっとしたように振り向く。

時雨がミカエルに支えられて身を起こすところだった。

「時雨、大丈夫か？」

「怪我はありませんか？」

二人は時雨の側に寄って、片膝について口々に言う。

時雨は頭を振りながら

「あー……たぶん平気だ」

と答え、改めて辺りを見回した。

荒涼とした大地や、まばらに生えている木々。

華やかな天国とはかけ離れた、寂れた景色に眉をひそめる。

「ここが地獄……？　　なんか、想像と違うなあ……針山とか血の池とかないのかよ」

そんな時雨の普段と変わらぬ物言いに、皆一様に笑みが零れる。
なにはともあれ、大事はなさそうだ。

時雨は差し出されたミカエルの手に掴まって、ゆっくりと立ち上がった。
皆がその周囲に並ぶ。

「で、来たはいいけど、これからどこに向かうんだ？」

時雨の一言にルシエルが笑みを返す。

「僕の記憶に間違いなければ、この先に知り合いの住む村があるんです。ひとまず、そこに行きましょう」

皆、その言葉に従って歩きだした。

荒涼とした大地は、歩く度に赤い砂塵を巻き上げる。

時雨は呑気に喋りながら歩いていたのだが、それに付き合っていたルシエルと一緒に砂埃を吸い込み、二人で激しくむせたので、仕方なく今は黙って歩いている。

この辺りは、どうやらひどく乾燥しているようだ。

そのままどれ程歩いただろう。

同じような景色が続く場所は、時間の感覚をマヒさせる。

実際は一時間も歩いていないのだが、もう何時間も歩き続けた気分だ。

そして皆、この何もない荒れ地の景色に嫌気がさしてきていた。

特に会話もなく歩いて行くと、しばらくして前方に輝くものが見えた。

近付くにつれ、それははっきりとその大きな姿を現わす。

湖だった。

土に覆われた天井付近から明々と照らす太陽の光を、黒い水面に反射させ、地下の密閉された空間にも空気の流れはあるのか、ゆらゆらと小さく波打ちながら濁った水を湛えている。

かなり広大な湖だ。

対岸は見えず、光を反射してキラキラと輝く水平線が見えるのみ。湖に添って対岸まで歩いたとしたら、一日や二日では辿り着くこ

とはできないだろうと思われた。

かと言って、飛べない二人を担いで湖を飛び越えるのもかなり難しい。

まず間違いなく、対岸に着くまでに疲労して飛べなくなるだろう。

「なんだよ、ルシエル！」

これじゃ向こうに行けねえじゃんかよ！」

歩き通しだった疲労感も手伝って、苛立ったように時雨が声を荒げる。

乾燥した空気の中、水も飲めなかったため、その声は少し掠れていた。

近くに誰かが住んでいる気配はないし、都合良くボートがある訳でもない。

困ったように立ち尽くしていると、ゆらりと水面が揺れた。

濁っていてよく判らないが、水面下に何かいるようだ。

それも、かなりの大きさの。

四人は一斉に振り向いて湖を凝視した。

すると、見計らったかのように水面下にいた物体が水上に現れた。

ざざざしゃばざばあああつ！

などと盛大な水音と水飛沫を辺りにばらまき、一頭のトカゲにも似た水竜が鎌首もたげてこちらを見ている。

その大きさは、首だけで大人二人分くらいの高さはある。

突然の来客に時雨たちが浮き足立つ中、ただ一人ルシエルが水竜を見つめて声を上げた。

「……サチエ！」

『誰だサチエって!』

三人の声が見事にハモった。

「こっちで仲良くなったんですよ。

僕のことを覚えてて会いにきてくれたんですね」

ルシエルはそう言うと思した様子もなく水竜に近付き、「よしよし、良い子ですね」などと言いながら、身の丈程もある水竜の頭を撫でている。

そんなルシエルの姿を少し離れた場所から見つめる三人。

ただ一人、時雨だけが羨ましそうに指をくわえている。

ルシエルが振り向いて三人を呼んだ。

「そんなとこにいないでこっち来てくださいよ。

サチエが背中貸してくれるそうですよ。この湖を渡れそうです」

その言葉に三人は顔を見合わせ、仕方なしに水竜の方へと近寄る。時雨だけは嬉しそうにわくわくしていたが。

改めて近くで見ると、かなりでかい。

ヒトは自分より大きな生物に対し、無意識に恐怖を感じるものだ。触りたそうにしていた時雨も、思わず緊張して汗を浮かべる。

水竜の歯はナイフのように鋭く、それを得てしてサチエが肉食であることを物語っている。

噛み付かれたらたまったものではない。

その末路は容易に想像できる。

三人が渋っていると、ルシエルが時雨の手を引いて無理矢理に近寄らせた。

大丈夫だと言っているものの、ルシエルの『大丈夫』はあまり信

用できない。

時雨は緊張の面持ちでサチエを見上げた。

目は、意外と可愛かった。

「サチエー！ 乗せてくれんのか、ありがとなー。

俺、一度でいいから恐竜に乗ってみたかったんだよ」

それだけで恐怖心はどこかに吹き飛んでしまったらしい。

時雨はサチエの頭に抱きつき、笑いながら頬擦りしていた。

時雨の様子を呆然と眺めていた二人だが、ようやく危険ではないと判断したのか、諦めたような表情でサチエの背中に飛び乗った。

ルシエルが時雨を抱えて背中に乗ると、サチエはゆっくりと方向転換して対岸に向かって泳ぎだした。

結構速度もあり、この分なら数時間もしないで対岸に着くだろう。ゆらゆらと揺れる水面は黒く汚れている。

しかし水面が黒い分、反射する太陽の光が引き立ち、キラキラと輝いていた。

湖の中央付近にいくと、水平線の上にぽつんと佇む無人島に漂流したような錯覚を覚える。

サチエの背中に寝転がって空を見上げれば、赤茶けた土で覆われたドーム状の天井に白々と輝く光。

ゆったりと時が流れてゆく、そんな中で——ルシエルが酔った。

「うううええええ……」

「おまえなあ……そんなに弱いなら乗らないで飛んでけよ」

サチエの背中でごったりしているルシエルを、呆れたように見下ろし時雨が呟く。

ルシエルは青くなった顔を上げて時雨を睨んだ。
もつとも、そんな状態で睨まれても、迫力などまったくないが。

「無理ですよ……こんな広い湖、飛んでったら確実に力尽きて落ち……うをええええ……」

「あーあー、解ったから黙ってろ」

弱々しく反論するルシエルを軽くあしらい、時雨はサチエの背中に寝転がる。

視界の端では、呆れたような顔をしたサディンがルシエルの背中をさすっているのが見えた。

ミカエルは、黙って前を見ている。

あと半分くらいとはいえ、対岸はまだまだ先だ。

横になっていると、眠気に襲われ欠伸が口について出た。

自分でも気付かないうちに疲れが溜っていたのかもしれない。

「疲れたか？」

不意にミカエルに声を掛けられた。

時雨がそちらを見ると、いつの間にかミカエルが近付いてきていて、時雨を見下ろしている。

「ん、ああ、いや、別にそんなんじゃないやねえよ。眠いだけ」

眠そうに目をこすりつつ時雨は答える。

ミカエルは時雨の隣に座った。

「無理はするな。きみは今、魂を守る肉体を失っている。」

魂が剥き出しの状態は疲労が蓄積しやすい。今のうちに休んでおけ」

ミカエルなりの気遣いだろうか。

言うと同時に優しく頭を撫でられた。

子供扱いされているような苛立ちと、人の手の温もりを感じる安心感と。

普段の時雨なら、うざい！ と手を払い退けただろう。

だが少なくとも百年以上は生きている——この表現で合っているのかは解らないが——彼からして見れば、自分はまだ子供であろう事実と、疲れたところに感じる優しい掌の感触に、特に何も言わずにゆっくりと目を閉じた。

実際、ひどく疲れていたのだろう。

目を閉じてから数分とかからずに、時雨は深い眠りに落ちていった。

深い眠りに入る直前に、夢を見た。

小さな少年が、笑顔を浮かべて立っていた。ただ、それだけの夢。しかし時雨は気付いた。

この夢の中で自分に微笑みかけている少年が、リリースなのではないかと。

名前を尋ねる前に、夢は終わってしまった。

深い深い眠りに落ち、夢は暗い闇の中へと消えていった。

しかしその少年の顔は、時雨の脳裏にしっかりと焼き付けられたのだった。

「時雨、着いたぞ」

ミカエルのよく通る声に起こされ、時雨は目を開いた。

何時間くらい寝ていただろう。

疲労はすっかり抜けたものの、まだ少し寝惚けた目を擦りつつ身を起こす。

サチエは岸边に身を乗り出し、サディンが酔ってでろでろになったルシエルを背負って降りていくところだった。

「立てるか？」

そう言っただけで差し出されたミカエルの手には掴まり立ち上がる。

時雨はまじまじとミカエルの顔を見つめた。

その視線に気付いたのか、ミカエルが訝しげな表情をしたので、時雨は慌てて手を放しぶんぶん首を振る。

「あ、いや違うんだって。

ミカエルって最初冷たい印象だったから、意外と優しいところあんじょんとか思ってたさ」

何が違うのかは知らないが、自分に不信感を持たれていたわけではないことを知り、ミカエルは柄にもなく安堵の溜め息を吐いた。

やはり、リリースの生まれ変わりということを意識してしまうのだろうか。

時雨の言動が気になって仕方ない。

こんなにも心乱れている自分は久しぶりで、ミカエルは小さく苦笑を漏らした。

それに気付き時雨が慌てる。

「あつ、俺、何か変なこと言ったか？」

「いいや。行こう時雨。ルシファールたちが待っている」

そんな時雨の言葉に、ミカエルは口元に笑みを浮かべて首を振った。

不思議そうに首を傾げる時雨の手を引き、背中の大きな白い羽をはばたかせる。

ふわりと、サチエの背から地面に降り立った。

時雨が振り返りサチエに手を振ると、サチエは一声鳴いて別れを告げ、再び濁った湖へと潜っていった。

先程まで天井の頂上付近にあった日はすっかり傾き、辺りは夕焼け色に染められていた。

つまり、それだけ広い湖だったということか。

湖を渡るだけでこんなに時間がかかるとは思ってもみなかった。

その間ずっと酔いと戦っていたルシエルは、もうぼろぼろだ。

サディンの肩を借りてようやく立っている状態である。

案内役の蒼白な顔を見て、三人は嫌が応にも先行きの不安を駆り立てられた。

「……で、これからどっちに向かえばいいんだ？」

ここで黙っていても始まらない。

仕方なく、ミカエルはぐったりしているルシエルに尋ねた。

こんな状態のルシエルに酷とも思うが、道を知っているのがルシエルだけなのだから仕方ない。

ルシエルはゆっくりと重たい手を持ち上げ、枯れ木が重なるように立っている不気味な森を指差した。

ぐねぐねと曲がった枝が幾重にも重なり、森の中はまだ夕方だと言うのに、すでに真っ暗だ。

ここを通らねばならないのか……

皆の心は一つだ。行きたくない。

だが、時には嫌でもやらなければならないことがある。

これがまさにその時と、半ば諦め混じりに覚悟を決めた。

先頭にミカエルが立ち、後ろに時雨。

その後ろにルシエルを背負ったサデインが続いた。

道の指示はルシエルがする。

どれ程歩いただろう。

すっかり日も落ち、薄暗い森の中はさらに暗い闇に閉ざされた。

すぐ前を歩いているはずのミカエルの背中さえ見えなくなってきた、時雨は不安そうに目をこする。

がさがさと草を踏み歩く音だけが頼りだ。

辺りには、地獄に住む魔物がいるのだろうか。

こちらを観察してくるような視線が、じつとりと絡み付いてくる気がした。

この道で合っているのだろうか。

サデインたちは後ろにいるだろうか。

ミカエルの後ろについて行けているだろうか。

不安に駆られ、前にいるはずのミカエルに手を伸ばす。

手は、空を切った。

慌てて後ろを振り向き手を伸ばす。

だが、すぐ後ろを歩いているはずの二人には届かなかった。

はぐれた！

どこで道を間違えたのだろうか。

皆はどこにいたのだろうか。

自分は今どこにいるのだろうか。

とっさに思考を巡らせ、時雨は辺りを見回した。

「……ミカエル？」

名を呼んでも返事はない。

「サデイン？ ルシエル!？」

叫んでみても返事はない。

どうやら皆とは、かなり離れた場所にいるようだ。

皆を捜すべきか、ここで皆が来てくれるのを待つべきか。

下手に動き回るよりは待っていた方が良さだろうが、先程から感じる魔物の気配が、それを許してくれそうにない。

奴らは時雨が一人になるのを待っていたのだろう。

気配の数が増え、辺りは異様な雰囲気包まれた。

走れ！

時雨は誰に言われるでもなく、本能が告げるままに走り出した。

ここにいたら危険だ。

立ち止まったらだめだ。

こういうときの勘には自信がある。

視界のない暗い森の中、木々にぶつからないように道を選んで走る。

しかし、やはり途中で何度も木に引っ掛かったり、足を滑らせた
りしてしまう。

その度に魔物に追いつかれそうな恐怖を感じながら、時雨は走
った。

そのときだ。

前方の茂みから何かが飛び出した。

時雨は思わず足を止める。

それには見覚えがあつた。

「お前は……」

肩で息をしながら時雨が呟いたときだ。

背後に迫ってきていた魔物が飛び出してきた。

狼のような姿をした魔物は、時雨に向かってその鋭い爪を振り下ろした。

約十分程前のことだ。

「時雨がない！」

最初にそのことに気付いたのはサディンだった。

辺りを警戒するあまり、目の前を歩く時雨を見失ったのは、暗闇で見えなかったためとは言え己の過失だ。

サディンのその声に、前を歩いていたミカエルが振り返る。

ルシエルも幾分顔色が良くなった顔を上げた。

「申し訳ありません……俺がもっと注意していれば……」

悔しそうに唇を噛むサディンの肩を、ミカエルは気にするなと軽く叩く。

「この暗さだ。見失っても仕方ない。

それより、どうやって時雨を捜す？」

「僕が行きましょうか？　こここの道を知ってるのは僕だけですし」

サデインの背中から手を挙げるルシエルだが、思った以上に船酔い（サチエ酔い？）はひどく、顔色はまだ元通りではない。さすがにそんな状態のルシエルを行かせる訳にはいかない。皆で戻って捜すにしても、手分けして捜すことができなくては効率が悪い。

「あれに行かせよう。きっとそれが一番早い」

静かに言ったのはサデインだった。

サデインの持つ能力なら、時雨を見付けることは可能だろう。

「頼む」

ミカエルは短く言って頷いた。

サデインはルシエルを下ろし、そっと目を閉じる。

だが、この場でサデイン自身がセンサーを使うことはしなかった。サデインの身体が淡く光ったかと思うと、小さな光の球がサデインの身体から分離した。

それはすぐに人型をとる。

感情のない顔、作り物じみた髪に少し大きめの燕尾服。

その身体は木で作られており、身長は子供くらいの人形。

サデインの分身であり、普段は彼の魂の中にいるのだ。

探査能力を持ち、自力で動くこともできる。

サデインが持つ探査能力は、この人形の力なのである。

この人形が魂の中にいる間、サデインは人形の持つ力を自分のものとして扱えるのだ。

この人形はサデインの祖父が生前作ったものだ。

カラクリで動くその人形に、兄という意味のカストルという名を

付け、サディンは幼い頃からずっと一緒だった。

ところがサディンがカエルスに来る前に、カストルは壊れてしまったのだ。

しかしサディンの祖父が、まさしく魂を込めて作ったカストルは、壊れて魂だけになってもなお、カエルスでサディンが来るのを待っていた。

そして二人は、カエルスで再び一緒になったのだ。

カストルが他の魂たちと違うのは、サディンの魂と同調し、サディンと魂を共有しているところである。

そのため、天使として能力を授かっているはずのこの人形の背にも、サディン同様羽はない。

サディンが翼を失ったと同時に、カストルの翼も消え去ったのだ。

「時雨を捜してきてくれ」

サディンの命令に頷き、カストルは森の奥へと走り出す。

この人形はサディンの言葉に絶対の服従を誓っている。

彼に任せておけば心配はない。

「僕たちは先に進みましょう。この森を抜けると、すぐですから」

ルシエルの言葉を合図に、三人は歩き出した。

森の出口へと向かって。

狼のような魔物の爪が時雨を襲う。

避けることすらできずに、立ち尽くす時雨と狼の間に割って入ったのは、サディンの人形だった。

小さな身体からは想像もできないような力で、狼の爪を受け止め

押し返す。

時雨は呆氣にとられてその光景を眺めていた。

目の前で、昼間に見た人形が魔物と戦っている。

時雨はその人形がサデインのものだとは知らないが、自分を守るようにして現れた人形に、どこか安心感を覚えた。

起き上がった魔物は、怒りの矛先を人形に向けて爪を振るう。

人形は相手の力を利用して、正面から受け止めるのではなく、横に軸をずらすことで易々と身を躲す。

二頭相手にも拘らず、その動きが乱れることはない。

動く度に燕尾服の裾が翻る。

無駄のないその動きは、さながら演舞でも見ているかのような錯覚に陥る。

やがて疲れの見え始めた魔物の動きは鈍くなり、その一瞬の隙を
ついで人形が渾身の力を込めた突きを繰り出した。

魔物はもう一匹を巻き込んで吹っ飛び、木の幹に叩き付けられて
止まる。

そのまま二度と動かなかった。

少し乱れた服を直して、人形は時雨の許に小走りで行ってきた。

こうしてみると愛嬌のある人形なのだが、先程の戦いを目にした
後では、そのギャップが怖い。

どうしたら良いのかと思案する時雨をじっと見上げ、人形は手を
差し出した。

「……え？」

時雨は途惑いがちにその手を取る。

すると人形は時雨の手を引いて歩き出した。

まるでついて来いと言っても言うように。

時雨は不安そうな顔をしつつも、人形に従い歩きだす。

人形だからか、歩いている途中会話はない。

なんとなく気まずい沈黙の中、手をつないで歩く時雨と人形。

人形の身長が低いいため、遠目には幼児誘拐にも見えたりするのだが、幸い目撃者もないので、誰も勘違いすることはないだろう。

二人はただ黙々と森の出口へと向かって足を進めた。

ルシエルたちは一足先に森を抜けていた。
辺りはすっかり暗くなり、天井には薄赤く光る月が昇り始めていた。

時雨たちが心配だが、あまり時間を掛ける訳にもいかない。

三人はひとまず、ルシエルの知り合いが住むという村に向かった。

先刻のルシエルの言葉通り、森を抜けてすぐに建物らしき陰が見えてきた。

小さな村は、しんと静まり返っている。

誰も住んでいない訳ではない。

その証拠に村人の気配は家の中にあるし、稀に窓の隙間から三人を覗く人影が見えた。

見知らぬ人物を警戒してのことか、単に夜だから家にいるのか。

村の入り口付近で立ち止まり、周囲の様子を窺っていた三人だが、意を決して村に足を踏み入れた。

ざくざくと雑草を踏む音が辺りに響く。

地獄の村は、何とも異様な雰囲気村だった。

ごく普通の民家風の家があったかと思えば、その隣に建っているのは泥を固めたような丸い家だったり、巨大な木をくりぬいて作ったような家もあった。

建築様式が、時代も地方もバラバラだ。

ルシエルはそのうち、一際大きな大木に半分同化しているような形の家の前で足を止めた。

レンガ造りの中世風の家の後ろ半部分が、木の根元にめり込んでいる。

ルシエルたちがその家の玄関先で立ち止まっていると、内側から玄関の扉が開かれた。

ギィ、と扉が引かれるかすかな音がして、続いて扉の向こうから一人の女性が現れた。

金色の長い髪に黒い服の、目付きのキツイ美貌の女性だ。

その女性は三人を一瞥すると、ルシエルに顔を向け顔をしかめる。

「ルシエル……ここには来るなど言っただよ。何しに来たんだい？」

それも、天使サマなんか連れてさあ」

女性の言葉は冷たい。

アビスの住人は、やはり天使をあまり良く思っていないようだ。

「そんなこと言わないでくださいよ。僕とメフィの仲じゃないですか」

まったく動じずに笑みさえ浮かべて言うルシエルに、ミカエルとサディンは内心ハラハラしていた。

ルシエルがメフィと呼んだ女性……その姿を目にただけで判る。強い。

大天使であるミカエルと同等か、或いはそれ以上の力を持っているのではないだろうか。

知らず流れる冷や汗を拭い、ミカエルは成り行きを見守った。

「どんな仲だい。アタシはあんたに言っただよ、二度と来るな

ってね」

「貴女しか頼れる人がいないんですよ。サタンに会えるように、取り計らってくださいませんか？」

ルシエルの必死の交渉中に出た、サタンという単語にメフィの目が更にきつくなった。

サタンというのは、このアビスの最高責任者である。

カエルスでいうところのゼウスと、同等の立場だ。

そのサタンに、しかも敵対しているはずの天使が会わせろと言うのだから、それは無茶な話というものである。

メフィの顔が陰しくなるのも頷ける。

「あんた……今度は何を企んでるんだい？」

呆れたような声で肩をすくめ言うメフィに、ルシエルはただ笑みを返すだけだった。

メフィは溜め息を吐いて髪を掻き上げる。

メフィは三人を順に見て言った。

「あと一人いるんだろ？ そいつが来るまでなら、うちにおいてやるよ」

メフィのその言葉に、三人は驚愕の表情を浮かべる。

時雨がいることなど、ただの一言も言っていないのに、なぜ知っているのか？

三人の困惑を見てとったか、メフィはくすりと笑い扉を開ける。

「あの人はちゃんと見てたのさ。あんたらが来たのも、ここに向かっているのも。」

さあ、入りな。それとも、そこで突っ立ってる方がいいのかい？」

あの人というのは、恐らくサタンのことだろう。

そして、四人がここに向かっていていることを、何らかの方法で先にメフィに伝えた。

さすがは地獄王といったところか。

ルシエルたちは互いの顔を見て頷くと、メフィに促されるままに家の中に入っていった。

家の中は到ってシンプルだった。

必要最小限の家具類が部屋の隅に置いてあるだけで、飾りなどは一切ない。

メフィに言わせれば、飾りなどあっても鬱陶しいだけだそうだ。

一番広い部屋に通されると、部屋の中央にある円卓を囲むように椅子に座った。

しばらくの間は気まずい沈黙が辺りを支配していた。

何を話すでもなく、各々が椅子に腰かけたまま動こうともしない。ルシエルだけはお茶を煎れようかとか、つまみでも作ろうかとか、色々と行動を起こそうとしているのだが、その度にメフィが牽制するのだ。

勝手に家の中をうろろされたくないのだろう。

かと言って、メフィ自身はお茶の一杯も出すつもりはないらしい。そのままでさらに数分が経過したときだ。

サデインがふと顔を上げた。

外を見ようと首を巡らせるが、生憎この部屋に窓はない。

仕方なく、サデインはルシエルに言う。

「時雨が来た」

短く呟かれたその一言に、ルシエルは立ち上がった。

「では、出迎えに行ってきますね」

さすがにそれにはメフィも口を挟むつもりはないらしく、ルシエルは一人家の入り口へと歩いていった。

ルシエルが出ていってから数分もしないうちに、時雨と人形がルシエルに連れられて部屋に戻ってきた。

時雨は物珍しそうに辺りを見回していたが、サディンとミカエルの姿に気付き笑顔で駆け寄った。

「あー、良かったあー！ お前らも無事だったんだな！」

いつもと変わらない時雨の様子に、サディンとミカエルの顔にも笑みが戻る。

「それはこちらの台詞だ」

「良かった。ちゃんとカストルに会えたんだな」

呆れたようなミカエルと、安心した様子のサディン。

二人の反応はばらばらだったが、時雨を心配していた様子は伝わってくる。

「カストル？」

時雨は、サディンの台詞の中に出てきたカストルという単語に首を傾げた。

サディンは人形を指差して言う。

「あの人形のことだ。名前はカストル」

簡潔に説明すると人形を手招きする。

人形は素直にサデインの側まで近付いてきて、一瞬その身体が光ったかと思うと、人形の姿はサデインの身体に溶けこむように消えていた。

「へえー、すげえなあ……ルシエルやミカエルも出せるのか？」

目を輝かせて問う時雨に、ミカエルは首を振る。

「いや、サダルメリクだけだ」

何やら和気藹々と話をする三人を見て、メフィは口の端を持ち上げる。

「なんだい、さっきまでと全然違うじゃないか、お二人さん。そんなにその坊やが心配だったのかい？」

「……………」

メフィに言われ、ミカエルとサデインは互いに顔を見合わせた。心配だったのはあるが、カストルがついていたのだから、ある程度の安心感はあった。

何故か時雨の顔を見た瞬間に、緊張がほぐれて自然と笑みが浮かんだのだ。

時雨には、人の心を和ませる何かがあるのかもしれない。

メフィはそっと時雨を盗み見た。

見た限りでは、平和ボケしている普通の子供にしか見えない。

だが、その口元は知らず知らずのうちに綻んでいた。

それを見たルシエルは、指先でメフィの肩を軽く叩く。

それでようやく自分が笑っていることに気付き、メフィは頭を振って表情を引き締めた。

「さ、さあ、坊やも来たんだ。もうここで待ってる用はないだろう？
とっととサタンのところに行っちゃいな」

メフィに言われてサディンとミカエルはすっと立ち上がった。
事情を知らない時雨だけが、ぽかんとした顔で四人を見回している。

「わかってますよ。貴女にはもう迷惑は掛けません」

ルシエルがそう言って、部屋を出て行こうとしたときだ。

ぎゅきゅるるるい

奇妙な音が部屋の中に鳴り響いた。
皆、一斉に音の出所に目を向ける。
即ち、時雨の腹に。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

ルシエル、メフィ、サディン、ミカエル、四人の視線が時雨に集まる中、時雨は一人恥ずかしそうに顔を真っ赤にして怒鳴った。

「なっ……何だよ俺だよ悪いやつ！ 腹が減っちゃったもんはしよーがねーだろうが！ こちとら今日は寝坊しちゃったから朝から何も食ってねえんだよ！ だいたい、死んでるのに腹が減るっておかしくねえ！？ 幽霊のくせに腹が減るなんてどーゆー造りしてんだよこっちが聞きたいよ何とか言えよコラア！」

ワンブレスでここまで言えるのは称賛に値する。

が、ほとんど逆ギレである。

ぜえぜえと肩で息をする時雨を見て、四人は一斉に吹き出した。

「はっ、あっはははははっ！

こりゃいいや！ あんた最高だよ！」

「いやあ、そんなこと言われましても、僕にも分かりませんからねえ……でも、お腹が空くのは元気な証拠ですよ」

腹を抱えて目に涙を溜めながら、テーブルをばごんばごん叩いて大笑いするメフィと、笑いを隠そうともせず、にやにやした顔で時雨を励ますルシエル。

サディンとミカエルは後ろを向いてぷるぷると震えている。

笑いを堪えているのだろう。

そんな四人の反応に、時雨は益々顔を赤くした。

「うっ、うっ、うっ、うるせー！ 腹減ったんだよ俺は！ 何か食わせろこんチクショー！」

もはやヤケになって叫ぶ時雨に、メフィは笑いながら言う。

「ほんと良いねえ、あんた、気に入ったよ！ 飯くらい食わせてやるから、そこでおとなしく待ってな」

時雨の肩をぽんと叩き、目に浮かんだ涙を拭って隣の部屋へと移動した。

しかし、何故かそれを見た途端ルシエルの顔色が変わる。
ルシエルは慌てて時雨の肩を掴んで言った。

「時雨！ あなた、何てことを！」

ルシエルのこんなに真剣な顔を見るのは初めてだった。
額に冷や汗を浮かべ、時雨の肩に置いた手がかたかたと震える。
その緊迫した様子に、時雨もぴたりと騒ぐのを止めた。
サデインとミカエルも、思わず口をつぐみルシエルを見遣る。
ルシエルは震える声で囁いた。

「……彼女は、この界限ではとても有名なんです。

その通り名は『デス・テイスト』（死の味）

彼女の料理を食べた者は、あまりの不味さに胃がただれて二度と物が食べられなくなるという……」

ルシエルはそこで言葉を切った。
しばしの沈黙。

「……俺が手伝ってくる……」

そう言ってメフィの後を追ったのはサデインだった。
その後ろ姿を見送って、ルシエルとミカエルはほっと息を吐く。
どうやら、料理で即死は免れることができそうだ。

「……サデインで、料理できんの？」

何も知らない時雨は疑わしげにルシエルを見る。

「何を言ってるんですか。サデインの手料理は最高ですよ」

ルシエルの演技掛った口調と仕草に、時雨は胡散臭そうに半眼になった。

だが、先程のルシエルの慌て様から考えると、サデインの料理の腕は確かなものだろう。

「僕は毎日味見してましたからね。保証しますよ」

それは、たかりに行っていたの間違いでは？

密かに思うミカエルだったが、その事実の時雨は気付いていないようだった。

三人はそれぞれ椅子に座り、料理ができるのを待った。

やがて良い香りが部屋に漂い始める。

どうやらサデインの助っ人のお陰で、壊滅的料理は食べずに済みそうだ。

数分後には両手に料理の乗った皿を持って、サデインとメフィが戻ってきた。

何かの具材がたっぷり入ったシチューに、何かの肉の香草蒸し、何かの葉をふんわりと盛り付けたサラダには得体の知れないドレッシングがかかっている。

パンはパンに見えるが……

そう。よくよく考えればここは地獄。

一般的に使われている食材が、時雨が今までに食べてきたものと同じとは限らない。

それはカエルスにも言えることなのだが、何と言うか、おどろおどろしい雰囲気満載のアビスでは、やはりどうしても気になるのだ。

しかも、自分は今、それを食べようとしている。

見た目は普通、いや、一流レストランにも負けない出来栄だし、漂う香りも決して悪くない。むしろ食欲をそそる。

だが、肝心の中身が解らない。

料理を並べられ、その手にナイフとフォークを握った瞬間に、時雨はこの可能性に気付いてしまった。

まさか、死人の肉とか使っているんじゃないかと。

サデインも一緒に作っていたのだから、毒物が混入していることはないだろう。

が、得体の知れない料理を前に、にこにこ笑いながら皆で食事など、余程肝の座った人間でないといけない。

時雨は恐る恐る訊いてみた。

「あの……これって、何の肉使ってるの……？」

びくびくしながら尋ねる時雨を見て、メフィは思わず吹き出した。

「あっはっは！ 安心しなよ、食えないもんは使っていないから。

男だろう？ 細かいことぐじぐじ気にしてんじゃないよ！」

そう言いながら近付いてきて、時雨の背中に一発平手打ちをぶち込んだ。

息が詰まりかけるが、そう言われては食べない訳にもいかない。そもそも、何か食わせると言ったのは時雨本人だ。

時雨は思いきって香草蒸しを小さく切り、一口食べてみた。

舌の上に広がるまろやかな味と香り。

嚼む程に深みを増す味わいは、今までに食べたどんな料理よりも上品で……

「う、うまいっ!」

時雨は思わず叫んでいた。

「だろ? いっぱい食って力つけな」

時雨の一言に機嫌を良くしたメフィは、にこやかに笑みを浮かべて言う。

心なしか自慢そうにしているのは、見間違いではないだろう。

「あ、やっぱり美味しいんですね。

メフィも作ってたから心配しましたが、さすがサディンですね」

時雨を毒見に使っていたような台詞をサラリと吐き、さらにメフィの神経を逆撫でするような台詞も付け足して、ルシエルがナイフとフォークを手取る。

案の定、一瞬にして怒りの表情になったメフィから強烈な右ストレートをくらい、ルシエルは派手に吹っ飛んだ。

その様子を哀れみの目で見つめながらも、ミカエルは黙々と料理を口に運んでいる。

サディンはオロオロしながらルシエルとメフィを交互に見つめていたが、途中で諦めて料理を食べ始めた。

三人が談笑するその背後で、ルシエルはメフィにぼこぼこにブン殴られている。

楽しい時間が過ぎるのは、あつと言う間だ。

結局メフィに料理を食べさせてもらえなかったルシエルは、サデインがこっそり作っておいてくれたホットドッグを懷に忍ばせることになった。

もうしばらくはサデインに頭が上がらないだろう。

食事の後、とても清々しい笑みを浮かべるメフィに、苦笑いを浮かべながら別れの挨拶を告げて三人は村を後にした。

至福の笑みを浮かべてホットドッグを頬張りながら歩くルシエルを横目に、ミカエルが尋ねる。

「これからどちらに向かえば良いのだ？」

何しろメフィの家ではルシエルは殴られていただけで、今後の進路も対策もまったく話し合うことができなかった。

ルシエルは最後の一口を口に放り込み、指についたケチャップを舐めつつモゴモゴと言う。

「ふま、もいあえむははんのみおえ……」

「飲み込んでから喋れ」

ミカエルの正当なツツコミにルシエルはもぐもぐ口を動かし、満足そうな顔で口の中のものを嚥下する。

懷から取り出したハンカチで舐めた指を拭き、ミカエルに顔を向け説明を始めた。

「やはりサタンの城に行かなくてはならないでしょうね。」

何にしても、彼の協力なくしては、あの神に対抗できません」

神に対抗……

改めて言葉にすると、その重みを感じる。

神話でもおとぎ話でも、神に戦いを挑んだ者の結末は悲惨だ。

それでもなお、神と戦おうとしている。

そのために悪魔の力を借りようと言うのだから、自分たちは既に天使などではなく魔と同列だ。

それでも、やらねばならないのだろう。

そのためには、魔王の住まう城へ行かなければ。

城までの道のりは遠い。

結局今日中には辿り着けず、村から離れた荒野で野宿することになった。

村に泊めてもらいたかったのだが、村人たちは天使を毛嫌していたので諦めたのである。

寝込みを襲われるよりは、野宿の方がマシだ。

辺りの枯れ木を集めて火をおこす。

小さな炎だがそれでも十分暖かく、時雨はすぐにうとうとし始めた。

「時雨、眠ってて構いませんよ？ 見張りは僕たちがやりますから」

気遣うように言ってくるルシエルを、時雨は眠そうな目で見上げた。

「俺だけ寝るのも悪いじゃん」

目をこすりながら口を尖らせる。

その様は夜更かししている子供とそっくりだ。

「ならば交代で番をしよう。時間になったら起こすから、それまで休んでくれ」

ミカエルが寄ってきて時雨の肩を叩く。

時雨もそれならばと納得して横になった。

どうやら、ミカエルは時雨の扱いを心得ているようだ。

「……上手いですね。時雨を納得させるの」

時雨の寝息が聞こえてから、ルシエルが感心したようにミカエルを見る。

ミカエルは小さく笑って頷いた。

「お前は子供の扱い方を知らないからな」

時雨が聞いたら怒りそうな台詞だが、ミカエルはそんなことは気にしていないようだ。

ルシエルは肩をすくめミカエルの向かい側に座る。

丁度そのとき、周囲の偵察に行っていたサディンが帰ってきた。

「辺りに危険なものは無さそうです。

でも見張りが必要でしょうね」

簡潔にミカエルに報告してから、ミカエルとルシエルの間に座る。

焚き火の炎がゆらりと揺れた。

サディンの正面で眠る時雨の顔が、炎を透かして見える。

「じゃあ僕が見張りを」

「先に寝てろ」

口を開いたルシエルを牽制するかのように、ぴしゃりと言い放つサディン。

ゼウスに撃たれ、サチエに酔って、メフィにぼこぼこにされたルシエルの体調を気遣ったのことだろうが、サディンはそれを正直に言おうとはしない。

心配だからと正直に言うと、ルシエルのことだ、調子に乗って舞い上がるか、遠慮して起きているかのどちらかだ。

今のルシエルはサディンに負い目を感じている。

サディンの言うことには逆らわないだろう。

まして、ああもきっぱり言われて、それに反論したら力づくで眠らされるかもしれない。

ルシエルは渋々横になった。

固い地面の上では中々眠れないが、目を閉じれば次第にうとうとしてくる。

それを見てミカエルが口を開いた。

「お前は眠らなくて良いのか？」

それは暗に自分が見張りをやるから、サディンは寝ていろと言っているようなものだが、それを理解した上でサディンは首を横に振った。

「慣れていますから……ミカエル様こそ、お休みください」

慣れているというのは見張りのことだろう。

彼は百年近く門番として生きてきたのだから。

気遣うように自分を見つめるミカエルに気付き、サディンは笑みを浮かべる。

「……門の守りは、辛くはなかったか？」

唐突にミカエルに尋ねられた。

サデインはしばらく黙っていたが、笑みだけは絶やさずに口を開く。

「辛くはないと言えば、嘘になるでしょうね……」

何度逃げ出そうとしたか……それでも、俺は門を守り続けられたことを誇りに思います」

「そうか……」

ミカエルは静かに目を伏せる。

彼は、処刑された当時のサデインを知っている。

背中 of 大きな傷には大雑把な手当てしかされず、暗く寒い一室に入れられ監視されていた。

傷は痛むだろう。それでも満足な治療はされず、ミカエルがその部屋に訪れたとき、サデインはまるで廃人のような目をしていた。

あんな目をしたサデインを見たのは初めてだった。

それまでのサデインは外見年齢と相違なく、よく笑いよく表情の動く少年だったのに。

彼の暗い瞳の闇を救ったのは、何だったのだろうか……

「ミカエル様？」

ミカエルの思考を止めたのはサデインの声だった。

顔を上げれば、こちらを見ていたサデインと目が合う。

「いや、何でもない。では先に休ませてもらうとしよう」

その瞳から、完全に闇が消えたわけではないが、今はもう真っ直ぐに前を見つめることができる。

ミカエルは安堵の笑みを浮かべて、近くに生えていた木の幹に背を預けた。

目を閉じるミカエルを見ながら、サディンは小さく首を傾げる。

小さくなった焚き火に、拾ってきた木の枝を投げ入れ、そっと目を閉じる。

今までに何度も感じた独特の感覚。

二つの魂の結び付きを残したまま、一つの魂を分離させる。

魂は外に出されると徐々に形をつくり、まずは手、次に腕、肩、頭、胸。

サディンの背中から生まれるもう一人のサディン、小柄な人形。完全に姿を現したカストルは、サディンと背中合わせに座り背後を守る。

二人だからできた。魔物の侵略を許すことなく、門を守り続けることが。

この日二人は、互いの背を守り合って一晩中起きていた。

朝になると、何故起こさなかったと時雨とルシエルから文句を言われたが、ミカエルがなんとか宥めて、四人は再び歩き出した。

魔王の城はまだ遠い。

荒れた大地を踏みしめ歩くこと数時間。

途中何度か魔物に襲われたが、ことごとくサディンとルシエルが追い払った。

しばらく歩いていくと、遠目に巨大な山のようなシルエットが見えてきた。

人工の建造物と言うには余りにも歪で、人の手で同じものを造れと言われても、それは不可能だろう。

しかし自然にできたものではなく、明らかに人の手が加わった箇所が見受けられる。

土が塗り固められたような外壁に、頂上付近から飛び出した尖塔。数カ所に開けられた明かり取りの窓や鉄の扉は、人が造らなければ存在しないはずだ。

それらを見付けなければ、誰もが小さな山だと思って通り過ぎるだろう。

四人はその小さな山の前で足を停めた。

「これが魔王の城なのか？」

時雨の問いに頷くルシエル。

「ええ……変わってませんね。さて……」

懐かしそうにぽつりと呟くと、遠慮も何もせずに入り口を開いた。

「おい、ルシエル！？」

「お邪魔しますよー？」

慌てて引き止めようとする時雨にもお構い無しに、ずかずか中に足を踏み入れる。

仕方なくサディンとミカエルも後に続いた。

中是不気味な程に静まり返っていた。
人の気配もしない。

「……誰もいないじゃん」

「……本当にここで間違いないのか？」

「おかしいですね……以前来たときはもっと賑やかだったのに……」

口々に呟く四人だが、いくら待っても誰も出てくる様子はない。
しかしその時。

『ぎゃああああああっ！』

城の奥から誰かの叫び声が聞こえてきた。

四人は一瞬顔を見合わせ、一斉に声のした方へと走り出す。

ルシエルを先頭に、二つ程角を曲がると、厨房と思しき場所に男
が一人蹲っていた。

三角巾で紅く長い髪をまとめ、緑色のエプロンをしている。

手を押さえて蹲るその側に、包丁が落ちていた。

料理人が怪我でもしたのかと、時雨とサデインとミカエルは顔を見
合わせたが、ルシエルだけは違った。

蹲る男の側に駆け寄り、膝についてしゃがむ。
そして……

「あんたこんなとこで何やってんですか」

素早く言いながらその男の頭をびっしと叩いた。

「う、うるさい！ どこで何しようが俺様の勝手だ！」

頭を叩かれた衝撃に、男はようやく顔を上げる。

顔立ちは整っており、深紅の瞳はちよっぴり涙でうるんでいた。
だがそれよりも目を引くのが、とがった耳と頭に生えた一對の角。

「だからって、なんで貴方が料理なんか？ 地獄王のくせに何やってんですか」

『地獄王！？ そいつが！？』

時雨たちの声が見事に揃った。

「いかにも。俺様がサタン様だ」

尊び敬えとでも言うように立ち上がり、両手を腰に当ててふんぞり返るサタン。

だがエプロン姿に三角巾では、今一つ迫力に欠ける。

しかもエプロンのポケットには、可愛らしいヒヨコさんのアップリケまであったりする。

最早どこから何をつっこめば良いのか解らず、時雨たちはただただ呆然と立ち尽すのみだ。

そんな時雨たちを見かねた訳ではないだろうが、ルシエルはサタンに向き直りその肩を叩く。

「で？ なんで貴方が料理なんかしてたんですか？ 使用人の姿も見えないようですが？」

ルシエルの問いに、サタンは言いにくそうに目を逸らし頬を掻く。しかしルシエルは答えるまで離してくれそうにないので、仕方なく目線を戻した。

「聞いて驚くなよ……」

「驚きませんよ」

あっさり即答されたのが気に入らなかったのか、不満そうに口を尖らせサタンは言う。

「この城の悪魔どもが全員反乱しやがった」

.....

『ええええええええ！？』

サタンを除く四人の声が重なったのは、数瞬の間を置いてからだ
った。

「驚くなって言っただろうがよ」

「驚きますよそれは！ 反乱でどういうことですか！」

まだ機嫌が直ってないらしく、むくれたままでサタンが言う。

ルシエルは掴み掛からん勢いでサタンを問い詰めた。

他の三人は事態について行けず、ルシエルとサタンをただ呆然と
眺めている。

「反乱は反乱だ。言葉の意味が分からないなら辞書を引け辞書を」

そんなサタンの態度を見ると、反乱が起きても仕方ないと思
えてくる辺り、何だか虚しい。

ルシエルは疲れた溜め息を一つ吐き出し、改めてサタンに向き直
った。

「反乱の原因は訊きませんよ。で、その反乱した悪魔たちはどこへ？」

「さあな。アビスは深く広い。ひょっとしたら、俺様の目の届かないところに隠れてるのかもしれん」

肩にかかった赤い髪を指で跳ね上げ、サタンはひょいと肩をすくめた。

嘘を吐いている様子はない。

ルシエルはやれやれ、といった様子で首を振った。

「困りましたね。ただでさえ危険な場所なのに、どこに悪魔が潜んでいるか判らないとなると……」

「……長居はできん、か」

ルシエルの言葉をミカエルが続けた。

サタンの力を借りるつもりだったのだが、こんな事態に陥っているとは、ルシエルでさえも予想していなかった。

どこか他に、神から逃げられる場所はあるだろうか。

「ところで貴様ら、何故ここに来た？」

四人が悩んでいると、唐突にサタンが口を挟んだ。
ルシエルが顔を上げて今までの経緯を説明する。

「話せば長くなりますが、彼がゼウスに狙われ……」

「そんなことは知ってる」

だが、サタンは片手を挙げてルシエルの説明を遮った。

訝しむルシエルを見据え、順にミカエル、サディン、そして時雨に目を遣った。

「そのガキが、女神復活のためにゼウスに利用されそうになっている。それで、何故貴様らはここに来た？」

「それは……ゼウスの目が届かないここに、ひとまず身を潜めて……」

「それで？ その後はどうする。ずっとここに隠れてるつもりか？」

「それは……」

サタンの強い口調に圧されるように、ルシエルは口籠もる。

サタンの言うことはもっともで、いくら一時的に身を潜めようが、いつかはゼウスに見つかるだろう。

かと言って、時雨をゼウスに引き渡せば、この世界に住む人々は滅ぼされてしまうかもしれない。

運良く時雨を身体に戻すことができても、再びゼウスに狙われたら今度こそ逃げられない。

それはつまり、どうしてもゼウスとの対決が避けられないことを意味している。

神に戦いを挑むということがどういうことか。

勝ち目など全くないことは、時雨にでも解る。

だが、もう一つ。

もう一つ方法は残されていた。

だが、それにはどうしても犠牲が生じる。
なるべくなら、犠牲を出さずに済ませたい。
だが、サタンは敢えて彼らに問い掛けた。

「何故そいつの魂を消滅させないのだ？」

「……………え？」

時雨が小さな声を上げる。

「ゼウスが欲しがっているのは、このガキの魂だろう。ならば、この魂を跡形もなく消滅させればいい。違うか？」

それは三人の天使が決して考えないようにしていたことだ。

この世界を守るために、時雨を犠牲にすること。

強大な回復能力を持つ時雨の魂さえ無くなれば、女神を目覚めさせる手段はなくなる。

そうすれば、ゼウスは再び治癒能力を持つ魂が目覚めるまで、この世界の人間を滅ぼすことはしないだろう。

他の世界を攻め滅ぼすこともない。

だが、それは……

「そんなこと、できるはずがない」

ミカエルが呟いた。

いつもは無表情なその顔が、今は酷くしかめられている。
サタンはミカエルを正面から見据えて、軽く鼻で笑った。

「ハッ……何の犠牲も出さずに終わらせたいってのか？ 随分と傲慢な天使様だな」

サタンの言葉に口をつぐむミカエル。

自分が言っていることが、ただの理想論でしかないことは解っている。

だが、それでも願わずにはいられないのだ。

誰一人犠牲になることなく、時雨を帰してやりたいと。

「このガキ一人犠牲になればすむ話じゃねえか」

サタンの言葉は続く。

それに答えたのはサディンだった。

「時雨は……もう俺たちの友だ。仲間を殺すことなど、できない」

サディンの決意を込めた言葉さえ、サタンは笑って否定した。

「以前に一度は殺してるんだ。今更何を吐かす。貴様は自分の手が汚れることを恐れているだけだ」

時雨はリリスの生まれ変わり。

そのリリスは昔、ルシエルが殺した。

誰もがリリスの死を嘆いた。

誰もが悲しんだ。

もうあんな思いはしたくない。

させてはいけない。だから……

「どうした？ 貴様らができねえってんなら、俺様が手を貸してやつてもいいぞ？

こんなガキを消滅させるなんざ、容易いことだ」

サタンは彼らの言葉を待たず、そう言って時雨に手をかざす。その手を止めたのはルシエルだった。

「やめてください。時雨を傷つけることは許しません」

サタンの手を抑え、立ち塞がる。

背後に時雨を庇うように、サタンと時雨の間に割って入った。

「……それで？」

まるで面白がっているように、口許に笑みを浮かべてサタンが尋ねる。

ルシエルはしばらく黙っていたが、ようやく己の中で決心がついたのか、ゆっくりと口を開いた。

「貴方が言うように、今時雨を殺せば、ゼウスの計画は先送りになるでしょう。

ですが、それはその場しのぎにしかない。ゼウスの目的が潰えたわけではない……」

ルシエルは一度目を閉じて息を吸った。

ミカエルとサデインが、ルシエルの横に並ぶ。

ルシエルはすっと目を開いた。

「僕達は、ゼウスを停めてみせます。時雨も身体に帰します。

そのために、貴方の力が必要です。どうか、力をお貸しください
地獄王」

ルシエルはまっすぐにサタンを見つめた。

ミカエルとサデインも同様だ。

彼らの意思は決まった。

ゼウスと戦うこと。

ゼウスの野望を阻止すること。

サタンは真剣な表情で、三人の天使を順に見つめた。

どの眼もまっすぐで、並ならぬ決意を感じさせる。

不意に、サタンの口許に笑みが浮かんだ。

「……いいだろう。俺様の力を貸してやる。それをどう使うかは貴様たち次第だ」

その言葉を聞いた瞬間、三人の顔に安堵の表情が浮かんだ。

「ありがとうございますサタン……感謝します」

ルシエルの感謝の言葉に「けっ」と悪態を吐いて、サタンは三人に背を向けた。

「誰がただで貸すか。俺様は腹が減ってるんだ。礼の一つに美味しい飯くらい作ってくれるんだろうな？」

「もちろんですよ」

ルシエルたちは笑顔で頷き、早速調理にかかる。

その様子を見たサタンは、静かに厨房を後にした。

「待てよ」

今まで黙って成り行きを見ていた時雨が、サタンを追って厨房か

ら出てくる。

少し薄暗い通路で、サタンが足を止めた。

「何だ」

振り返らずに問うサタンに、時雨は言う。

「あんた、わざとあいつら焚き付けただろ」

「ほう……？」

時雨の言葉に興味が沸いたか、サタンがゆっくりと振り返った。

「あんた、始めから俺たちを助けてくれるつもりだったんだろ？」

「……何故そう思う？」

サタンは面白そうに時雨を観察した。

時雨はうーんと唸りながら片手で頬を掻く。

「何故って言われてもなあ……あんた、悪い奴には見えなかったし、勘ってやつかな」

そう言って時雨はにっと笑った。

サタンはその様子を見て可笑しそうに笑うと、くるりと踵を返して城の奥へと歩き去って行った。

「んまいっ！」

出された料理を頬張りながら、サタンが感嘆の声を漏らした。

「そうでしょうそうですね。サデインのご飯は最高ですからねえ」

何故かその隣で一緒に料理をつまみながら、自信満々で胸を張るルシエル。

それにしても、こっちに来てからというもののサデインは料理ばかりしているような気がする……

「そうかそうか貴様が作ったのか」

ガツガツと食べる勢いを止めぬまま、サタンがサデインを見つめた。

「あ、ええ、まあ……」

サタンの余りの食べっぷりに軽く引きながら、サデインは頷く。テーブルに並べた料理の数々は、ものの数分とかからずに、サタンの胃袋へと消えていった。

最後の肉の一切れを口に運び、食後の紅茶を啜ってナプキンで口元を拭う。

「ふむ、中々美味であったぞ。誉めてやる」

サタンは偉そうにそう言うと、いきなり立ち上がってサデインに近付いた。

「はあ、ありがとうございます……」

呆氣にとられていたサディンは、急に近寄ってきたサタンの顔を見上げる。

サタンとサディンでは頭一つ分くらい身長が違うので、ここまで近寄られると、かなり上向きにならないければ目を合わせられない。

「……てか、接近しすぎ」

時雨の小さなツツコミが聞こえた者はいただろうか。

サタンはこれまたいきなり、サディンの手を取り腰に手を回し……

「貴様、気に入ったぞ。どうだ？ 俺様の専属シェフとして働かないか？」

「は……ええ!？」

かなり引きつった顔で、サディンが素っ頓狂な声を上げる。

慌ててルシエルが飛んできて、サタンを後ろから羽交い締めにする。

そこにすかさずミカエルが駆け寄って、サディンをサタンから引き離れた。

「……何してんですか」

「えー、いいだろー口説いたってー。俺様好みだしー」

殺気の満ちた眼でサタンを睨み付けるルシエルに、何故か駄々っ子のような反論をするサタン。

「いや……好みって……」

時雨の呻き声に、ルシエルは沈痛な面持ちで頷いた。

「気を付けてくださいよ。何でもいけるクチですから」

「節操なしみたいに言うな失礼な。ブサイクは嫌いだ」

真顔で話すサタンを、どこか遠い目で眺めつつ、二、三步後退る時雨とサディンとミカエル。

助力を頼む相手を間違えたような気がしないでもないが、ここまで来てしまったのだから仕方ない。

天使たちは重い溜め息を吐き出した。

「さて、腹も膨れたところで、貴様らにいくつか説明せねばならんことがある」

ルシエルのホールドから抜け出したサタンは、真面目な顔でそう言うと言を座らせた。

とりあえず邪魔な食器類を寄せて、サタンの近くの席に着く。

「まず確認したいのだが、貴様たち、ゼウスの目的はどこまで知っている？」

唐突に切り出したサタンの言葉に応えたのはミカエルだ。

「世界創造の女神を目覚めさせ、世界を一つに戻す。そのために時雨の治癒能力を必要としている。」

更に、世界を元に戻すにあたり不必要な人間を狩るために、我々天使を造り上げた……」

要点だけをまとめたミカエルの言葉を、サタンは肯定も否定もせ

ずにただ笑った。

「フ……まあ、大まかに言えばその通りだな。……だが本当の目的は知らぬか……」

「え……？」

サタンの台詞の最後の呟きは、誰も聞き取れなかった。
サタンはそのことについては何も言わず話を進める。

「まず言っておくが、貴様ら天使では神には勝てん。そこには圧倒的な力の差が存在する」

四人はサタンの話に黙って耳を傾けた。

神と天使では、根本的な魂の造りが違う。

神、そしてアビスにいる悪魔と呼ばれる者は、かつて存在した世界に住んでいた者たちなのだ。

世界が砕け散ったとき、世界と共に散り散りになった魂たち。

そのうちいくつかの魂は集まって、消えゆく世界をどうにか救おうと、世界の欠片を集めて繋げた。

だが、無数の欠片を全て集めることはできず、あちらこちらに元の世界を模倣した小さな世界が創られた。

「この世界を創ったのが、ゼウスたち神と呼ばれる者。そして俺様たち悪魔と呼ばれる者だ」

サタンの言葉は続く。

ルシエルたちは全く口を挟めず、ただ静かに聞いていた。

世界の欠片を使って創られた模倣世界。

その世界にも、いつしか命が生まれ、文明を築き、現在の姿になった。

この模倣世界を創った魂たちは、遙か上空に住まい、新たに生まれた魂たちの管理をしていた。

だが、いつしかゼウスは、この世界を元の姿に戻したいと願うようになった。

何故突然そんなことを言いだしたのか。

当然反対する者もいた。

ゼウスに齒向かった者はカエルスを追放され、ここアビスに墜ちた。

アビスは元々、ゼウスの目的に不必要な魂を押し込めるために創られた場所だったのだ。

力のない者、ゼウスに反抗的な者、ゼウスの立場を脅かす者。

様々な者がここに閉じ込められている。

「……ではサタン、貴方も……」

ルシエルがぽつりと呟いたが、サタンは黙って口許に笑みを浮かべるのみだった。

アビスに墜とされた元の世界の住人だった魂は、ゼウスの呪いによって異形の姿に変えられた。

更に、二度とカエルスに戻れぬように結界を張られた。

そのために、サタンを含めた数名の悪魔が、このアビスから出られなくなっているのだ。

「だから俺様は直接手を貸せん」

「そんな……」

ルシエルたちは表情を曇らせて首垂れた。
サタンなら、ゼウスの力にも対抗できると思ったのに。
ルシエルたちだけでは、ゼウスに敵うはずがない。

「……なら、あの時のように……」

ルシエルが顔を上げてサタンを見た。

百年前の時も、ルシエルはサタンの力を借りたのだ。

あの時と同じく、サタンの力を分けてもらって、自らゼウスに戦いを挑まねばならないだろう。

「もちろん、貴様らには俺様の力を分け与える。だがそれでもゼウスを倒せるかどうかは解らん。

こちらの話を聞くような奴でもないしな。もとより話し合いができる相手なら、俺様がとつくに説き伏せとるわ」

最後の方は不機嫌そうに口を尖らせ呟いた。

四人はそんなサタンの様子に苦笑いを浮かべる。

とにかく、ルシエル、ミカエル、サディンの三人で、神の軍団を相手にしなければならぬのだ。

当然、事情を知らない他の天使たちも立ちほだかるだろう。

彼らは出来る限り巻き込みたくない。

かなり厳しい戦いになるだろうことは、容易に想像できた。

四人が押し黙ってしまった中で、サタンがやおら口を開いた。

「俺様に一つ、案がある。确实とは言い難いが……」

彼にしては珍しく言葉尻を濁している。

だが、今はどんな小さなことでも聞いておきたい。

皆、サタンの話に耳を傾けた。

「カエルスにもゼウスに反対するやつはいる。上手く誤魔化しているようだが、そいつらに接触できれば力になってくれるやもしれん」

ゼウスに目を付けられないように、当たり障りなく過ごす者。

彼らを捜すことができれば、かなり戦力は増すだろう。

問題は、それが誰かということだ。

「ゼウス派の奴に、ゼウスを倒す手伝いをしてくれなんて、言えま
せんものねえ……」

「誰か、心当たりは？」

ミカエルの問いに、ルシエルは静かに首を振った。

「そんな方を知っていたら、わざわざ一人で喧嘩売ったりしません
よ」

それもそうだ。

もちろん、ミカエルやサディンにも心当たりはない。
一同の目はサタンに向けられた。

「……まあ、ないこともない」

頬杖をつき複雑な表情で話すサタンを、皆は静かに見つめた。

「……ゼウスの娘だ」

「娘？」

天使の三人はまるで初めて聞いたと言わんばかりに首を傾げた。事実、サディンもルシエルも、ミカエルでさえ、ゼウスに血縁がいたことなど知らなかった。

サタンは静かに語り出す。

ゼウスの娘は神殿の奥深くにいること。

姿を現すことは滅多にないが、神々はその存在を知っていること。その力はゼウスに次ぐもので、彼女さえ味方にできれば他の神たちを従えることさえ可能かもしれない。

「深い新緑色の長い髪が特徴だ。ジジイに似ず美人だぞ」

サタンはそう締めるとニヤリと笑った。

「新緑色の……長い髪……？」

ぽつりとサディンが呟いた。

何かを思い出すように顎に手を当て考え込んでいる。

「どうしました？」

その様子に気付いたルシエルがサディンの顔を覗き込んだ。

サディンははっとしたように顔を上げる。

「一度だけ……会ったことがある……と思う」

その言葉に、ルシエルとミカエルと時雨は一斉にサディンに注目した。

サタンは面白そうに片眉を跳ね上げサディンに目を向ける。

「以前……拘留されていたときに、一度だけ新緑色の髪をした女性が訪ねてきたことがある。恐らく彼女だと思うんだが……」

サディンは百年前の処刑の後、しばらく神殿の奥に拘留されていたのだ。

傷の手当てもされずに薄暗い牢に押し込められ、誰も何も信じられず自暴自棄になっていたとき。

彼女がやって来てサディンの傷を癒してくれたのだ。

少しの間だけ話もした。

どこの誰かも判らず、名前すら聞いていないことに気付いたのは、彼女が立ち去った後だった。

「ほんの数分の時間だったけれど……俺はとても救われた」

懐かしそうにぽつりぽつりと話すサディンを見て、サタンは確信したように頷く。

「間違いないな。ゼウスの娘、ジュピターだ」

「では……」

「ああ。俺が彼女を捜してみる。一度でも会ったことがある人なら、居場所を捜せるからな」

そう言ってそっと胸元に触れる。

カストルの能力を使えば、すぐに見付けることができるだろう。これでゼウスに勝てる可能性が出てきた。

「ならば、天使たちのことは私が何とかしよう」

自ら申し出たのはミカエルだ。

大天使であるミカエルならば、他の天使たちを説得することも可能だろう。

「では、時雨を守るのは僕の役目ですね」

にこやかに言ったのはルシエルだ。

サデインが神々の、ミカエルが天使たちの説得を担当するのなら、必然的にルシエルが時雨の守護役になることになる。

実を言うと、それが最も危険な役割なのだ。

ゼウスが狙っているのは時雨だ。

ならば、時雨を捕らえることを最優先にするだろう。

強力な者を遣わすか、もしかしたら自ら姿を現すかもしれない。

時雨を守りながら戦うのは、かなりの危険が伴うだろう。

しかし、ルシエルの決意は揺るがなかった。

まっすぐに時雨を見つめる。

「貴方は、僕が絶対に守ってみせますよ」

静かに言い放つルシエルの言葉を正面から受け止め、時雨は大きく頷いた。

「ああ。俺も足手まといにならないようにする」

ルシエルと時雨は微笑んで互いの拳を打ち合わせた。

そんな四人を見回してサタンが席を立った。

「役割分担も決まったようだな。

とりあえず今のうちに作戦でも決めとけ。空いてる部屋は勝手に使っている。

貴様らをカエルスに戻すのは、明日の夕刻だ」

それだけ言うと背を向け歩き出す。

「あ、サタンどちらへ？」

「それでも俺様は忙しいんだ。話がまとまったら広間に来い」

それだけ言うとサタンは部屋を出て行ってしまった。

ルシエルは訝しそうにしながらも、話の輪に戻る。

普段ならもう少し気に留めただろうが、やはり今後のことに気をとられていたのだろう。

その代わりに時雨が席を立った。

サタンを追って足を踏み出す。

「時雨、どこへ行く？」

ミカエルに呼び止められて、時雨は慌てて振り向いた。

「これからのことを話し合わないと……」

「あー、俺はルシエルの後ろにくっついてればいいんだろ？」

「そんだけ解ってりゃ充分だって」

そう言うと、ルシエルたちの返事も聞かずに部屋を出ていった。

城の中の通路の一面に、サタンはいた。

窓から外を眺めてぼんやりしている。

「あーっと、ここにいたのか」

通路の向こうから時雨の声が聞こえて、サタンは窓の外から視線を外した。

振り向くと、時雨がこちらに向かって走ってくるところだった。サタンは時雨が来るまでその場から動かず、時雨が自分の前で立ち止まってから口を開いた。

「貴様、いつまで小僧のふりをしている。下手な演技はよせ」

唐突なサタンの言葉に時雨は首を傾げた。

「……は？ 何言ってるんだ？」

「とぼけるな。俺様の目を誤魔化せるところだよ」

サタンの鋭い視線に時雨はしばらく立ち尽くしていたが、ややあって軽く頭を掻きながら笑った。

「ははっ、すげえや。さっすが地獄王」

時雨はそう言ってサタンにまっすぐ視線を向けた。

「貴様、リリースとかいうガキか……？」

……いや、違うな。小僧でもあり、ガキでもある……これが一番近い表現か……」

サタンは独り言のように呟く。

それを聞いた時雨は満足そうに大きく頷いた。

「正解。と言ってもまあ、八割くらいは時雨だけど」

時雨は普段とは違い、やわらかな表情で笑う。

ルシエル辺りが見たら、熱でもあるのかと、さぞかし大騒ぎすることだろう。

「いつからだ？」

サタンのごく短い問いに、時雨は唸って腕組みし、先程とは反対側に首を傾げた。

「んー、アビスに来てから？ ……いや、はっきり気付いたのはあなたに会ってからかな。

俺が、いつもの俺じゃないことに気付いたんだ」

そう話す時雨の口調は時雨そのもので。

しかし、時雨の中に別の時雨が顔を出していた。

アビスの空気がそうさせたのか、サタンの気がそうさせたのか、はたまた全く別の何かが原因なのかは解らない。

ただ、時雨の中にリリスの感覚が目覚め始めたのだ。

それははっきりと別人格を感知するのではなく、もう一人の自分と表現することもできないような奇妙な感覚。

リリスの記憶が甦った訳でもなく、人格が入れ替わった訳でもない。

強いて言うなら、リリスの心を感じるのだ。

だが、それをリリスとして感じている訳ではなく、時雨の心の中にリリスの心がゆっくりと浸み出し、融けていく感覚。

言葉では言い表わせないような、不思議な気分だった。

「リリスの記憶が甦った訳じゃないんだ。ただ、何となく、リリスが感じるのが解るって言うか……」

上手く説明できずに口籠もる時雨を見て、サタンは納得したように頷いた。

「つまり貴様は、リリスと感覚を共有をしているという訳だ」

「感覚を共有？」

おうむ返しに問う時雨を見下ろしながら、サタンは要点だけを簡潔に答えた。

「ああ、例えば、一枚の絵を見て貴様はつまらないと感じた。しかしリリスは面白いと感じた。

今の貴様はその絵を見たときに、リリスと同じ感じ方をするようになっていくんだ。二つの心が混在している訳だな」

「はー……解ったような解んないような」

サタンの話を不思議そうに聞いていた時雨だったが、あまり理解していない様子だ。

サタンはひょいと肩をすくめ、再び窓の外に顔を向けた。外にはもうすぐ沈もうとしている金色の光。

サタンは自ら作り出した、偽りの太陽の光に目を細めた。

「それで？ わざわざ何をしに来たのだ？」

外に顔を向けたままでサタンは問う。

それで時雨はサタンを追ってきた最初の目的を思い出した。

「あ、そうそう。お礼を言いに来たんだった」

「礼だあ？」

サタンはあからさまに嫌な顔をして時雨に目を向けた。

「あ、なんだよ人が素直にお礼したいって言ってんのに」

時雨は不満そうに口を尖らせてサタンを睨む。

そう言うってから照れ臭そうに頭を掻いた。

「……ありがとな」

小さく呟いた言葉を聞いて、サタンが呆れたように鼻で笑った。

「貴様に礼を言われる筋合いはないぞ。そもそも、貴様は巻き込まれただけの被害者だろうが」

こうもはっきり言われると、時雨は改めて己の立場を考えずにいられない。

つい先日までは普通に暮らしていたはずなのに、いきなり天国行きになって神様に追われて地獄の果てまで逃げてきた。

こんな話、家族だって信じないだろう。

正直、最初は何で俺がこんな目に、と思ったものだが、今はそんなに憤りを感じない。

これもしリスの心のせいなのかもしれないが、時雨は今の自分の気持ち信じている。

迷いや恐れはない。

「いいんだよ、被害者だって。被害者が犯人に立ち向かっちゃいけないなんて決まりはないし」

サタンは黙って時雨の話に耳を傾けた。

「それに俺、今すっげえ楽しいんだ」

時雨はそう言うのと心底楽しそうに笑った。

普通に生きていた頃には、こんなにも楽しいと思えることはなかった。

毎日決まった時間に起きて登校して勉強して。

友人との会話は毎日同じようなものばかり。

両親は共働きだからあまり顔を合わせないし、最後に会話したのはいつだったかさえ定かではない。

そんな中で時雨は、少しでも楽しくなるようにと、進んで場を和ませたり盛り上げたり、周囲に気を配りながら生きてきたのだ。

時折、友人と話すことさえ苦痛に思えることもあった。

でもこちらに来てからは、ありのまま、思ったままに行動している。

癖でつい周囲に気を配ってしまうのは変わらないが、今までよりずっと生き生きしている自分を感じている。

まあ、死んでから生き生きするというのもおかしいものだが。

とにかく時雨は、今この現状に不満を感じてはいない。

これからのことに緊張や不安はあるが、それ以上に自分の心が充実しているのが解る。

サタンはそんな時雨を見て面白そうに笑った。

「ふっ、貴様は……まるで死人に見えんな」

サタンのその言葉を聞いて、時雨はふと思いついたように手を叩いた。

「そうだ。なあ、不思議に思ってたんだけど、何で俺死んでんのに物掴んだり腹減ったりすんの？」

「何で俺様に訊く。奴らに訊けば良からうに」

「いやあだって会議が白熱してるから、邪魔しちゃ悪いと思って」

サタンは面倒臭そうにしていたものの、どうせ何もすることはないし、仕方なく時雨に説明し始めた。

「貴様は今、肉体から抜け出た魂だけの存在だ。これは解るな？」

サタンの言葉に時雨はこっくりと頷く。

「人間は皆、生きていた頃の感覚を魂だけになっても覚えているのだ。五感のすべてを、生きていた頃と同じように感じる事ができる」

「なるほど……」

そういえば、確かに眩しいとか疲れたとか、生きていた頃とほとんど同じように感じていた。

「空腹感も同様だ。本来、魂に必要とされる精気は、自然界に満ちる気を吸収するだけで補える。

だが、今まで食事でエネルギー補給していたものを、気を吸収しろと言われたところで簡単にできるものではない。

だからわざわざ気を食物の形にして食すのだ。解るか？」

突然聞かれて時雨は困ったように首を傾げた。

「えーっと、つまり……」

いきなり断食すつとストレス溜まるから、幽霊になっても飯を食うってことか？」

「……まあ、そんなもんだ」

時雨の解釈を聞いて疲れたような溜め息を吐いてから、サタンは仕方なく頷いた。

かなり雑な解釈だが、概ね解っているならそれでいい。

こんな小僧にすべてを理解しろと言うのが、所詮無理な話なのだ。サタンは今更ながらに、時雨の疑問に答えてやろうなどと思ったことを後悔した。

「じゃあさ、物を掴んだりできるのは？」

サタンの気持ちなど知らずに、時雨は次々と質問してくる。

あの陰険眼鏡が説明しとかないのが悪いんだ。

サタンはそう思うことにした。

時雨に罪はないのだし。

「……魂だけの状態でも質量はあるんだ。かなり軽いがな。

だから触れることができる。……解るか？」

時雨は腕を組み首を傾げて考えながら言う。

「えつとお……ま、とにかく触ることはできんだよな」

やはりほとんど理解していないようだ。

「それと、身体が透けて見えることもあるんだけど。なんで？」

サタンは嫌そうな顔をしながらも答えてやる。

「……今の貴様は空気みたいなもんなんだ。

ただ生前の記憶に基づき、姿形を具現化しているにすぎん。

さっきも言ったが、五感の記憶が強烈に残っているから、生前とまったく同じ感覚で触れたりできる。

本来ならば質量にかなりの差があるため、触れることはともかく持つことなど到底不可能なのだが、魂に記憶されている感覚を基に」

「ちょっと待った！」

話の途中で時雨が声を上げた。

サタンが時雨を睨むと、時雨は困ったように笑いながら頭を掻いた。

「なんかもう、全然解らないんだけど……もちっと簡単に説明してくんない？」

「……………」

サタンは呆れたように時雨を見遣り、脱力感に逆らわずにがっくりと肩を落とした。

「……つまりだなっ！ 慣れれば何でもできるってことだ！」

もはややくそである。

サタンはこれ以上ないくらい簡単に説明すると、踵を返して時雨

に背を向けた。

「もういいか!? 俺様はもう何も答えんぞ! どうせ貴様のよう
な小僧には何も理解できまい!」

一息にそう言って立ち去ろうとするサタンを、時雨が呼び止める。

「なんだよ俺だって理解してるよ。まだ聞きたいことあんだけど」

「何も答えんと言った!」

「そこをなんとか」

「するかっ!」

さっさと行けばいいものを、サタンは律儀にも立ち止まって時雨
に言い返している。

サタンはあれでいて結構人付き合いが良い。

時雨もそのことを察しているのか、しつこく食い下がる。

しばらく言い争っていたが、やがて諦めたサタンが一つ一つ解説
してやることで落ち着いたようだ。

その後ルシエルたちが捜しに来るまで、二人はそこでずっと立ち
話を続けていた。

「サタン、こちらにいましたか……って、何してたんです?」

「貴様 あっ! ガキの教育に手を抜きおってえ!」

ルシエルが回廊の向こうから顔を見せた瞬間、サタンはまるで瞬

間移動でもしたかの如き素早さで突進し、ルシエルの胸ぐらを引っ掴んだ。

そのままがつくんがつくん揺さ振る。

ルシエルは訳が分からず、しかしその力の差の前に抵抗すらできずに目を回している。

……アビスに来てからというものの、こんな役ばかりな気がするのだが……

だがまあ、それはルシエルの気のせいだろう。

ルシエルが完全に白目をむいたところで、ようやくサタンは手を放した。

ルシエルは仰向けにひっくり返り、ぴくぴくと痙攣していたりする。

時雨はその様子を黙って見守っていた。

少しでも口出ししたら、命がないような気がしたからだ。

サタンはフンと鼻を鳴らし、倒れたルシエルを冷ややかな目で見下ろした。

そんな中に姿を現したのはサディンだった。

中々戻らないルシエルを呼びに来たのだが、目の前の惨事を見た途端に無言で踵を返して歩き去ろうとする。

だが、時雨はそれを許さなかった。

偶然現れた天の助け。逃がしてなるものか。

時雨は気力を振り絞りサディンに肉迫する。

「ままま待てよサディン俺ら呼びに来たんだろってゆーか逃げるな」

声を震わせ一気にまくし立て、がっしとサディンの腕を掴む。

「いっ、嫌だ離せ！ 俺は何も見なかった！」

「見捨てないでくれっ！ 次に狙われるのはきつと俺だ！」

死なばもろとも。

時雨はサディンを離そうとしない。

サディンは何があったか知らないが、どうせ下らないことなのだ。巻き込まれるのはゴメンである。

そんな二人の攻防を目にしたサタンは、怒る気力も失せたのか、舌打ち一つして歩き出した。

時雨とサディンがぴたりと動きを止める。

サタンはそんな二人の脇を通り過ぎ、回廊の奥へと消えていった。取り残された時雨とサディンは顔を見合わせ、白目をむいて倒れているルシエルを見下ろした。

そして二人同時に息を吐き出し、もう一度顔を見合わせて思わず嘔き出した。

「あービビった。マジビビった」

「なんだ、情けないな時雨」

「サディンだって逃げようとしただろ」

そして声を上げて笑う。

重々しい巨城に似付かわしくない、楽しげな笑い声だった。

ようやく気が付いたルシエルがのろのろと起き上がり、笑い合う二人を見て首を傾げた。

時雨たちが回廊で笑っている間に、サタンはミカエルがいる部屋に戻ってきた。

ミカエルはサタンの姿を見ると無言で立ち上がる。

「……話がある。ついてこい」

サタンはそう言って隣の部屋へ移動した。

ミカエルは黙って後続く。

部屋の扉を閉めたところで、サタンが振り返った。

「貴様、既に相当の力を有しているな。今、無理に俺様の力を吸収したら、死ぬぞ」

遠慮も躊躇もなく、サタンは蕩々と言葉を紡ぐ。

ミカエルは大天使である。天使の中では最も強い。

だが、その強い力に身体が耐えきれなくなっているのだ。

天使の身体は、魂に宿る力を入れておくための器だ。

容積を超えると壊れてしまう。

ミカエルはぎりぎりの状態で身体を維持しているのだ。

この上サタンの力を取り込んだら、器が壊れてしまうかもしれない。

サタンはそれを見抜いて警告しているのだ。

だが、ミカエルはサタンの言葉に首を振った。

「この身が壊れる覚悟など、とうにしている。その上で私はここに
いるのだ」

ミカエルの言葉に嘘はない。

その瞳には迷いも恐れもない。

ただ純然たる決意がそこにあった。

ミカエルは守護の大天使。仲間を守るためにここまで来たのだ。

ミカエルの覚悟を知ったサタンは、ふっと口端を持ち上げて笑った。

「大天使ともあろう者が、無謀だな」

口から滑り出たのは皮肉。

だが、ミカエルは気にした様子もなく肩をすくめた。

「無謀とは思わん。無茶をしようとしていることは事実だがな」

ミカエルも、自ら死に行く訳ではない。

短時間ならば器の許容量をオーバーしても、すぐに壊れることはないと知っていたし、ミカエルには『替え』があるのだ。

もし、今の器が壊れても、新しい器に魂を移し替えればいい。

実際、今のミカエルの器は二つ目だ。

そのことは、他の天使は誰も知らない。

魂さえ無事ならば、ミカエルは復活することができるのだ。

だから、この身を犠牲にしても、仲間を守りたい。いや、必ず守る。

だから――

「貴殿の力を貸していただきたい。地獄王サタン」

ミカエルは恭しく頭を下げた。

サタンはそれを見下ろし、腕組みして口を開く。

「本気のような……いいだろう」

その言葉を聞いたミカエルが顔を上げる。

「では……！」

「ふん。天使と神の戦が、これで面白くなりそうだ」

サタンは楽しげに喉を鳴らして笑い、ミカエルが礼を言う前に部屋から出ていってしまった。

サタンが先程の部屋に戻ると、そこには既にルシエルたちがいた。ミカエルと話している間に戻ってきたらしい。

サタンは彼らを一瞥すると一番奥の席についた。

サタンが入ってきたすぐ後にミカエルが姿を現した。

ルシエルたちの許へ歩み寄ると、互いの顔を見合わせて頷く。決戦はもうすぐだ。

「今日はもう遅い。空いてる部屋で好きに休め」

サタンはそう言うと、脚を組んで鷹揚に天使たちを見回した。

「明日の夕刻にカエルスへの道が開く。そのときに俺様の力を貴様らに分け与える。いいな？」

「はい。ありがとうございます、サタン」

その後は皆、思い思いに過ごすことになった。

明日の夕刻には、敵地へ乗り込むことになる。

今のうちに充分休んでおかなくては。

そのためにはたっぷりと睡眠をとって、ゆっくり身体を休めることが大切なのだが……

「なーなー、んで結局のところ俺は何すりゃいい訳？」

時雨はルシエルの部屋に来て、寝ようとしていたルシエルを叩き

起こしていた。

「何なんですか貴方は。どうでもいいですけど寝かせてください」

「どうでもいいならいいだろ。俺、ほとんど話聞いてなかったからさあ」

時雨はルシエルのベッドに飛び乗り、胡坐をかいて座ったままルシエルを見下ろした。

「あの一、寝たいんですけど」

迷惑だとも言いたげに――実際迷惑なのだが――苦笑いを浮かべて、布団に潜り込もうとするルシエル。

しかし時雨は相手の迷惑顧みず、ゆさゆさとベッドを揺らして尚もしつこく話し掛ける。

「おい、ルシエル」

「……………」

「ルーシーエール」

「あああもうっ！ 何なんですか！」

我慢しきれなくなったルシエルが、がばつと身を起こして叫んだ。
時雨はにんまり笑って言う。

「だから、明日の作戦」

「そんなの明日説明しますから」

ルシエルは冷たくそう言うと、頭から布団を被り狸寝入りを決め込んだ。

時雨がどんなに揺り起こそうが、無視している。

「なんだよ。いいから聞いてくれって」

寝たふりをしているルシエルの横で、時雨は勝手に話し始めた。その話を聞いて、ルシエルは思わず起き上がる。

明日の決戦に、時雨は時雨なりの覚悟があったのだ。

ルシエルは反対したが、時雨の熱意に負けて渋々承諾した。ミカエルたちに言うのと当然反対されるだろうから、彼らには秘密にしておく。

短い話し合いを終えると、その後は何事もなかったかのように時が来るのを待った。

それからの時間はあっという間だった。

もうすぐ日が傾き、サタンの城の前にカエルスへと通じる道が開く。

ルシエルたちは、道が開くと予想された場所に並んでいた。

その前にはサタンがいる。

ルシエルたちは緊張の面持ちでサタンを見つめた。

サタンはルシエルたちを見渡しながら、ゆっくりと口を開いた。

「いいか？ 俺様が力を貸すのはこれで最後だからな」

「解ってますよ」

ルシエルたちが頷いたのを見て、サタンはフンと鼻を鳴らした。

「では道を開くぞ」

サタンの声に応えるように、ルシエルたちの目の前で魔法陣が輝きだした。

天使たちは驚愕して目を丸くする。

何しろ、カエルスとアビスを繋ぐ道を自ら作るのは、不可能と言われていたのだから。

「ちよっ、サタン、人工的に道を作るなんて……」

「ああ、不可能だな。そのために、俺様は準備していたのだ」

まるで信じられないといったルシエルの声に、しかしサタンは自信たっぷりに答えた。

床に描かれた魔法陣の輝きに呼応するように、アビスのあちこちで光の柱が立ち昇る。

光の柱は少しずつ先端が曲がり、柱から水の流れのように変わった光の束が、魔法陣に吸い込まれるように集まってくる。

魔法陣はその光を受け、一層明るく輝いた。

魔法陣から溢れる魔力が、周囲の空気をはためかせ風が流れる。翻弄される髪を片手で押さえ、ミカエルはサタンに尋ねた。

「いったい……どんな技術を使えば道が作れるのだ……？　こんなことは初めてだ……」

「なに、俺様の部下たちがアビス中の魔力の泉を開放しているのさ」

アビスには悪魔たちの力の源となる、魔力の泉と呼ばれる場所がいくつか点在している。

そこには高い魔力が秘められていて、確かにその力を使えば一時的にゼウスの結界を破り、カエルスとアビスを繋ぐことができるだろう。

だが……

「あなた、悪魔たちは反乱したと言ってませんでした？」

ルシエルのツツコミ通り、昨夜サタンはこう言った。悪魔たちは全員反乱したと。

それなのに、これはどういうことなのか？

時雨たちが皆首を傾げる様子を見て、サタンはくつくつと笑った。

「誰も『俺様に』反乱したとは言っていない。悪魔たちが反乱したのは、己の運命にだ」

アビスから事の成り行きを見ていたサタンは、配下の悪魔たちに提案したのだ。

神に復讐してやろうと。

アビスに住む悪魔は、元はカエルスから追放された者たちだ。

彼らは、一方的に反逆者扱いされ、異形の姿に変えられてアビスへ堕とされたのだ。

皆がゼウスを、少なからず恨んでいるだろうことは明白だ。

サタンは彼らを各地の魔力の泉へと向かわせ、泉に満ちる魔力を解放させた。

それをこの一点に集めて、正に今、カエルスへの道が造られようとしている。

「あなた……本っ当に性格が悪いですね」

ルシエルの溜息混じりの呟きを聞いて、サタンはフンと鼻を鳴らす。

「お互い様だボケ」

そう言うときサタンはルシエルに手を差し出した。

傍から見れば、握手を求めているようにしか見えない。

だがまあ、今までのサタンの言動から考えると、それはないだろう。

「今から貴様らに俺様の力を分け与える。一人ずつ手を出せ」

サタンの呼び掛けに、ルシエルたちはいよいよといった風に表情を引き締めた。

まず、ルシエルが手を差し出す。

二人の手が重ねられた。

「王の名の下に黒き翼を授けよう……」

サタンの声が聞こえた瞬間、ルシエルを悪魔の羽が包み込むような錯覚を覚えた。

それは当のルシエルだけでなく、それを見ていた時雨たち全員がだ。

その感覚は一瞬のことだったが、ルシエルは確実に、自分の中に別の何かが宿ったのが判った。

サタンはルシエルの手を放し、順にミカエル、サディンにも同じように手を差し出した。

サディンの手を放したと同時に、魔法陣が一際強く輝きだした。道が繋がったのだ。

「さあ、行け。うまくいけばカエル스에繋がったはずだ。

……まあ、この俺様が失敗などするはずないがな」

静かに微笑うサタンに感謝の意を示し、天使たちは深く礼をする。神の使いが魔王に首を垂れる光景は、真実を知らぬ者から見ればとても滑稽に映っただろうと、時雨はぼんやりとそんなことを思った。

時雨はルシエルたちと共に、光の魔法陣の上に乗る。

目の前を眩しい光に包まれて、地獄の景色が薄くぼやけてゆく。

天使たちと一つの魂は、魔王に見守られながら、遥か天上の神の箱庭へと戻っていった。

終戦

天の国、カエルス。

神の住まう社の中、広い庭の巨木がざわりと枝葉を揺らした。

まるで神の子の帰りを待っていたかのように、ゆっくりと枝をくゆるせる。

神殿内にいた者でそれに気付いたのは、ごく一部の神だけだった。

目の前を覆っていた光が薄まり、時雨たちは眩しさに細めていた目を開いた。

数回瞬きをして辺りを見回せば、目の前には見覚えのある巨大な門。

カエルスの入口に、四人は立っていた。

「門……ということは、ここはまだカエルスの外か」

ミカエルが落ち着いた声で呟く。

下手に門の内側に出ると、すぐに見付かって大騒ぎになっていただろう。

「さ、まずはカエルスの中に入らなくてはいけませんね」

ルシエルの言葉通り、まずはカエルスに潜入しなくてはならない。しかし、堂々と正面の門を開けて入る訳にもいかないだろう。

何しろこちらは狙われている身、捕まえてくれと言っているようなものだ。

「こっちへ。分かりにくい場所に抜け道があるんだ」

そう言って先頭を歩き出したのはサデインだった。

三人は何も言わずにサデインの後をついていく。

それは長年門番を勤めたサデインが、偶然発見したものだ。

以来、そこを通ってカストルに買い物に行かせたりしていた。

先日、時雨がカストルを追ってカエルスの外に迷い出てしまったのも、知らない間に抜け道を通ったからだっただ。

この抜け道は住宅街の裏通りの、人気のない場所に繋がっている。カエルスを囲む壁が崩れてできた抜け道だ。

ゼウスに知られていないとは思わないが、少なくとも正面から乗り込むよりはマシだろう。

カエルスの中に入ったら、後は時間との勝負である。

神々に見付からないうちに神殿内に忍び込み、今回の戦いの鍵となる人物、ゼウスの娘ジュピターを捜さなければならない。

その役目はサデインに任されていた。

唯一ジュピターを見たことがあり、しかもサデインの分身であるカストルの力は探査能力だ。

ジュピターを捜すのに、これ程適している者は他にいない。

その間、ミカエルが他の神々と天使たちを引き付けておき、ルシエルが時雨の護衛を努めることになっている。

しばらくすると、サデインの言っていた抜け道が見えてきた。

壁にぽっかりと開いた穴は意外に大きく、人一人が手を広げて通れる程だ。

用心深く周囲を確認して、素早く壁の向こうへと足を踏み入れる。しかし、神の庭に入った瞬間、鋭い視線を感じた。

思わず周囲を見回すが、近くに人影はなく、この視線の主も見当たらない。

だが見当はついている。
ゼウスに見られているのだろう。

まとわりつく視線を振り切るように、ルシエルとミカエルは飛べない二人を抱えて宙に舞った。

地を走るより、空を駆けた方が速い。

「市民に姿を見られるのは厄介だ。見られないくらいに上昇するぞ」

ミカエルの言葉に頷き、ルシエルも上へと翔んだ。

カエルスに住む魂たち全員が、ゼウスの支配下にいるのだ。

自分たちのことが知られている可能性もある。

関係ない市民を巻き込む訳にはいかないし、何より神殿から離れた場所で足止めされる訳にはいかない。

ミカエルは己の能力で見えない防護壁を造り出し、風の抵抗を極力押さえた。

そのお陰で、ミカエルもルシエルも飛行スピードがぐんと上がる。カエルスの街の遥か上空を天使たちが飛んで行くが、市民たちにはまったく気付かれなかった。

そのまましばらく飛んで行くと、緑の丘の上に佇む白亜の神殿が見えてきた。

このまま神殿まで行けるかとも思ったが、やはり世の中そんなに甘くないようだ。

神殿の方から、無数の人影がこちらに近付いてきているのが見える。

警備の天使たちだ。

だが、それにしても数が多い。

警備担当ではない一般天使も、彼らを捕らえるために派遣されたらしい。

ここでサディンはミカエルから離れ、地に降りた。
ルシエルは時雨を抱えたまま、神殿を回り込むように滑空する。
ミカエルはまっすぐに神殿へと向かった。
当初の予定通り、三手に別れて行動するためだ。

神殿から飛んできた天使たちは、こちらに飛んでくるのがミカエルだと気付いて騒然となった。
それもそのはず、彼らはただ、反逆者が来るとしか聞いていなかったのだ。

神殿の前に広がる平原の上空で、彼らは対峙する。

「ミカエル様……？　なぜ貴方が……」

「どのように聞かされているのかは知らぬが、私はゼウスの野望を止めるために来た。そこを空けてくれるか」

ミカエルの言葉を聞いて、天使たちの間に騒めきが起こる。
迷いが生じている証拠だ。

ミカエルは彼らを見渡し、再び口を開いた。

「お前たちと争うつもりはない。そこを通してくれないか」

一番前にいた警備天使が、無意識のうちにミカエルに道を譲った。
それにつられるように数人の天使が脇に避けるが、まだミカエルの前に立ちはだかる天使の数は多い。

ミカエルは何もせずに、じっと天使の動きを待った。
自分からは手出ししないという意思表示だ。

天使たちの困惑は次第に高まっていく。
両者の対峙が続いたのは、ほんの数瞬のことだった。

「ぜ、ゼウス様は反逆者と言ったんだぞ！ あそこにいるのはミカエル様じゃない！」

一人の天使が途惑いを隠そうともせずにかんた。やはり神の言葉というだけで、天使たちは無条件で従ってしまうのだ。

予想していたこととは言え、ミカエルは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

かつての自分を見ているような気分だ。

忠誠心の強い警備天使が、ミカエルに槍を向け飛び掛かってくる。だが、その槍がミカエルに届くことはなかった。

ミカエルに届く直前に、不可視の防護壁に阻まれるのだ。

守護の大天使と言われているミカエルの能力は、防御である。如何なる攻撃をも通さない、絶対の防護壁を生み出す。

それはサタンの力を得て、より強力なものになっていた。

「すまん。少しおとなしくしていてくれ」

ミカエルは静かに言うと、たった今自分に刃を向けた天使の周りに防護壁を張った。

防護壁は丸く天使を取り囲み、天使はそこで身動きが取れなくなる。

その様子を見た他の天使たちが、一斉に槍を構えた。困惑を振り払うように声を張り上げて、ミカエルに刃を向ける。しかし半数程はその場から動けずに成り行きを見守っていた。

ミカエルとの力の差に、戦慄を覚えたのだ。

槍を手にミカエルに向かっていった天使たちは、最初の天使と同じ運命を辿る。

ミカエルの周囲には動けなくなった天使たちが溢れた。

ミカエルは彼らを飛び越え、残る天使たちの前に移動する。

天使たちは力量の差を知り、皆無言で身を引いた。

だが、ミカエルは進もうとはせず、その場に留まり上を見上げる。天使たちもつられて上を見ると、先程まで何もなかった空に、小さな人影が見えた。

「あっははー、だらしのないなあみんなー」

甲高い少女の声で笑い、その人影は音もなく天使たちとミカエルの間に割って入った。

鮮やかな桃色の髪を結い上げ、青い服に赤いスカート。背中には可愛らしい羽のついたバッグを背負っている。

それは時雨が街中で出会った少女だった。

「みんなのアイドル、キューピッドちゃんが来たからにはー、もう反逆者に好き勝手させないんだからー」

彼女の名はキューピッド。

れっきとした神々の一人である。

「ねー、ミカエルー。なーんでアナタがここにいるわけー？　アタシでっさり、あの陰険眼鏡が来ると思ってたのにー」

キューピッドは間延びした声で首を傾げる。

ミカエルはそれには答えず、恭しく礼をした。

「キューピッド様、お変わりないようで何よりです。先日の歌劇は如何でしたか？」

「あー、あれねー、オルフェウスの音楽はやっぱりいいわー。またチケット買ってきてー……って、何言ってるのよ。

んもー、やりにくいなあ……反逆者なら反逆者らしくー、ふっふっふ、お前の命もここまでだとか言ってるよー」

キューピッドは困ったように頭を掻きながら言う。

「どうやら彼女、悪役と戦うヒロインの役を演じてみたかったらしい。」

ルシエルあたりならそのノリに付き合ってくれそうだが、堅物生真面目なミカエル相手では無理というものだ。

キューピッドは「つまんなーい」と呟きながら、背中のバッグから折り畳み式の小さな弓を取り出した。

手早く組み立てると、左手に持ち構える。

しかし弓には弦はなく、また、射るための矢も持っていない。

「ねー、ミカエルー。なんでゼウス様に逆らうかなー。アタシ、そんなの許さないからねー」

キューピッドがそう宣言すると同時に、弦のなかった弓に光が収束し、弦と矢が生まれた。

それは仄かに揺らぐ焰のようだが、キューピッドが手で弾くと、弦はビーンと張って音をたてる。

矢羽に当たる部分を掴み、キリキリと引いてミカエルに向けた。

「ゼウス様の願いはアタシの夢……邪魔しないでー！」

キューピッドの叫びと共に一条の矢が放たれた。

が、それはミカエルに届く前に防護壁に弾かれ、霧散する。

キューピッドは再度光の矢を生み出し、連続でミカエルに射掛け

た。

そのことごとくが、ミカエルの防護壁に弾かれる。元々の力に加え、サタンの力をも借りたミカエルの防護壁は、神の攻撃さえ防ぐことができた。

キューピッドは一瞬驚愕の表情を浮かべ、それでも矢を射続ける。一撃をミカエルに射掛け、矢が弾かれる直前に上空へと身を踊らせる。

ミカエルが咄嗟に頭上を振り仰ぐと、弓矢を構えたキューピッドが視界に入った。

キューピッドは下方にいるミカエルに向かって同時に数十本の矢を射る。

それはキューピッドを中心に放射線状に広がり、ミカエルとその周囲にいる警備天使へと降り注いだ。

「うっ……うわああああ！」

「く……っ！」

ミカエルは初めて焦りを露にし、全警備天使を覆う程の防護壁を張る。

重い岩が分厚い壁を叩くような、激しい打撃音が響く。

思わず身を固くした天使たちの目の前で、光の矢は防護壁に阻まれ弾けて消えた。

ミカエルが張った防護壁は、辛うじて全ての矢を受けきった。衝撃が防護壁を通してミカエルの腕に伝わる。

腕がジンと痺れて、ミカエルは思わず眉を寄せた。

そのとき、キューピッドが急降下してミカエルの背後をとった。

「……………!？」

振り返ったミカエルの目が、驚愕で見開かれる。

キューピッドはミカエルが防御の姿勢をとる前に、構えた矢を放った。

目の前で閃く光が、高速で迫ってくる。

「ぐう……っ！」

至近距離からの一撃はミカエルに防護壁を張る間を与えず、咄嗟に身を捻って躲そうとしたミカエルの左肩を貫いた。

矢は肩を貫通し、その衝撃でミカエルの身体が大きく後ろに傾ぐ。傷口からは血が溢れ、ミカエルの白い服を赤く染めた。

キューピッドはこの機を逃さず、高速で次々と矢を射る。

ミカエルは右手を前に出し、防護壁を張ろうとしたが、完全に防護壁を形作る前に光の矢が飛んできた。

矢は防護壁に当たり角度を変え、ミカエルの周囲に拡散する。

不完全な防護壁では矢の力を削ぎきれず、散らばった光の矢の破片は勢いを殺せずに、ミカエルの後ろで成り行きを見守っていた天使たちを襲った。

前列にいた天使たちは、小さな矢の欠片を浴びて全身に傷を負う。彼らは声をあげることもできず、力なく地に落ちてゆく。

その光景を目にしたミカエルとキューピッドは、目を見開き動きを止めた。

ミカエルは彼らが地に落ちる直前に、咄嗟に防護壁を張って天使たちを受けとめた。

「……っ、お前たち！ 怪我人を連れて神殿へ行け！」

ミカエルの声で我に返った天使たちは、慌てて怪我をした仲間を連れて神殿へと飛んだ。

しかし、半数以上が未だその場に留まっている。

ミカエルはキューピッドへと視線を戻した。

キューピッドは弓を握り締め、神殿へと飛んで行く天使たちを見つめている。

ミカエルはそんな彼女に静かに語り掛けた。

「キューピッド様、このままでは彼らを巻き込んでしまいます。どうか、彼らに撤退するよう命じてください」

彼らはゼウスの命令に従ってここにいるだけなのだからと、ミカエルは続けた。

同じ天使である自分の声では、彼らを動かすことはできない。だが、神である彼女の命令になら、天使たちは従うだろう。

「あ……アタシ、こんなつもりじゃ……」

しかしキューピッドは小さく呟き首を振るだけで、ミカエルの言葉など聞こえていないかのようだった。

自分の矢が、関係ない天使たちを傷つけてしまったことに、ショックを受けているようだ。

弓を握り締める手に力が入る。

ミカエルはそんな彼女に優しく言葉を投げ掛けた。

「解っています。貴女はゼウスの命令に従っただけだ。非はありません」

だが、それはキューピッドには逆効果だったようだ。

キューピッドは、ミカエルの言葉を聞くとキツとミカエルを睨み付けた。

「わかってるわよ……元はといえばアンタが悪いんでしょー!?」
アンタがゼウス様に逆らうから……邪魔するから!
ホントの世界に戻すことの何が悪いのー!? ホントの世界を望むことの何が悪いのー!? ホントのママに会いたいって思うことの、何がいけないのー!」

キューピッドは狂ったように叫びながら、数十本の矢をつがえた。ミカエルは驚愕の表情を浮かべ、咄嗟に防護壁を張る。

その瞬間、キューピッドが矢をつがえた指を放す。

同時に大量の光の矢が、ミカエルと、その背後にいる大勢の天使たちに降り注いだ。

激しい雨が身を打つのを避ける術がないように、これだけの数の矢から逃れることは不可能だ。

天使たちは咄嗟に身を振り、光の矢が突き刺さるのを少しでも回避しようとする。

だが、恐怖で身体はその場に貼り付けられたように身動きできなかった。

皆、思わず目を瞑る。

しかし。

「お、俺たち、生きてる……?」

「何で……」

いつまで経っても、矢がその身を貫く瞬間は訪れなかった。

ゆっくりと目を開けた天使たちの目の前で、無数の光が弾ける。

天使たちの前には、ミカエルの防護壁が張られていたのだ。

傷一つない自分の身体を確認してほっと胸を撫で下ろした天使たちは、次の瞬間驚愕のあまり声を失った。

自分たちの前には厚い防護壁が造られていたのに、それを造った

はずのミカエルは、全身に傷を負って、今にも羽ばたくことを止めて落ちてしまいそうだった。

矢が放たれた瞬間、ミカエルは自分を護ることよりも、他の天使たちを護ることを優先させた。

その結果、自分の防護壁は間に合わず、その身に無数の矢を受けて翼はぼろぼろ。腕や脚は切り裂かれ服は真っ赤に染まる。

そして身体の中央の傷口からはとめどなく血が溢れて、ボタボタと赤い雫が腹部と背部から零れ落ちていく。

片手で傷口を押さえるが、血は止まりそうになかった。

その頃、大地を走り神殿内に侵入したサディンは一人、人気のない回廊を走っていた。

ミカエルが外で天使たちの大半を引き付けているお陰か、ほとんどの天使は上空のミカエルの許へと行ってしまったらしく、誰にも見付からずに済んだ。

だが、ぐずぐずしてはいられない。

天使たちが戻ってくる前に、ジュピターを捜さねばならないのだ。

一度ジュピターと会ったことがあるとは言え、普段彼女がどこに居るかなど見当もつかない。

己の分身の能力が探索系の力で、本当に良かったと思う。

サディンは確実に回廊の奥にジュピターの気配を捉えていた。

このまままっすぐ行けば、会えるはずだ。

このまま、何事もなければ。
だが。

やはり何事もなく任務を完遂することは難しいらしい。

サディンは全身に冷水を浴びせられたような、強烈な悪寒を感じて飛び退った。

そのすぐ目の前を、左側の壁が砕ける轟音と共に無数の石片が通り過ぎた。

もしもあと一步踏み込んでいたら、巻き込まれていただろう。

瓦礫と粉塵が静まり視界が開けると、破壊された壁の大穴から、一人の人影が姿を現わした。

動きやすい軽装の鎧で身を包み、短い髪をまとめ上げた冷たい印象の女性だ。

戦神アテナ。

その姿を目にした瞬間、サデインは後退せずに前に出た。

いくらサタンの力を借りたとは言え、この神と戦ったら無事では済まない。

逃げることも難しいだろう。

ならば、他に誰かを呼ばれる前に、おとなしくしてもらおうしかない。

サデインの判断は迅速だった。

アテナの手が壁の穴に掛かった瞬間に、相手が誰かを悟り行動に移した。

どうせこちらの位置は知られているのだ。不意打ちなどではしまい。

体術ならばサデインも得意とするところ、早めに勝負をつけて計画に支障がないようにせねば。

サデインがアテナを間合いに捉えたのと、アテナがサデインの前に完全に姿を現わしたのはほぼ同時だった。

サデインが右手の掌底を突き出した瞬間に、アテナが笑った。

「脆弱な雛鳥が。私に爪を向けてただで済むと思うな！」

それはほんの瞬きする間だったが、サデインは確かにそう聞いた。

サデインの一撃がアテナに届く寸前、サデインを上回るスピードでアテナの片足が浮いた。

それは正確にサデインのこめかみを捉えた。

サデインは反射的に左腕を上げてガードする。

が、ほとんど予備動作なしで振り上げたアテナの蹴撃は、ガードごとサデインを弾き飛ばした。

左腕がギシギシと軋む。

なんとか体勢を保ち、背中から落ちることは避けた。

サデインの表情には、焦りの色がはつきりと表れている。

戦神アテナの強さは予想以上だった。

サタンの力を得ていなければ、今の一撃でやられていただろう。

無意識のうちに、背中を冷たい汗が滑り落ちる。

戦神はその名の通り、戦いの神だ。

こと戦闘においては、彼女の右に出る者はいない。

いや、もう一人の戦神アレスならば対抗できるかもしれないが。

幸いアレスは今、所用で外に出ていた。

無敵の戦神は、あまりにも脆弱な少年を見下ろした。

サデインはじりじりと後退していたが、ついに反対側の壁に背が付いた。

逃げることは許されない。

サデインは小さく息を吐き出し、ゆっくりと拳を構えた。

それを見たアテナが獲物を前にした鷹のように剣呑に笑う。

アテナの闘気が一気に膨らんだ。

ビリビリと気迫が伝わってきて、サデインはその場に留まってい
ることさえできなかった。

「う……わあああああ！」

精一杯の声を張り上げてアテナに挑む。

余裕の表情で迎え撃つアテナの目の前で、軸足をスイッチして下段に回転蹴りを放つ。

フェイントのつもりだったが、完全に読まれていた。

アテナは軽くジャンプして易々と躲す。

サディンは直ぐ様体勢を立て直し、右に床を蹴った。

今度は距離を取り、袖の中に仕込んである太い針を投げる。

それはまっすぐにアテナに向かって飛んだ。

しかしアテナは軽く身を捻るだけで針を躲した。

針は何もない空間を虚しく飛び、遠くの床にかすかな音をたてて突き刺さった。

サディンは努めて冷静に次の手を考える。

落ち着け。落ち着け。焦るな。今取り乱したら、きっと生きて帰れない。

サディンは再び針を投げつけながらアテナを回り込むように走る。

アテナは今度は飛んできた針を、金色のガントレットを装着した腕を振って弾き飛ばした。

キンと高い音が鳴る。

サディンはアテナの側面から右の拳を突き出した。

並みの者ならば完全に不意をついた一撃に、為す術なく倒れるはずだった。

しかし相手は戦神アテナ。

優雅とさえ思える動作で振り向き、左手でサディンの拳を受け止めた。

その手でサディンの拳を掴む。

押しても引いてもびくともせず、サディンはその場から逃げられない。

「動きは中々のものだ。しかし、弱い」

アテナが形の良い唇を吊り上げて微笑った。
サデインの背を悪寒が駆け抜け、恐怖の表情が刻まれる。

「私に手を出したこと、後悔するがいい、小僧」

サデインの手を掴んだまま、アテナが右の掌底を繰り出す。
勝てない。と、サデインは直ぐ様悟った。

いくら魔王の力を借りようと、元々の力の差がありすぎる。
掌底が当たる直前、アテナはサデインの表情を見て眉をひそめた。
しかし攻撃は停めることなく、右の掌はサデインの胸に吸い込まれた。

「かはあっ……!!」

重い衝撃と共に、ボキボキと肋骨が折れる音を、サデインは確かに聞いた。

肺から空気が絞り出されるような感覚。

乾いた呻きが自分の声だと気付いたときには、サデインの身体は小石のように吹き飛び、背後の壁に背中から激突した。

衝撃で息が詰まる。背骨が軋む。

壁に罅が入る程の勢いで叩きつけられ、サデインはせり上がってきた血をむせるように吐き出して床に臥した。

ルシエルと時雨はサデインと同じく神殿内に侵入できていた。
サデインとは別の入り口から中に入り、静かに奥を目指す。

「……誰もいないな」

「ミカエルが上手く引き付けてくれているんでしょね」

「……サデインは大丈夫かな」

「平気ですよ。彼は僕よりもずっと強い人ですから」

小声で言葉を交わしながら歩く。

それは内心の緊張を誤魔化すためかもしれない。

二人はどんどん奥へと進んでいった。

このまま行けば、もうじきゼウスの部屋が見えてくる。
そこに、いるのだ。この世界の神が。

ルシエルと時雨は、自らゼウスの許へと向かっている。

ゼウスに直接会い、話をするために。

今ならまだ、話し合いで解決すると信じているから。

こちらの言葉に耳を傾ける可能性は低いけれど、それでも何か行動を起こしたいと、あるとき時雨は言った。

ミカエルやサデインばかりに危険を押しつけて、自分は隠れているなんて許せなかった。

そのことを二人に言えば、当然反対されただろう。

だから、ルシエルだけを説き伏せた。

百年前、たった一人で無謀な戦に挑んだルシエルだからこそ、話すことができたのだ。

ミカエルもサデインも、ジュピターを仲間に引き入れたら、時雨を彼女に保護してもらうつもりでいた。

だから、ルシエルが時雨を連れて神殿へ向かうのを停めなかったのだ。

重い空気が漂う回廊の奥。

分厚い扉から、神の存在感が伝わってくる。

隠そうともしない、神の圧倒的な気配を感じ取り、時雨たちは思わず足を停めた。無意識に息を呑む。

二人はどちらからともなく、互いの顔を見合わせた。

「……怖いのかよ？」

「時雨こそ、脚が震えてますよ？」

緊張を誤魔化すように軽口を言い、彼らは再び足を前に踏み出した。

扉が一步步近づいてきて、ルシエルは取っ手に手を伸ばす。そして静かに引き開けた。

「待ってあったぞ……癒しの力を持つ者よ」

「来てやったぜ、傲慢ジジイ」

広い広い部屋の中、時雨は初めて神と対峙した。

時雨の隣にルシエルが並ぶ。

ルシエルの顔は、心なしか青ざめて見えた。

手を握り締め、ぐっと口を引き結び、何かに耐えるように苦し気な表情を浮かべている。

時雨はそれに気付かず、ゼウスの『説得』を始めた。

「なあじーさん、何で世界を元に戻そうとかするんだよ」

「決まっておろう、この世が偽物だからよ」

「偽物だから何だよ。俺たちはこの世界で生きてんだ！ 偽物とか

本物とか、関係ねえんだよ」

時雨は声を大きくして、一步ゼウスに踏み出した。
ルシエルは動かない。

「何で偽物じゃ駄目なんだよ。俺には、この世界で生まれた奴らには、この世界は本物なんだ！」

また一步踏み出す。

そんな時雨を見て、ゼウスは嘲笑した。

時雨の背後で、ルシエルがびくりと身を竦ませる。

「知らぬ者には解るまいよ。どれ程の苦しみがあったのかを知らぬ、お前たちにはな……」

ゼウスはちらりとルシエルに目を向けた。

白い髭に覆われた口許が、ゆっくりと笑みの形に歪められる。

「のう、墮天使よ……」

ゼウスの声は、ルシエルの表情に恐怖を刻み付けた。

全身に傷を負った純白の天使は、自らの血で赤く染まった翼でその身を支えていた。

はばたく度に鈍く痛みが走る。

腹に開いた穴からは夥しい量の血が流れ、地面に赤い雫を降らせていた。

ミカエルは空中に身を留めることが困難になってきて、仕方なく

ゆっくりと降下する。

満身創痍のミカエル。

その姿を見て、一人の天使がミカエルの後追い地に降りた。

満身創痍のミカエル。

その姿を見て、一人の天使がミカエルの後を追いつ地に降りた。

その場に留まっていた他の天使たちも、皆心配そうな表情で彼の後を追う。

ミカエルは地に足を着けるなり、ふらふらと仰向けに倒れてしまった。

最初に降り立った天使が、慌ててミカエルを支える。

その周りに次々と天使が舞い降り、ミカエルに肩を貸した。

天使たちの肩を借りてやっと立っている状態のミカエルは、未だ空中にいるキューピッドを見上げる。

キューピッドはカタカタと震える手を握り締め、たった今矢を放った小さな弓を抱き締めた。

「あ、アタシ……アタシは……」

混乱したように呟き、その顔は血の気が引いたかのように白い。眼下では大勢の天使たちに支えられながら、立っていることも辛くなったミカエルが、力なく座り込むところだった。

「キューピッド……様……」

かすかに聞こえた、必死に呼び掛けるミカエルの声を聞いて、キューピッドはゆっくりと弓を下ろした。

ここからでは遠くて、ミカエルの声がよく聞こえない。

どうしてそんなに小さな声で話すんだろう、と下を見ながらぼんやり考える。

ああ、そうか。ミカエルは怪我をしている。だから大きな声が出せないんだ。

でも、どうしてそんな死にそんな怪我をしているんだろう。

ああ、そうだ……

アタシが、やったんだ。

「ミカエル……！」

キューピッドは泣きそうな顔で息を呑む。

なんてことをしてしまったのだろう。

心の中いっぱいに罪悪感が押し寄せる。

さつきからミカエルが自分を呼んでいる。

しかし、その声はかすれてしまってよく聞こえない。

キューピッドは急いで地面に降り立ち、ミカエルの傍に寄った。

「あ、アタシ……アタシ、ほんとにわかったの……ゴメンなさい……ゴメンなさい……！」

キューピッドは必死に謝ったが、俯いてしまってミカエルの顔を見ることができなかった。

本当は、いけないことだと解っていた。

自分の願いのためだけに、関係ない人々を、他の世界の沢山の人々を見殺しにするなど、やってはいけないことだと解っていた。

「それでも……それでももう一度、会いたかったの！ ママに会って、謝りたかったの……！」

その日キューピッドは、些細なことで喧嘩をしてしまった。
もうママとは口きいてやらないからー！

そう言い残して家を出た。

そしてその日、キューピッドが家に帰るその前に、悲劇が訪れたのだ。

世界が滅び、母とは二度と会えなくなってしまった。

キューピッドのように、他の世界で生きているのか、それとも、元の世界と共に魂まで滅んでしまったのか……

もしも、他の世界で生きているのなら、会えるかもしれないね。
もしも、世界が元に戻ったら、会えるかもしれないね。

幼い少女の心は、ゼウスのその言葉に縋るしかなかった。

ミカエルは、目の前で謝り続ける少女を見遣る。

もし、自分が同じ立場だったらどうしただろうか。

目の前に可能性の糸があったとしたら、それを手に取ってしまうのではないだろうか。

たとえその糸を引いたことで、他の誰かが不幸になったとしても。
だから……

「私……には、貴女を責めることは……できません……貴女の、
想いは……誰もが、願ってしまふ、当然の心……」

ミカエルは、途切れ途切れになりながらも声を絞り出した。
血に濡れた震える手を、そっとキューピッドに伸ばす。

「貴女、は……心に正直な、だけ……私は、貴女の、そのまっすぐ
な心が……好きですよ。羨ましい、くらいに……」

キューピッドは顔を上げてミカエルを見た。

ミカエルの手を取る。温かい。

今までずっと堪えていた涙が、ぽろりと一粒零れる。

その後はもう、止まらなかった。

キューピッドはミカエルの手を握り締めて泣き続ける。

ミカエルはそんなキューピッドを静かに見つめていた。

しかし、穏やかな時間はそう長くは続かなかった。

ミカエルの傷口からは、血が流れ続けているのだ。

片手について身体を支え、苦し気に肩で息をするミカエルの姿を見て、周囲の天使たちが心配そうな眼差しを向ける。

ミカエルの状態は思ったよりも芳しくない。

腹の傷から血が逆流してきて、ミカエルが咳き込んだ。

その拍子に口から鮮血が飛び散る。

それを見たキューピッドの顔が青ざめた。

「いや……死んじゃやだ！　ゴメンなさいアタシ、絶対ミカエル死なせないから！」

涙を拭ってミカエルの腕を掴み神殿に運ぼうとするのだが、小さなキューピッドの身体では、ミカエルを運ぶことは到底無理だ。

ミカエルの周りにいた天使が、両脇からミカエルを支えて立ち上がった。

キューピッドは彼らの前を飛び、先導に徹する。

神殿に戻れば、ミカエルは助かる。

ミカエルの魂を、新たな器に容れることができる。

だが、ミカエルがそれを拒んだ。

今神殿に戻れば、中にいるルシエルたちが危ない。

この天使たちには、ゼウスの命令が下ったままなのだ。

「だめです……今、戻ったら……」

「ナニ言ってるのよ！ 早くしなきゃ死んじゃうでしょ！」

「しかし……中にいる時雨たちが……」

「あの子たちに手は出させないから！ 約束する、皆にそう伝えるから！ だから、言うこと聞きなさい！」

キューピッドに泣きながらそう言われて、ミカエルは苦笑した。不思議と、この幼い神の言うことならば信じることができる気がする。

ミカエルは静かに頷いて目を閉じた。

ルシエルの顔が恐怖に引きつっている。

時雨はそれを驚いたように見つめた。

何故急にそんな表情をするのか、時雨には解らなかった。

先程までの軽口はどこへいったのやら、ルシエルはただ、黙って青い顔をゼウスに向けている。

呼吸は浅く早く、指先がかすかに震えていた。

「……どうしたんだよ、ルシエル？」

驚きから抜け出した時雨が、ようやく口を開く。

しかし、その声に戻る言葉がない。

今、ルシエルの心を満たしているのは、恐怖という感情。ひたすらに『恐い』と叫ぶ心の言葉だった。

恐い恐い恐い恐い……

何が？ 誰が？

彼が。目の前にいる、神が。

何故？

——だ……め、です……怖い！

心が恐怖に染まっていき、それがまた恐怖を誘う。

どくどくと激しく脈打つ自分の心臓の音を聞きながら、ルシエルは動けなくなっていた。

「ルシエル？ どうしたんだよ！」

時雨が大声で呼び掛けるとわずかに反応するものの、時雨を見ることもできず、視線は一点を見つめたまま動かない。

視線の先を追うと、小柄な老人がさも楽しそうに微笑っていた。ぞわりと背筋が寒くなるような、気味の悪い笑いだった。

「お前、何したんだよ！」

時雨は、自分も恐怖に囚われそうになるのを必死に振り払う。

ゼウスは時雨の問いに、笑みを深くして答えた。

「恐怖をな、植え付けてやったのよ。その堕天使の心にな」

二度と反乱する気を起こさないように。

二度と神に逆らわないように。

恐怖という感情は、容易く人を支配する。

ルシエルの心に植え付けた恐怖の種は、ゼウスたち神を前にすると発芽するようになっていた。

恐怖は増殖し、ルシエルの心を切り刻んでいく。

ここから逃げ出したい。

しかし、それだけはやってはいけない。

時雨を置いて、一人で逃げるなんて。

ルシエルは震える手をぐっと握り締め、唇を強く噛んだ。

挫けそうになる己の心を、激しく叱咤するように。

必死に神の前に立つルシエルを見て、時雨はゼウスとルシエルの間に割って入るように立った。

「おいルシエル！ お前こうなること解っててここまで来たのかよ！」

怒りにも似た時雨の声。

安全な場所に隠れようと言ったルシエルを、この部屋に來させたのは時雨だった。

カエルスに戻る前、ルシエルは時雨に言ったのだ。

ジュピターが仲間になるまでは、安全な場所に隠れていると。

しかし時雨はそれを拒んだ。

ゼウスを説得できるのではないかという、何ら根拠のない夢想のために。

見方によっては勇敢ともとれる時雨の行動が、今はルシエルを苦しめている。

どうしてそんな我儘を言ってしまったのだろうか。

時雨は、自分自身に怒りを感じていた。

これは勇敢ではない。ただの無謀ではないか。

時雨は少しでもルシエルからゼウスを遠ざけようと、ゼウスに立ちほだった。

戦う力を持たぬ子供が、愚かなことよ。

ゼウスは口を開かなかったが、時雨にはそんな神の嘲りに満ちた声が聞こえた気がした。

「……下がってください、時雨。貴方を守るのは、僕の役目です」

背後に聞こえる震える声。

ルシエルが時雨の肩を掴み、後退させようと軽く引く。

その手がかすかに震えていて、自分にも恐怖が伝染してきそうな錯覚に陥る。

だが時雨は退がらなかった。

必死に強がる子供のように、口の端をにとり上げて笑う。

「何言ってるんだよ、ビビってるくせに」

その声にはいつもの元気が感じられない。

ゼウスの放つ威圧感に、呑み込まれている。

すっかり萎縮してしまっている二人に、さらに追い討ちをかけるように、ゼウスは一歩足を踏み出した。

ルシエルが思わず一歩下がる。時雨は動かず、ゼウスをじっと睨んでいた。

「癒しの力を持つ者よ、わしに従え。世界を在るべき姿に戻すために」

「誰が！ そんなのお断りだぜ！」

ゼウスの誘いに、時雨は首を振る。

それを見たゼウスの口許に、より一層暗い笑みが浮かんだ。

時雨のこめかみから、一筋の冷や汗が流れ落ちた。

とにかく、ルシエルがこの調子では、話し合いさえまともにできない。

時雨はルシエルの手を掴んで、部屋の外に出ようと走った。

しかし、扉に辿り着く前に、重い扉が音をたてて閉まる。

押そうが引こうがびくともせず、時雨は焦った顔をして振り返った。

ゼウスがゆっくりと近付いてくる。

時雨はルシエルの手を引いて、部屋の反対側へと走った。

天井の他にも、この部屋には東側に大きな窓がある。そこから外に出ようとしたのだが……

時雨の視界の端に、小さな光が走った。

それに気付いたときには、その光は時雨の足元に突き刺さっていた。

ガン！ というかなり大きな音をたてて、光が突き刺さった場所が挟れる。

そこから小さな火花が散っていた。

ゼウスの放った雷だ。

小さな雷撃だったが、固い石の床には拳ひとつ分程の穴が穿たれている。

時雨は寸でのところで足を停めた。

あと少し前に出ていたら、足を撃ち抜かれていたかもしれない。

「考えが甘いことよの」

ゼウスがゆっくりと口を開く。

「己だけは撃たれぬと思うておったか？」

時雨がのろのろと首を巡らせて神を見る。

「わしが必要としているのは、お主の中に眠る力のみよ。お主の魂には些かの興味もない。寧ろ、邪魔な魂は消してくれようぞ」

言葉と共に、ゼウスを取り巻く気が大きく渦巻いた。

火花のような静電気が走る。

ルシエルは氣力を振り絞り、時雨を庇うように前に立った。

ゼウスがゆっくり手をかざし、そこに静電気が集まり始める。

撃たれる！

と思った瞬間、固く閉ざされた扉が勢い良く開いた。

時雨もルシエルも、ゼウスさえその音に振り向く。

「もうお止めください、お父様」

そこにいたのはゼウスの娘、ジュピターだった。

倒れたサディンを、アテナは怪訝な顔で見下ろした。

攻撃が当たる直前、サディンは確かに微笑っていたのだ。

何かを成し遂げたように、勝利を確信しているように。

それがどうにも不可解で不愉快で、アテナはフンと鼻を鳴らした。

大股でサディンに近付き、片手で胸ぐらを掴んで軽々と引き上げる。

「あ……くう……っ！」

サディンは痛みに呻いて顔をしかめた。

「貴様、何故笑った。何か隠しているのか？」

アテナは容赦なくサディンに詰め寄る。

サディンは苦しげに咳き込み、ようやく声を絞り出した。

「俺の……役目は、あの方を捜し、連れ出すこと……既に、その役目を、果たした」

「何だと？」

途切れ途切れのサディンの言葉に、アテナは眉をひそめる。

「今頃は、もう一人の俺が、あの方を……彼らの許へ連れて行ったこと、だろう」

「貴様、何を言っている！ あの方とは誰だ！」

アテナは苛々と眉を吊り上げて怒鳴った。

サディンは再び、かすかに笑みを浮かべる。

「俺の役目は、ゼウスの娘、ジュピター様を連れ出すことだ」

その言葉を聞いた瞬間に、アテナは驚愕の表情を浮かべた。

掴んでいたサディンを放り出し、神殿の奥へと走って行く。
乱暴に下ろされたサディンは、壁に背を預けて座り込み、痛みを堪えて目を閉じた。

急に開いた扉の音に、時雨もルシエルも、ゼウスさえもそちらを振り向いた。

そこに立っていたのは、エメラルドの長い髪を優雅に揺らし、質素な白いドレスに身を包んだ女性だった。

本来ならば見た者を和ませるだろうほがらかな笑みを思わせるその顔は、今は悲しみと怒りが内包され、きつく口を引き結んでいる。
あの老人の娘とは思えないくらい若く美しいジュピターは、ゼウスとは似ていない鮮やかな新緑色の瞳で時雨たちを見つめた。

「……本当でしたのね。お父様……」

ジュピターはその目をゼウスに向けた。

その眼差しは、まるでゼウスを哀れんでいるようにも見える。

「おお……何故お前がここに？ 決して部屋から出てはならぬと言うておっただろうに」

ゼウスは驚きの混じった声で呟いた。

ジュピターは、後ろに控えていた小さな子供を指し示した。
その子供は人形のように動かない表情で、丁寧な礼をする。
サディンの分身、カストルだ。

「彼が私をここへと導いてくださいました」

サディンは神殿に侵入してすぐに、カストルの探査能力を使ってジュピターの居場所を探った。

そして二手に分かれ、それぞれジュピターのいる部屋を目指したのだ。

途中でサディンはアテナに見付かってしまったが、カストルの方は無事にジュピターを連れ出すことに成功していたのだ。

「お父様……どうか、そのようなお考えはお捨ててください。ヒトは、過去をやり直すことなどできぬのですよ」

ジュピターは静かに語り掛けながら、その瞳をゼウスに向けたまま時雨たちの方へと歩みを寄せた。

ゼウスは困惑した顔のまま、黙って娘の行動を見送る。

ジュピターは時雨たちの前で足を停めた。

「ごめんなさい……貴方たちには、迷惑をかけてしまいましたね」

ジュピターはそう言うのと深々と礼をした。

ジュピターの顔を見つめていた時雨は、こんなときだというのに、何となく照れ臭くなって頭を掻いた。

ジュピターはゼウスに向き直り、静かな決意を秘めた表情でゼウスを見つめる。

「お父様は、私が停めてみせます」

「ジュピター……お前までわしに齒向かうと言うのか」

ジュピターの言葉を聞き、ゼウスは静かに呟いた。

ジュピターは、瞳にわずかな悲しみの色を浮かべている。

娘の嘆きを知り、ゼウスは俯いて小さく肩を震わせた。
深く嘆息し、両手で頭を抱え静かに首を振る。

その口許が、にいつと笑みの形に吊り上がった。

余りに邪惡な笑みに、そこにいた誰もが戦慄を覚える。

ゼウスは、今や歪んだ表情を隠そうともせず、天を振り仰ぎ高らかに哄笑した。

「くはははははあ！ 愚かな娘よ。わしに逆らい、死を選ぶか！」

ゼウスの周囲の空気が渦巻き、静電気が発生して火花が散る。
その目が、剣呑な光を放った。

「わしに逆らう者など、もういらぬ。ここで悔いながら朽ちるがよいわ！」

ゼウスの周囲を取り巻く風は、より一層激しさを増していく。
その身体がふわりと宙に浮き、ゼウスは天に向かって両手を広げた。

掲げた手に雷光が収束し、一振りの光の槍が生まれる。

狂える神は怒りに任せて雷の槍を降らせた。

それは罪人を裁く鉄槌の槍。

その槍が更に数十本も空中に出現し、時雨たちに降り注いだ。

「うわっ！」

時雨は思わず身体を庇うように腕を出す。

しかしもちろん、そんなことで防げる訳がない。

無防備な時雨たちを守ったのは、ジュピターだった。

「護りを……！」

ジュピターの声に応えるように、薄い不可視の障壁が現れる。障壁は風を纏い、飛び来る雷の槍の軌道を逸らした。槍は方々に飛び散り、壁や床に突き刺さる。

相手が娘であろうと、ゼウスは攻撃の手を緩めない。

周囲に散らばった雷の槍が融けるように広がり、全方位から一斉に電撃が走った。

「待つ……」

焦りの表情を浮かべる時雨を守るように、床から壁がせり上がった。

「大地よ……」

ジュピターの声に従い、壁はその場にいた全員を取り囲み電撃を防ぐ。

壁が解かれ元に戻ると、そこを見計らってゼウスが両手を振り上げた。

それと同時に床から太い茨が生える。

茨は意思を持ったように床を這い、驚愕の表情を浮かべる時雨を狙った。

「お護りください」

祈るようなジュピターの眩きと共に、迫り来る茨から宿り木が生え、茨は時雨に触れる前に身動きできなくなった。

「どうしたジュピター。防御ばかりでは、わしは止められぬぞ」

嘲るようなゼウスの声に、しかしジュピターは毅然として言い放った。

「停めてみせます。お父様が、考えを改めるように」

「考えを改めるだと？ はあっはっはっはっ！
なんと愚かな娘よ！」

決意の込められたジュピターの言葉を、ゼウスはさも愉快そうに笑った。

狂気に歪んだ顔を見て、ジュピターは一瞬怯えたような表情になる。

「わしが世界を……真実の世界を甦らせようとしているのは、お前のためなのだぞ」

「な、何を仰っているんですか……？」

予想もしていなかったゼウスの言葉に、ジュピターは目を見開いた。

それは時雨とルシエルも同じだったようで、驚愕のあまり声も出せずにいる。

「お前が、本当にわしの娘だと思っておったのか？」

「何を言っているのですか……！」

ジュピターが声を絞り出すように言う。

ゼウスは血走った目で愛娘を見下ろした。

「わしの娘は、あの世界が滅んだときに命を落とした。わしは救いたいのだ、愛しい娘を！」

だから、お前を造った」

時雨がゼウスの発した言葉の意味を理解するのに、瞬き数回分の時間がかかった。

目の前にいるこの女性は、ゼウスが造り出したものだというのか。だとすると、彼女は元の世界の魂ではなく、この世界で生まれた魂だということなのだろうか。

時雨は、ゼウスの言葉を理解した瞬間に、そう結論づけた。今まで、ゼウスが前の世界に拘り続ける理由が、今一つ解らなかった。

しかし、今のゼウスの言葉がストンと心に落ちてきて、不思議と納得できたのだ。

これも、リリスの感覚を共有しているからだろうか。

だが、その事実が一番驚いていたのはジュピターだった。ずっと自分はゼウスの娘だと思ってきた。疑いもしなかった。それなのに……

「わしは、娘を取り戻したい一心でこの世界を創った。元の世界を模倣することで、行き場のなくなった魂たちを集めようとした。

しかし、娘の魂がこの世界に現れることはなかった」

ゼウスが語る真実に、全員が息を吞んで耳を傾けていた。

ゼウスは待った。

何年も、何十年も、何千年も待った。

娘が戻ってくると信じて。

しかし、いつまで待っても、最愛の娘はゼウスの許に戻ってこない。

何故来てくれないのだ。何が足りないのだ。

ゼウスはこの世界をより一層元の世界に近付けようと、世界を三層に分けた。

まず、死すべき者が住まう地上の上に、自分たちを創造の女神に見立て、神の住まう国カエルスを。

そして創造の女神と対立した魔王が住んだとされる魔界に見立て、アビスを創った。

世界は、確実に元の世界に近付いたが、それでも娘は戻らなかった。

それどころか、死すべき者たちは、ゼウスが知っている史実とは異なる歴史を歩みだしたのだ。

どんなにゼウスが修正を加えようとも、死すべき者——人間は、ゼウスの思惑とは違う方向に進んでいく。

これでは、元の世界を模倣した意味がない。

この世界に娘が戻ることは、不可能なのだろうか。

それならば、元の世界を復活させればよい。

この世界を一度滅ぼし、他の数多の世界の欠片を取り戻し、元々の、真の世界を復活させれば、娘の魂は還ってくる。

ゼウスはそう信じ込んでいた。

世界を元に戻すために、共にこの世界に移り住んだ者たちの協力を得ようとした。

反対する者は、皆アビスに墮として呪いをかけた。

二度と元の世界に戻れぬように、と。

愛しい者に会いたいと願う者たちは、ゼウスに賛同した。

もしかしたらその中には、先にアビスに墮とされた者を見て、ゼウスに恐怖し従った者もいたかもしれない。

ゼウスは、彼らが裏切らないように、見せしめの意味も含めて、アビスへ追放した者に呪いをかけたのだ。

そして、世界復活の計画が始まった。

「計画の内容は、知っておるだろうか？」

くつくつと笑いながら、ゼウスは時雨に目を向ける。

時雨は怯みそうになる己を叱咤して、平然を装った。ここで怯えたら、負けだ。

「ああ……俺たち人間の魂を使って、殺人兵器を作ったんだってな！」

怒りを込めて時雨が叫ぶ。

しかしゼウスはそんな時雨の言葉も、一笑の下に撥ね付けた。

「ほっ、お主たち死すべき運命の者どもを作ったのはわしだぞ？

わしの作ったものをどう扱おうがわしの勝手よ」

「てめえっ！」

憤る時雨を無視して、ゼウスはジュピターに目を向けた。

「お前もそうだ、紛い物の我が娘よ。

わしは、この世界を創ったすぐ後にお前を造った。

娘を模倣し、一からわしが造り上げた。

しかし、この世界にあるものを代用して造ったお前は、やはりわしの娘にはなれなかった。

今までに一番の出来だったお前も、わしに牙を向いておるしのう……」

ゼウスは驚愕に目を見開くジュピターを見て、口の端を吊り上げる。

「神殿前に生えている巨木が、何でできているか知っておるか？」

言いながら、ゼウスは神殿の外、聖樹がある方向を指差した。

あの、庭に生えている大きな木だ。

「あれはのう、ジュピター。今まで造った我が娘の失敗作の集まりなのだよ」

ゼウスのその言葉で、ジュピターは完全に顔色を失くした。

天使たちが聖樹と呼ぶあの大木は、ジュピターたちの屍を養分として成長した木だ。

肉体に欠損のあるジュピター。

容れた魂が気に入らなかったジュピター。

ゼウスに逆らったジュピター。

ゼウスに失敗作だと判断された娘は、木の養分となって、あの木の根元に折り重なっている。

「お前も、失敗だったようだよ」

「そんな……」

目の前の愛娘を棄てることに、最早何の未練もないのだろう。

ゼウスはジュピターの目に浮かぶ涙を見ても、邪悪な笑みを崩すことはなかった。

「嘆くことはない。本物のジュピターが戻ったときに、お前は壊す予定だった。それが早まるだけのことよ」

ゼウスの右手に雷の槍が生まれる。

それがジュピターに放たれるのを、止めることができる者は、誰もいなかった。

カストルにも、ルシエルにも、時雨にも、ゼウスに抗する力はない。

唯一互角の力を持つとされたジュピターも、今や立ち尽くすだけだ。

雷の槍が迫る。

「ジュピター様あつ！」

時雨の知らない声が、室内に響いた。

その声の主は、雷の槍がジュピターに当たる直前に、ジュピターを突き飛ばした。

ひどく、ひどくゆっくりと景色が流れていくように感じた。

時雨たちが見ている前で、突き飛ばされたジュピターが床に倒れ込み、ジュピターを庇ったアテナの腹に、雷槍が突き刺さった。

ジュピターが顔を上げたときには雷槍は消え、アテナの腹からは大量の血が溢れ出していた。

「アテナ！」

ジュピターが悲痛な叫びを上げ、崩れ落ちるアテナを支える。

アテナの腹部には、大きな穴が穿たれていた。

「アテナ……どうして……」

蒼白な顔で呟くジュピターの頬を、一筋の涙が伝う。

アテナは光の消えゆく瞳で、ジュピターを見つめて微笑んだ。

「貴女……を、守る……ことが……ゼウス様、に、言い付か……つた、私の……役目……」

血を零しながら、途切れ途切れになりながら、アテナは話し続ける。

「で、も……それとは、関係……なく……貴女、を……守り……たい……と……」

すべてを言い終える前に、アテナの全身から力が抜けた。

ジュピターは両の目から涙を溢れさせ、アテナを横たえて傷口に手をかざす。

「だめ……！ 死んではだめですアテナ！

私なんかより、貴女が……貴女は、生きなければ……！」

治癒の力を使って傷を塞ごうとするのだが、やはりリリスの力に比べると弱い。

時雨は、その場から動けなかった。

リリスの治癒の力を引き出す方法が、解らないのだ。

ルシエルを助けたときは、無我夢中だった。

時雨はほとんど意識を失った状態で、リリスの力を行使していた。思えば、あのときは時雨の内に眠るリリスが、力を貸してくれたのかもしれない。

あのときはどうやって治癒の力を使ったのか、まったく覚えていないのだ。

目の前で、死にそうになっている人がいるのに、自分は何もできない。

助けられる力があるのに、何もできない。

時雨の中に、自分自身への苛立ちが募る。

「なんと。愚かな奴よの。失敗作を庇って命を落とすか」

「まだ、死んでいません!」

嘲り笑うゼウスの言葉を否定するジュピターの声は、ほとんど悲鳴に近かった。

少しずつだか、アテナの傷は癒えていく。

しかし、このスピードでは、アテナの体力が尽きる方が早いかもしれない。

助けられる保証はない。

「ふむ、小僧。リリスの力は使わぬのか?」

時雨が力の使い方を思い出せないことを知っているかのような口振りで、ゼウスは時雨に問うた。

時雨は答えられない。

治癒の力を使いたい。それなのに、使い方が解らない。

「お、俺は……っ」

握り締めた手が血の気を失っている。目を伏せて俯いてしまった。

あのときはできたのに、どうして今できないんだ……!」

俺は、こんなにも無力だ……

——そんなことないよ。

時雨の心の中で、声が聞こえた。

「……っ!？」

時雨がはっと目を開く。

聞き覚えはないけれど、知っている。

この声は——

——リリス……

時雨は心で語り掛けた。

その声なき声に、魂が応える。

——きみはもう、知ってるはずだよ？

時雨の中にリリスの意識が甦る。

リリスの魂は一つの輪廻を経て時雨の魂に溶け、混ざる。

時雨の中で、何かが弾けた。

「俺は……俺にできることを、やるだけだ!」

その目に宿す力強い意思の光が、まっすぐにゼウスを見上げる。
それでもなお、ゼウスは子供の戯言を聞き流すように笑みを崩さない。

「ふむ、開き直ったところで、お主に何ができるかの」

ゼウスはまだ、時雨の中の変化に気付いていない。

そのまま油断していてくれ……！

場を読み、機を読み、心の流れを読み！ 今の俺なら、できるはずだ！

そして時雨が、口を開く。

慎重に。しかし、大胆に言うべき言葉を選ぶ。

「確かに、俺は何の力もないガキだよ。リリスの力だって、どうやって引き出せばいいのか解んねえよ。

でもな、こんな俺にだって、できることがあるんだ！」

ゼウスは、面白いものを見るような目で時雨を見下ろす。

力の使い方も知らない子供が、何をするのかと観察しているのだ。

ゼウスは、完全に己の優位を確信し、慢心している。

まだ大丈夫だ、今ならば。

時雨は隣にいるルシエルの腕を掴んだ。

ルシエルがはっとして時雨に目を向ける。

時雨の手の平から、暖かい何かが流れ込んできた。

「ルシエル。この中でゼウスを止められるのは、お前しかないんだ。

頼む、力を貸してくれ」

ルシエルは驚いたように瞬きして、震える手を自身の胸元に当てる。

「ほっほ、怯えた堕天使に縋るか。お主も相当な愚か者よな」

胸に当てた手を握り締めるルシエルを見下したように笑い、ゼウスは再度雷の槍を造り出す。

時雨は真剣な表情でルシエルを見つめた。

「ルシエルならやってくれる。俺は、信じてるぜ」

「時雨……」

ルシエルの目が、時雨の視線を受けとめた。

「今度こそ、その魂からリリスの力を引きずり出してくれようぞ！」

ゼウスが生み出した一筋の雷が、時雨に向かって撃ち出された。

雷光が迫る。その瞬間。

何か別の力が、ゼウスの雷を弾いた。

それはルシエルが放った、光の珠だ。

「なんだと!?!」

初めて驚愕の声を上げるゼウスの眼下で、ルシエルが時雨を守るように立っていた。

「馬鹿な……お主に植え付けた恐怖の種は、決して取り除くことはできぬはず……！」

驚きを隠すことができずに、驚愕の呟きがゼウスの口について出た。

ルシエルの顔には、もう恐怖の色は浮かんでいない。いつそ穏やかとすら言える表情で、ルシエルは時雨に微笑みかけた。

「ありがとうございます、時雨。貴方が信じてくれるなら、僕は全力でそれに応えますよ」

時雨は照れ臭そうに笑う。

ゼウスには理解できなかった。

何故、恐怖の種から逃れることができたのか。

ルシエルの心に植え付けた恐怖は、誰にも解けない絶対の呪いだ。つたはずだ。

術者本人であるゼウスにすら、その呪いを解くことはできないようになっている。

それを解いたきっかけは、時雨だ。それは間違いない。

時雨の言葉に感化され、心の力が呪いを打ち破ったのだろうか。

サタンの助力も、それを後押しした要因なのかもしれない。

ゼウスはそう結論付けた。

そうでなければ、恐怖の種の呪いが解けるはずがないではないか。

「ふむ、恐怖の種が消えたからといって、お主にわしを停められるかのう？」

ゼウスは落ち着きを取り戻したようで、長い白髭を一撫でする。
ルシエルは大きく羽を広げてはばいた。
その身体が宙に浮き、足が床から離れる。

「ええ、停めてみせますよ」

ルシエルはきっぱりと言い放つ。
それが戦闘の合図となった。

ルシエルが掌から光の珠を撃ち出す。
サタンの力によって増幅されたエネルギー弾だ。直撃すれば、たとえゼウスでもひとたまりもない。
今までその場から動かなかったゼウスが、初めて回避行動をとった。

高速で飛来する光球を、身を捻って躲す。
老人とは思えない素早い動きだ。

ルシエルは瞬時に次の光球を放った。
以前までは攻撃の前に力を溜め込むタイムラグがあったのだが、サタンの力を得た今では、一瞬でエネルギーを練り上げることができきる。

ゼウスは身を捻った不安定な体勢のまま、ほとんど何の動作もなく雷を生み出した。

ルシエルの光球は、雷によって相殺される。
光と雷がぶつかり、その一瞬だけ室内をとてつもない光量で照らした。

その閃光が消え遣らぬうちに、互いにカウンターの一撃を放つ。
光球と雷槍は交差して標的を狙うが、一撃を放ったと同時にルシエルは下に、ゼウスは上に飛び攻撃を躲した。

一進一退の攻防は続く。否、この戦場で、ルシエルは防御を一度もしていない。

彼は、破壊の大天使なのだ。身を護る術は持っていない。

ひたすらに攻撃することが、ルシエルに与えられた力なのだ。

破壊しか知らぬ天使が、時雨という少年を、そしてこの世界に住まう人間たちを守る戦いに身を投じている。

それはなんと皮肉なことかと、人々は笑うだろうか。

しかしここには笑う者はいない。

ゼウスさえも、今や口許を引き締めてルシエルの攻撃を受け止める。

ゼウスの顔からは、余裕が消えていた。

ここまで互角に闘えるとは、思っていなかったのだ。

ほんの一瞬だけ焦りが過り、それを打ち消すように、ゼウスは雷の矢を放つ。

ルシエルはそのことごとくを気の力で打ち落とした。

「随分としつこいことよの。早う諦めい、若造が！」

「そちらこそ、いい加減隠居なさったらどうですか、ご老人！」

互いに嫌味を投げつけ、それと同時に攻撃も放つ。

雷と光球は空中でぶつかり、盛大に火花が散った。

舞い散る火花に、視界が一瞬奪われる。

ゼウスはその一瞬で標的をルシエルから時雨に変更した。

雷の一撃を、部屋の隅で固唾を吞んで闘いを見守っていた時雨に

向けて放つ。

時雨は突然自分に向かって撃ち出された雷に、驚愕の表情で目を見開いた。

「っ、時雨！」

それに気付いたルシエルが、咄嗟に時雨を狙う雷を撃ち落とそうとする。

しかしルシエルが光球を撃つよりも、雷の方が速い。

時雨には、雷を避ける術がなかった。

雷は凄まじいスピードで時雨に迫る。

だが、雷は時雨には当たらなかった。時雨を護るように飛び出した人形が、左手で雷を打ち払う。

カストルの左腕は、肘の辺りから砕けた。

「カストル！」

時雨の悲痛な叫びが響く。

雷に押されるように後ろに飛ばされたカストルを、時雨が両手で支える。

自分も静電気で腕が痺れるが、そんなことに構っていられなかった。

皆が崩れ落ちるカストルに気をとられた、その一瞬の隙にゼウスが時雨に接近する。

目の前に降り立ったゼウスを目にして、時雨は喉の奥で悲鳴を呑み込んだ。

ルシエルがゼウスを追うが、間に合わない。

「リリスの力を……!!」

ゼウスの血走った眼が目の前に迫り、その手が時雨の首を絞めた。

「……………っ!」

時雨は声も出せず、苦悶の表情を浮かべる。

しかしそのとき、時雨の腕からカストルが抜け出し、低い姿勢から飛び上がるようにゼウスの顎を蹴り上げた。

思わぬところからくらった衝撃に、ゼウスは思わず時雨から手を放す。

ゼウスが後ろによろけた隙について、カストルと時雨を護るよう
にルシエルが降り立った。

人形であるカストルは、痛みを感じない。

片腕を失くしたままでも、まだ自由に動くことができるのだ。
唇でも切ったのか、ゼウスの白い髭の中に赤い粒が見える。

彼は何事もなかったように、髭を一撫でしてそれを拭った。

「ふむ、そやつが人形であったことを失念しておったわ」

「歳をとると、忘れっぽくなっていきませんね」

「何、わしはまだ耄碌しとらんぞ、小僧」

笑顔の中に敵意を込めて。紡いだ嫌味は、部屋の空気を数段張り詰めたものに変えた。

「弁えい、青二才めが!」

先に仕掛けたのはゼウスだった。

雷の槍がまっすぐにルシエルを狙う。

ルシエルは光の珠を放って迎撃した、つもりだった。

光の珠が当たる直前に、雷の槍は軌道を変えてルシエルの頭上に停止し、槍から拡散型の電撃に変化した。

「な……っ!？」

電撃はルシエルを中心に、頭上から降り注ぐ。

側にいた時雨も巻き込まれそうになったが、寸でのところでカストルが突き飛ばし、電撃から時雨を遠ざけた。

しかし真下にいたルシエルには、電撃が容赦なく襲い掛かった。

拡散した電撃は、その分威力は弱まっている。

だが、攻撃範囲が広いため、避けることは難しい。

そして電撃は、一度でも触ればその身の自由を奪う。

人の身体を動かせるのは、脳から送られる電気信号があるからだ。そこにまったく別の電気が送られると、どんなに屈強な人間でも身体が硬直して動けなくなる。

それは天使も同じだ。

電撃を浴びたルシエルは、身を仰け反らせて硬直する。

ゼウスは動けないルシエルの心臓目がけて、二撃目を放った。

肉を穿つ鈍い音をたてて、雷槍がルシエルの翼を撃ち抜いた。神経などないカストルが、咄嗟にルシエルの腕を引いたのだ。

お陰でどうにか心臓に受けることは避けたが、身を躲しきれずに左の羽に当たってしまった。

「くうっ!」

苦痛の呻きが口から漏れる。

翼に開けられた穴から血が溢れ、ルシエルの白いローブを赤く染めた。

この傷では、飛ぶことはできない。

宙すらも自在に駆ける神を相手に、これはかなり不利となる。

ルシエルの表情には、はっきりと焦りの色が刻まれた。

しかしルシエルは、びりびりと痺れる手を握り締め、歯を食い縛ってゼウスを睨み付ける。

圧倒的に不利な状況であれ、その瞳から闘志は消えていない。

「……最高神と言えど、大したことはありませんね。僕一人すら、殺すことができないのですから」

ゼウスを挑発するルシエルだが、その程度で憤慨する程、最高神は未熟ではない。

敵を挑発して隙を狙っているようだが、そんな手段に頼る様子を見るに、奴は相当焦っているのだろう。

その読みに絶対の自信があるのか、ゼウスはその場から微動だにしない。

ルシエルは小さく舌打ちすると自ら動いた。

大きく踏み出し、ゼウスに接近戦を挑むつもりだろう。

虚空に身を置くゼウスを引きずり下ろそうと、高く跳躍して手を伸ばす。

だがその手が届く前に、ゼウスは後ろに退がって距離をとった。ルシエルの手が虚しく空を切る、そのとき。

ルシエルの背から、小柄な人影が飛び出した。

「何！」

ゼウスが驚いて動きを停めた一瞬、ルシエルの背を踏み台にして飛び出したカストルが、ゼウスの頭上から思い切り踵を振り下ろした。

右肩に強烈な一撃を受けて、神が地に落ちる。

背中から床に叩きつけられたゼウスは、衝撃で息が詰まり、すぐに起き上がることができなかった。

「これで！」

「……！」

そこに追い討ちをかけるように、ルシエルの放った光球が叩き込まれる。

ゼウスは咄嗟に雷を打ち出し、相殺を謀った。

しかし、ルシエルはただ光球を撃ち出した訳ではない。

ゼウスの雷が当たる直前、光の珠は拡散し、雨となってゼウスに降り注いだ。

「バカな！」

「最後です！」

ゼウスの驚愕の声と、ルシエルの咆哮が重なる。

降り注ぐ光の雨は、容赦なくゼウスの身体を撃ち貫いた。

相手を手負いの天使と見縊った、ゼウスの慢心が招いた結果だった。

「……っ、おのれ、小童が……！」

全身に傷を追ったゼウスだが、エネルギーを拡散させた分、一つの傷は浅い。

藻掻いて起き上がろうとするゼウスに近寄ってきたのは、時雨だった。

「……もう、やめよう」

ルシエルが制止するよりも先に、時雨はゼウスの傍に膝をつき、その手を取る。

手の平を通して、暖かい何かが、ゼウスの心に流れ込んできた。

「何じゃと……！」

ゼウスが驚愕に声を震わせる。

時雨から流れ込んでくるものに、治癒の力が感じられないのだ。

「どういうことじゃ……？ リリスは……！」

「俺は、リリスじゃない。時雨だよ、じいさん」

怒りか絶望か、ゼウスの震える声とは対照的に、時雨の声は穏やかだ。

時雨が今まで、リリスの力を使えなかったのには、理由があった。巡る輪廻の中で、魂は少しずつ変化する。

生まれ変わったときに容姿も記憶も、性格や技術や運命まで、すべてを受け継ぐ者はいない。

多くの者は記憶だけを受け継いでいたり、容姿と性格を受け継い

だ代わりに記憶を失っていたりする。

時雨の場合は、リリスの記憶のみを受け継いだ。

時雨には、治癒の力は宿っていなかったのだ。

ならば何故、致命傷を負ったルシエルの傷を治癒できたのか？

それはリリスが、ルシエルと交わした約束を果たすために遺した、最後の力だった。

百年後に助けると言った、あの言葉通り、リリスがルシエルを助けるために遺したものだ。

それはゼウスを騙すための罠でもあった。

転生してからたった一度だけ、治癒の力を行使できるように、転生した魂の中に力を封印していたのだ。

ゼウスはその力を嗅ぎとり、時雨の中にリリスの力が眠っていると思い込んだ。

さらにリリスは、ルシエルを救うために封印を解除すると、リリスの記憶が徐々に甦ってくるように、予め仕掛けを施していた。謂わば賭けのようなものである。

一度リリスを失ったことで、ゼウスは性急に時雨を欲する。

そのことがミカエルに疑念を抱かせ、ルシエルに真実を語らせる。時雨を巻き込んだ責任感で、ルシエルは時雨を守ろうとするだろう。

真実が語られた後には、ルシエルの言葉を信じる者が現れるかもしれない。

ルシエルならばアビスの王とも面識があるから、サタンを味方につけることもできるだろう。

そうすれば、ゼウスに対抗できる可能性が出てくる。

本当に確実なものなど、何一つなかった。

百年前にリリスが思いついた、勝てる可能性などないに等しい賭け。

だがリリスは賭けに勝った。

リリスの感覚から感情、記憶までもが甦った時雨だけが、その賭けの内容を知っていた。

だから、こんな勝手な思いつきに付き合わせてしまったルシエルたちには内緒だ。時雨とリリス、二人だけの秘密にしておく。

「あんたがやろうとしてることは……きっと、大事な人を失った人から見たら、正しいことだと思えるんだろうな」

時雨はゼウスの手を握ったまま語り掛ける。

ゼウスは何も言わずに時雨の次の言葉を待った。

ルシエルとカストルは、すぐにゼウスの攻撃に対処できるように、二人の近くに立っているが、時雨の話を邪魔することはなかった。

「でもさ、いくら本物の世界に戻すためだって、切り捨てられる人たちは堪えないよ。」

だって俺たちには、心があるんだぜ？

この世界の人間は、皆あんたらが造った人形なんだろうけどさ、楽しいとか、悲しいとか、あんたらと同じように感じる事ができるんだ」

時雨の穏やかな言葉に、いつしかこの場にいる全員が聴き入っていた。

アテナの傷を塞いだジュピターも、眠るアテナの横で時雨の言葉を聴いている。

ゼウスは小さく口を開いた。

「しかし、この世界は偽りじゃ。真実も知らぬまま、人間はわしの創った虚構に騙されておる」

「ついた嘘がでかすぎて、誰も騙されたなんて思わないさ。疑う奴がいなければ、『嘘』は『本当』になるんだ」

後悔にも似たゼウスの言葉を、時雨は笑って受け入れた。
この偽りの世界を、誰もが本物と信じて生きているのだ。

固く閉ざされたゼウスの心に、暖かな時雨の心が触れる。

今までずっと、気の遠くなるような時間を、最愛の娘を失った悲しみの中で過ごしてきたゼウス。

その悲嘆が心を閉ざし、娘を思う狂愛で世界を取り戻そうとした。悲しみと狂気に塗り固められた心が、少しずつ溶けていくのが判る。

まるで、時雨が心の傷を癒しているようだと感じた。

そしてゼウスは、初めて気付いた。

リリスの力は失われてはいなかった。生まれ変わり、変化したのだと。

リリスが持っていた身体の傷を癒す力は、時雨の中で心を癒す力に生まれ変わっていた。

先程ルシエルから恐怖の種が消えたのも、時雨の心を癒す力が作用したからだ。

愚か者と見下していた人間に、心を救われたという事実が、ゼウスは氣に入らなかった。

元の世界を模倣して造ったはずの世界は、いつも自分が思った方向には進んでくれない。

まったく、この世界の人間ときたら、わしの手の上にいるはずな

のに、気付くと好き勝手に奔走している。

「嫌になるわい」

心の呟きは、知らずゼウスの口を突いて出た。

「な、なんだよじいさん。そりゃ俺みたいなのに手え握られるのは嫌かもしれないけどさ……」

ゼウスの呟きを聞き取った時雨が、ばつが悪そうに目を泳がせた。自分だって、どうせ握るなら爺の手より若いお姉さんの方がいい。

「そんなこと言っておらんよ。自ら選択肢を捨てたわしが嫌になると言ったんじゃ」

ゼウスはそう言って静かに笑った。

その顔は、この世界の人々を慈しみ愛する、神の笑顔だ。

「わしは、娘がここに帰ってくることを待つばかりじゃった。

何故、自ら逢いに行かなかったのか……歳をとると、動くのが億劫になるからかのう……」

ゼウスは時雨から手を離し、一人で立ち上がった。

皆が見守る中で、傷だらけの神は穏やかに微笑む。

「この世界のことは、お主たちに任せるとするかの。わしはもう引退じゃ」

そう言うとは好意満面とした顔から一転、人を食ったような笑みを浮かべて、何もない空間に一枚の大きな鏡を喚びだした。

ゼウスは躊躇わずに鏡に向かって歩きだす。

するとその身体は扉をくぐるように、鏡の中に入り込んだではないか。

時雨たちが驚いて駆け寄るが、誰も鏡の中に入ることはできなかった。

時雨の手が、鏡の表面を叩く。

「おい、じいさん！」

「何じゃ？ わしは娘に逢いに行くんじゃない。邪魔するでない」

「解ってるけど、ここの後始末とか……」

「わしはそこまでお人好しじゃないわい」

ゼウスはからからと愉快そうに笑い、時雨たちに背を向ける。

するとゼウスが入った鏡は、まるで床に融けるように消えてしまった。

鏡が消えて完全に姿が見えなくなる直前、「すまんかったのう」と呟く小さな声が聞こえたような気がした。

エピローグ

ゼウスが去った後は、瞬く間に時が過ぎていった。

今回の事件がこんな早く片付いたのは、主要な神々が運良く出払っていたことが一つの要因だろう。

ひょっとしたら、それすらもリリスの計算通りだったのかもしれない。

ルシエルたちに与えられたサタンの力は、翌日には身体からすっかり抜け出ていた。

彼らは今、過ぎた力を行使した副作用で、物凄い疲労感と筋肉痛に唸されている。

ミカエルだけは、器そのものを取り替えたのでピンピンしていたが。

ルシエルとサディンは、未だ病院のベッドの上だ。

アテナも順調に回復していると、ジュピターが時雨に教えてくれた。

事件の後、本当の意味で一番苦労したのは彼女だろう。

ゼウスに代わってカエルの指揮を執り、神々や天使たちに、真実をすべて打ち明けた。

ゼウスに賛同していた神からは激しく非難されたが、ゼウス自身が考えを改めたことと、一番幼い神であるキューピッドにたしなめられたこともあって、表向きはこの世界の存続を維持する方向で落ち着いた。

それについては、これから少しずつ話し合っていくのだろう。

アビスとの関係も見直していく予定らしい。

しかしそれは、ひとまずカエルスの中が落ち着いてからになるのだろうか。

そんな忙しい政務の合間に、彼女は時雨を身体に還す準備も進めてくれた。

あのとき、ルシエルを撃った雷が残った魔虫を全滅させていたのだ、後は身体と魂の結びつきを調整するだけだった。

実は時雨は完全に死んでいた訳ではなく、仮死状態にあったのだ。魔虫が孵化した後も地上に留まるのは、犠牲者の――今回の場合は時雨の――身体と魂を結ぶ糸を食べるためだ。

その糸を食い千切られてしまうと、いくら魔虫を倒しても、魂が身体に戻れなくなってしまう。

魔虫の退治は終わっていたので、身体と魂の波長が合う瞬間を見計らい、時雨を地上へと帰すだけで、時雨の身体は目覚めるだろう。

そして時雨は今、地上にある己の身体に還るため、天国の外にある、あの大木のゲートの前に立っている。

ゲートは相変わらず不気味に赤黒く渦巻いており、それを見た時雨は少しだけ嫌そうに眉間に皺を寄せた。

時雨の隣には、ミカエルが立っている。

本当はルシエルが見送りに行くと言っていたのだが、身動きがとれない状態なので、ミカエルが代わりに来たのだ。

「お別れ、だな」

「また、逢えるさ。君が寿命で死んだときに」

「そういや、そっか」

時雨は小さく笑って鼻の頭を指先で搔いた。

二人の間を、風が吹き抜けていく。

時雨がここに来てから、まだ一週間も経っていないのだが、まるで何年もここで過ごしたような錯覚を覚えた。

去り難い感情に捉われて、時雨は中々地上へと踏み出せない。

「……ああ、ルシファーから伝言があったのだ」

不意に思い出したように、ミカエルが口を開いた。

時雨は迷っていた足を停めて、ミカエルを見る。

「ルシエルから？　なんて？」

「『もう貴方のお守りは疲れたので、当分こちらには来ないでください』だそうだ」

ミカエルは伝え終わると、少しだけ可笑しそうに笑った。
時雨もつられて笑みを浮かべる。

「なんだよそれ」

「奴らしいだろう？」

ひとしきり笑い合って、ミカエルは時雨に右手を差し出した。
時雨はその手をしっかりと握り返す。

「またな」

「達者でな」

短く言葉を交わして手を離れた。

「あ、そうだ。俺からも伝言、いいか？」 ゲートに入る前に、時雨は振り返って言った。

「『世界一の長寿になって自慢してやるから、楽しみに待ってる』
って」

「ああ、承った」

ミカエルがしっかりと頷くのを確認して、時雨は意を決したようにゲートに飛び込んだ。

以前のように落ちていく感覚はなく、何かに引っ張られているような感覚。

やがて目の前が真っ白になって、何も見えなくなった。

まるで、白い霧に覆われているかのように、頭がぼんやりしている。

自分の身体は酷く重く、指一本動かせなかった。

「……………！」

誰かが、近くで自分を呼んでいる。

時雨は、一度瞬きをしてゆっくりと目を開けた。

最初に目に飛び込んできたのは、泣きながら自分を見つめる母の顔だった。

時雨は、病院のベッドに寝かされていた。

登校途中で事故に遭い、五日も意識不明だったそうだ。
後からそう聴かされた。

意識を失っていた五日間のことを、時雨はすべて覚えている。
しかしそれは誰にも言わないつもりだ。

父も母も友人も、皆この世界が偽物だったなんて知らないのだから。

近いけれど遠いところにいる友に再び出会える日は、何十年、或いは百年先かもしれない。

そのときに胸を張って精一杯生きたと言えるように、時雨は今、
毎日を全力で楽しんでいる。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2311i/>

TRUE ANGEL

2010年10月10日06時12分発行